
仮面ライダーディケイド～私たちの救世主様～

なるみやなるち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーディケイド〜私たちの救世主様〜

【Nコード】

N6868N

【作者名】

なるみやなるち

【あらすじ】

ディケイドに物語は存在しないはずだった。しかし彼の存在を強く思い続ける者たちによってディケイドの物語はこれから永久に紡がれていく。破壊の物語は創造の物語へと形を変えて。

K A M E N R I D E 0 0

紡がれる物語（前書き）

やっぱりディケイド大好きだ。で、始めてしまった。ディケイド×多作品。完結目指して頑張ります。

ライダー大戦は終わった。破壊者であるディケイドによって全てのライダーが破壊され、彼らが人々の記憶に留まることで世界が滅びる未来は防がれた。

防がれたものの、代償として破壊者・ディケイドはその存在が世界から消えることとなった。何故なら、ディケイドに与えられた使命は破壊する事のみであり、ディケイドに物語は存在しないから。使命が終わればただ消えるだけ。

違う、そうじゃない。ディケイドにだって物語は在る。そう信じただ存在が居た。彼等は信じて疑わない。ディケイドに物語は在る。これまでが無かったのであればこれから綴って行けばいいだけだと。そう信じて疑わなかった。

世界がそれを認めたのかどうかは分からない。だが事実としてディケイドは物語を綴ることを許され、再びディケイドの道は開かれた。ただしディケイドが往くその道は破壊のそれでは無く、永久とわに紡がれることになる、通りすがりの仮面ライダーの道。

スーパーショッカーが生み出したネオ生命体に変異し、最強最後の敵としてディケイドとWの前に立ちはだかったアルティメットD。

その存在はとにかく異質で、頑強そうな巨体からは想像出来ないほどの高速移動を駆使した攻撃を繰り出し、胸部からは、一国を滅ぼすほどの威力を有する分子破壊光弾『アルティメットボム』を発

射し、デイケイドとWを同時に相手にしながらもその圧倒的な力で翻弄した。

されども悪は滅びる運命にあるのだろうか。デイケイドと、彼の能力によってファイナルフォームライドし、サイクロンサイクロンとジョーカージョーカーとなった3人の仮面ライダーが放った『トリプルエクストリーム』の前に、アルティメットDは破れ去った。

それからしばらくの月日が流れた。デイケイドと共に旅をした仲間たちは元居た世界に戻り、元通りの生活を送っている。デイケイド曰くコソ泥さんは相変わらずお宝も止めて世界を渡り歩いているが。

そしてデイケイドもまた、写真館を離れ一人世界を悠々自適に旅していた。全ては、デイケイドの物語を綴るために。

青年の目の前にはまるで、いやむしろ城だと形容する以外に言葉が見つからない圧倒的な存在感の建物があった。

「何だこれ。まるでどっかの国の城じゃねえか。どうせ住んでるやつはロクでもない奴だろうがな」

まだ見てもいない住人、というかこの城の主であろう人物を貶している。しかしそんな事に然して興味も無いのか、青年の視線は既に自身の服装に行っていた。

「これは・・・軍服か？」

青年は自身の服装を見る限り、軍服以外の言葉が見つからなかった。上下白で統一され、金のボタンで止められている。感じからしてそこそこの階級の軍人が着るような服であった。

「城に入れば何か分かるかもな」

青年の前には大きな扉が存在しており、反対側を見れば長い道のようなものが続いている。

「滑走路か？ 家用機まで持ってんのか、贅沢な奴だ。ま、こっか

ら入っちまっても大丈夫だろ」

結構楽観的に決めているが大丈夫だろうか。そうこうしている内に青年は大きな扉へ入って行ってしまった。

中に入ると、ハンガーのようになっていようで辺りは薄暗い。しかし決して見えない訳でもなく、あくまで外と比べると、というだけである。

「なんだこれ？」

青年が周囲を見回していると、今まで見た事の無いユニットのが複数置かれていた。脚くらいの長さのあるユニットが2つ1組で固定されている。何に使うものなのか全く見当がつかず、不思議そうに見たり触ったりしていると、突然ハンガーに声が響き渡った。

「あなた、そこで何をしているの！」

「ん？」

青年が振り返ると、少し離れた位置に赤い髪をした女性が仁王立ちしている。そこまでは良かったのだが、その女性の下半身がありえないことになっていた。

「おい、ズボンかスカートくらい穿けよ」

「ズボンなら穿いてるわ。それよりあなた、何をしているのか聞いているのだけど」

『いやいや、ズボン穿いてないだろ』と、青年は心の中で思いきり突っ込みを入れていた。そんな彼を置き去りにして女性はどんどん近付いて来る。そしてかなり近くまで来た時、青年は確信を得た。『絶対に穿いてない』という確信を。

「お前、どうみても穿いてないだろうが」

「しつこいわね。穿いてるって言うてるでしょう」

「いや、それどう見てもパンツだろ」

「ズボンよ」

（ズボン？パンツだろ）

女性は青年との問答がどうでも良くなったのか、さっさと話題を切り替えてきた。

「もういいわ。それよりあなた
来る事になっていた扶桑の？」

その服・・・もしかして今日

「扶桑？」

「あら、違うのかしら」

「い、いや。違わねえよ」

(面倒はごめんだからな。話適當合わせるか)

「えーっと書類は・・・無いわね」

女性は手元にあつた資料をペラペラめくって青年の情報を探して
みるが、それらしきものは見つからなかった。彼女は少しばかりど
うするか思索している様子を見せた。

「あなた名前は？」

「ああ、俺は」

破壊は創造へと形を変え、そして今、その無限ともいえるページ
を埋めて行くための終わらない物語が紡がれ始めたのである。

K A M E N R I D E 0 0

紡がれる物語（後書き）

ご意見・感想頂けると嬉しいです。

KAMEN RIDE 01 パンツはスボン！これ常識（前書き）

書いてたらいつの間にか長くなっていた。

あとがきでは作者のSW好きなキャラベスト3！

これまでの仮面ライダーディケイドは。破壊者である運命を受け入れた士。その使命を果たし、物語が存在しないディケイドは人々の記憶から消え、その存在は全ての世界から消え失せた。

しかし士は此処に居ると信じた者たちによってディケイドの存在が世界に認められ、破壊者としてではなく通りすがりの仮面ライダーとしての物語が真つ白なページに綴られ始めた。

「おい、ズボンかスカートくらい穿けよ」

「穿いてるって言ってるでしょう」

「あなた名前は？」

「ああ、俺は」

自由気ままに世界を旅していた士が辿り着いた次の世界で、いきなりパンツ丸出しの女性と出会った。この世界はどのような世界なのか。ディケイドの物語を綴る旅はまだ始まったばかりである。

大学で講義が行われる様な大きな部屋に青年と彼女達は居た。学校であれば教壇とでもいうべき中心部分に青年と、彼がハンガーで出会った女性が立っており、席に付いている10人の少女たちは彼らへと視線を集中させている。

「皆さん、本日付けでストライクウィッチーズに加わる事になりました、門矢士少佐です」

「少佐？俺が？」

「ええ、違ったかしら？」

「いや、別にそう言う訳じゃ」

（驚いちまったぜ。俺が少佐なんて低い階級だつてことにな）

「どうやらこの青年　　士は自分の階級が少佐だということが余り気に入っていないようだ。少佐ならそれなりに良い地位だと思うのだが、どうにも不服な程低い地位らしい。士がそんな事を考えているとはつゆ知らず、赤い髪の女性は紹介を続ける。

「彼は扶桑皇国出身で、扶桑が開発した新兵器の試用者として短期間加わるという事になっています」

「新兵器？私はそんな報告を受けていないぞ、ミーナ中佐」

「美緒、あなたが知らないのも無理は無いわ。扶桑の上層部が極秘で開発した物らしいの」

「私にも、か・・・」

「なあ、そんな話よりまずは自己紹介が先じゃないのか？俺はお前たちの事何も知らないぞ」

「あ、そうだったわね。ごめんなさい」

赤い髪の女性と眼帯をした女性が話し始めたが、終わりそうになったため士は横やりを入れて終わらせた。名前も知らないのでは話をするのにも一々不便で仕方なかったのだ。

ちなみにその新兵器とやらについては士自身も全く身に覚えがない、というか在る筈がないのだが、どうやら自分が試用者であるらしいのは間違いないようだった。しかしすでにこの時点で士は『新兵器なんか俺知らね』と投げ出していた。

「私はミーナ・デイトリンデ・ヴィルケ中佐。第501統合戦闘航空団・通称『STRIKE WITCHES』の隊長をしているわ。彼女達はここの部隊に所属するウィッチで、坂本美緒少佐、ゲルトルート・バルクホルン大尉、シャーロット・E・イエーガー大尉、エーリカ・ハルトマン中尉、ペリーヌ・クロステルマン中尉、サーニャ・V・リトヴァク中尉、エイラ・イルマタル・ユーティラ

イネン中尉、フランチェスカ・ルツキー二少尉、リネット・ビシヨ
ツプ曹長、宮藤芳佳軍曹です」

「名前長すぎだろ」

「一度で覚えるとは言わないわ」

「ああ」

ミーナによる各隊員の紹介が行われた直後、自称ナルシストはこ
の部隊が様々な国の人間で構成されている事に気付いた。

軍隊と言えば普通は各国がそれぞれ独自に持っているものであり、
連合国家だったりしない限りはありえない。

もっとも、この国が連合国家でないという確証は無いし、それ以
前にこの国の名前すら知りもしないが。色々疑われたりするの
は面倒なので、とりあえず適当に話を合わせておく土だった。

「今日来たばかりでまだ慣れないでしょうから、そうね・・・宮藤
さん、色々助けてあげてね」

「えっ！？わ、私ですか」

「同じ扶桑出身だし、よろしくね」

「は、はい！頑張ります」

「という訳で、何か分からない事があつたら彼女に聞いてね、門矢
少佐」

「別に必要無いけどな」

「あう・・・」

「ま、まあそう言わずに、ね？」

「分かったよ」

早い話が士の世話係を任された宮藤芳佳は何故か嬉しそうな顔を
していた。

その後、ミーナが手をパンパンッと叩いて解散を告げると各々は
部屋を出て散り散りになって行った。そんな中、芳香ともう一人、
胸の大きな少女が士の元へとやって来た。

やっぱり2人もパンツ丸出しの格好をしている。『いや、むし
る宮藤のはスク水っぽい様な・・・』などと士が考えていると、2

人はもう彼の目の前まで来ていた。幸いにも、2人が土の視線が何処に向かっているのかに気付く事は無かった。

「あの」

「何だ？」

「私、宮藤芳香って言います。こっちは友達の」

「リネット・ビツシヨブ曹長だろ？」

「お、覚えてたんですか！？」

「ああ」

「さつきは覚えられないって言ってたのに」

「んなこと言ったっけか？」

「言ってたじゃないですか」

芳香が乗って来やすい性格をしていると直ぐに分かった土は彼女をからかってしらばっくれていたのだが、芳香はその事に全く気付いていなかった。そんなやり取りが少しだけ続くと、芳香の隣に立つリネットが申し訳なさそうに口を挟んだ。

「あ、あの、芳香ちゃん。基地を案内するんじゃないの？」

「え？ああ！そうだった！ありがとうリーネちゃん」

「リーネ？あだ名みたいなものか？」

「あ、はい。門矢少佐も良ければ私の事はリーネって呼んでください」

「気が向いたらな」

「じゃあこれから基地の案内に」

「そんなのはいい。それよりも聞きたい事がある」

「あ、はい。何でしょう？」

「とりあえず場所を変えるぞ。ここは何か落ち付かねえ」

場所を変えると告げた土は、2人の返答も聞かずに部屋を後にした。さつきと出て行ってしまった土を茫然と見つめていた2人は、ハッと我に返ると慌てて後を追った。

士の紹介を終えた後、隊長の執務室には3つの影があった。この部屋の主であるミーナと右目に眼帯をしており、何故か背中に日本刀らしきものを携えている黒髪の女性　　坂本美緒少佐、微かに赤みがかったダークブラウンの髪を首元で2つに縛っている女性

ゲルトルト・バルクホルン大尉だ。

当然のことではあるが、彼女たちも肌を覆う面積が極めて少ないズボンを着ていた。

「それでミーナ中佐は扶桑の新兵器というのが何なのか知っているのか？」

「いいえ、私も知らないわ」

「ミーナ中佐も坂本少佐も知らないとなると、門矢少佐に直接聞くしかないな」

「待つてトウルデー、そんないきなり」

「しかしウォーロックの例もある」

「それは・・・確かにそうだけど」

ウォーロック。ブリタニア軍空軍大将マロニー氏が捕獲したネウロイのコアを使い、軍上層部にも秘密裏に製造した無人人型航空兵器である。航空機に変形して高速飛行が出来るうえ、機銃だけでなくビームまで打つ事が出来るという、圧倒的な戦闘力を有していた機体だ。

実験段階のままを実戦に投入され、はじめの内は多数のネウロイを撃破、巢から大量に出てきたネウロイに対してコアを同調する事で指揮系統を統括し支配下に置くことができる『コアコントロールシステム』にて同士討ちをさせるなど善戦するも、壊滅させた直後にウォーロックが自我に目覚めて暴走、近くを航行中の赤城やウィッチーズ基地などに攻撃を始めてしまった。

一時はリーネの狙撃によって撃墜されるも、共に沈没していた赤城と融合し、ネウロイでもウォーロックでもない『別の存在』と化した。その後、『それ』は『STRIKE WITCHES』の猛

攻を受け、ウォーロックのボディはルツキー二の『巨大弾丸』に跡形もなく吹き飛ばされ、最終的にはリーネ、ペリーヌと共に内部に突入した芳佳がコアを破壊し、赤城と共に崩壊して幕を閉じた。

こんな事があったのだから、ミーナたちが極秘に開発されたという新兵器に対して疑念を抱かない筈がなかった。

「まだ証拠がある訳ではないわ」

「ではどうするのだ？何かあってからでは遅いぞ？」

「そうね・・・とりあえずは暫く門矢少佐の動向を監視しましょう」

「そうだな。それがいい」

「怪しい動きがあつた時は？」

「その時は拘束しても構いません。私が責任を持ちます。いいわね、トウルデー？」

「分かつた」

ミーナの意見に2人は賛同し、暫くの間士を監視するということで一応の決着が着いた。ミーナが『この事は他言無用』と付け足した事を聞いた2人は、頷いて執務室を後にした。

土の場所を変える提案によつて、3人は土の部屋に集まっていた。それぞれが椅子やベッドに思い思いに腰掛けている。そしていよいよ土が質問をするのか、2人に真剣な表情を向けている。

「なあ、お前らが穿いてるそれつてパン　　下着だよな？」

「何言つてるんですか？ズボンですよ」

「いやいやいやいや、おかしいだろ。特に宮藤、お前のそれどう見てもスク水だろ？」

「ズボンです！」

「・・・リーネ、マジなのか？」

「ええ、そうですけど。もしかして知らなかつたんですか？」

「いや、まあそんな事はないが・・・」

リーネまでもが肯定した事により士は思わず『俺の常識がおかしいのか？いや、おかしくないだろ』と、頭の中で自問自答していた。しかしこの隊の隊長であるミーナまでもがズボンだと肯定していた事を思い出した士は、この世界において女性のパンツはズボンなのかと認めざるを得なかった。

ちなみに、光写真館に帰ったらナツミカンにパンツはズボンだということ教えてやろうと思っていたとかいなかったとか。もしそんな事を言えば、光家秘伝・笑いのツボを押されるのは目に見えていたが。

(よし、俺の正体がばれないようにさりげなく探りを入れるか)

「それにしても色んな国の奴が一つの軍隊にいるってのは結構凄いいモンだよな」

「そうですね」

「でもネウロイに立ち向かうには世界中が力を合わせないと」

(ネウロイ?)

士の眉毛がピクリと動いた。探りを入れ始めて5秒、いきなり釣れた。余りに簡単すぎたため少々拍子抜けだったが、とりあえずその『ネウロイ』という存在を倒すために各国が協力し合っている、ということは何となく分かった。

『ネウロイ』について士が探りを入れようとしたところで芳香とリーネが急に立ち上がった。

「ああ！わ、忘れてた！」

「すみません少佐。私たち皆のお昼の支度をしないといけないんです」

「あ、ああ、そうか」

「お話はお昼が終わってからということ。失礼します」

「失礼します。行こうリーネちゃん」

突然の事に茫然としている士を尻目に、2人は慌ただしく部屋から走り去って行った。数秒後、残された士は『まあ仕方ねえか』と、再起動に成功していた。

再起動に成功した後、土は基地を気ままに探索していた。廊下を歩いていると前から青味掛かったシルバーブロンドの少女と、プラチナブロンドの少女が眠そうな目をして歩いて来た。

「確か門矢少佐でしたよね？」

「ああ。サーニヤ・V・リトヴァク中尉とエイラ・イルマタル・ユ―テイライネン中尉だな？」

「そうだけど・・・よく覚えてたナ、私たちの名前」

「たまたまだ」

「たまたまでフルネーム覚えてるって・・・変な奴ダナ」

「エイラ、上官に向かってそんな言い方しちやダメよ」

「う”・・・わ、悪か」

「エイラ」

一応上官である土に抑揚が余り感じられない口調でタメ口を使うエイラ。そんな彼女を、今直ぐにでもその存在が壊れてしまうと思える程儂げな雰囲気少女　サーニヤが咎める。同じ中尉という階級でも、人間関係ではサーニヤの方が圧倒的に上らしい。

「し、失礼しました門矢少佐。これでイイダロ？」

「エイラったら。門矢少佐、エイラが失礼しました」

「別に構わねえよ、タメ口でもな」

「ほら、コイツもこう言ってるし」

「コイツって言っているとは一言も言っていないけどな？」

「タメ口でも良いって言ったダロ？」

「それとこれとは別だ」

「ケチな奴ダナ」

エイラは口を尖らせて物凄く不服そうな顔をしていた。とはいえサーニヤが隣に居る以上、いつもの調子で居る事は出来なかった。

「それにしてもお前ら眠そうだな。徹夜で遊んだのか？」

「そんな訳無いダロ」

「私たち夜間哨戒明けなんです」

「だからこれから寝るところなんだヨ」

「そうか、それは邪魔したな」

「いえ」

「じゃあな少佐」

夜間哨戒で本当に眠いのか、サーニヤとエイラはさっさと自室へ戻って行った。2人と別れた士は、サーニヤたちと話を少し前から誰かの視線を感じていた。

（誰かに見られてるな。一体誰だ？殺気みたいなもんは感じねえから、多分見張ってるってところか。ま、俺を信用できないって奴がやってるんだろうな）

監視されているというのはあまり気分がいいものではないが、特に何かをして来るような気配も無く、あくまで監視をしているだけのようにあると考えた士は、その人物に構わずに基地内の探索を再開するのであった。

思わず耳を塞ぎなくなるほど大きな警報が基地に鳴り響いている。軍隊の基地でこんなものが鳴るといふ事は、これ即ち緊急事態と言ふ事を表しているに他ならない。

「門矢少佐は今日来たばかりで、ロクに私たちとの連携をとれないから待機だと言っているんだ！」

昼食の準備をしていた芳香とリーネが少し遅れてハンガーに到着した。そこで2人が目にしたのは言い争いというか、一方的に土に突っかかっているように見えるバルクホルンだった。

「あの、シャーリーさん。一体どうしたんですか？」

「おお宮藤、遅かったな。どうもこうも、バルクホルンが門矢少佐の出撃に反対してるんだよ」

「ううゝ私は扶桑の新兵器っていうのが見たかったのに」

「仕方ありませんわよ。大尉の言っている事は事実ですもの」

芳香が現状を尋ねたのは『グラマラスシャーリー』ことシャーロット・E・イエーガー大尉。その通称通り、素晴らしいスタイルをしている。

ついでに、シャーリーの隣に居るお子様 もとい少し浅黒い肌をしている少女はフランチェスカ・ルツキー二少尉。さらに彼女の隣に居るメガネは、いやメガネを掛けた少女はペリーヌ・クロステルマン中尉だ。

シャーリーから現状の簡単な説明を聞いた後、再び士たちに視線を戻すとまだ揉めていた。バルクホルンの後ろに居る超絶金髪美少女 エーリカ・ハルトマン中尉は『どーでもいいけどネウロイは？』と呟いているが、バルクホルンには届かなかった。

「2人ともやめなさい」

「「ミーナ中佐」」

「門矢少佐、トゥルーデの言う事にも一理あるわ。今回、貴方には出勤待機を命じます。宮藤さんとリーネさん、貴方たちもです」

「は、はい！」

「分かりました」

ミーナが芳香とリーネを一瞥し、2人が命令を受諾したことを確認すると土へと顔を向けた。

「門矢少佐もいいわね？」

「中佐からの命令じゃ仕方ねえな。ま、せいぜい頑張ってくれよ？バルクホルン大尉」

「貴様！私を馬鹿にしているのか！？」

先程からバルクホルンにゴチャゴチャ言われていた土は、憂さ晴らしとでも言わんばかりに挑発的な態度を取った。それが気に入らなかったバルクホルンは激昂し、今にも殴りかかりそうになっている。そんな彼女を止めたのは坂本少佐だった。

「やめるバルクホルン！今はネウロイが先だ！」

「門矢少佐、この戦闘が終わったら私の執務室に来なさい。トウル
ーデ、あなたもよ」

「・・・分かった」

「門矢少佐？」

「・・・分かったよ」

ミーナが言った『執務室に来なさい』というのは『こつてり絞つてあげましょう』と同義である。

此処だけの話・・・という訳でもないが、普段柔和なミーナは怒ると滅茶苦茶怖かったりする。それはもう結構やりたい放題しているハルトマンやルツキーニでさえ、青ざめて震えあがるほどに。

「ネウロイはもう基地の傍まで来ている。急ぎ出撃だ！行くぞ！」

坂本少佐の号令に従い、出撃するメンバーは最初に土が此処に来た時に見つけた2つで1組となっている機械に足をつ込んだ。足元に魔法陣らしきものが出現したかと思うと、彼女たちが宙に浮かび上がった。そしてそれぞれが銃器もってハンガーから飛び出して行った。

空には赤い閃光が走り、青い光がそれを受け流す。そして銃声が鳴り響いている。ミーナたちが出撃した後、土たち待機組はその後を追って滑走路へと来ていた。芳香たちはハンガー内で待機しているようにしていたが、土が出て行ってしまったため彼を1人にする訳にもいかず、付いて来ざるを得なかった。

「あれがネウロイか」

土の目には、黒くて大きな物体が浮かんでいる様子が映っていた。彼にとって飛行機のような形をした『それ』はただそんな形をしているとしか映っておらず、大した脅威ではないように思えた。

当然それは『あくまで土にとって』であり、この世界の人間からすればこれ以上ないほどの脅威なのである。

「え？知らないんですか？」

「え、ああ、実物を見るのは初めてだからな」

「そうだったんですか」

（そんな人が新兵器の試用者って大丈夫なのかな？）

芳香はそこはかかない不安を感じたが、士が上官である手前口にする事は出来なかった。

それにしても、戦闘が始まって少し経つが士にはネウロイがダメージを受けているようには見えなかった。

「このネウロイ、何て硬さなの！？装甲が全然削れない」

「機銃でダメとなるとこれしかないだろう！つおおりやあああああ！」

バルクホルンが持つていた武器の前後を逆に持つと、ハンマーの如くネウロイに叩きつける。

ウィッチは各々が固有魔法を持っており、彼女の場合は怪力の持ち主となる。その力は凄まじく、大の男をたやすくのしてしまったり、地面に埋まった鉄骨を引き抜いてしまうほどである。

「何！？」

渾身の一撃を叩きつけたバルクホルンだったが、それでもネウロイの装甲を僅かに凹ませる程度でしかなかった。

「なら、シュトルム！」

バルクホルンに続いてハルトマンが固有魔法を発動させ、風を生させつつ回転しながらネウロイに突撃していく。

「うわあっ！？」

本来ならこの一撃はネウロイの装甲を深く抉り取るほどの威力をもっているのだが、今回に限っては激突した部分を少しばかり抉った過ぎず、逆にハルトマンが弾き飛ばされてしまった

「私に任せろ！おおおおおおおお！烈風斬！」

刀を振りかぶった坂本少佐が肉迫し、刀身に練り込まれた魔力によって巨大化した斬撃がネウロイを一刀両断せんとばかりに襲いかかる。斬撃がネウロイに命中した瞬間爆発が引き起こり、ネウロイ

は爆煙の中に紛れてしまった。

「やりましたわ少佐！」

「まだだ」

「え？」

「まだコアが視える」

爆煙の中から一条の赤い光が飛び出し、坂本少佐に向かって行く。

「少佐！」

「切り裂け、烈風丸！」

烈風丸というらしい刀がネウロイのビームを切り裂いて坂本少佐は傷一つ負う事は無かった。今のビームによって爆煙は吹き飛び、ネウロイの姿が全員の目に映った。ほとんどダメージを受けていないネウロイの姿が。

「そんな、美緒の攻撃でも倒せないなんて」

坂本少佐の斬撃は以前、ネウロイを本当に一刀両断した事がある。そして今回の斬撃もバルクホルンやハルトマンの攻撃よりもダメージを与えた。しかしその威力をもってしてもコアの破壊には至らない。

彼女達を絶望が襲う、とまではいかないものの、脳裏に勝てないかもしれないという思いが微かにでも過ったのは確かである。

士たちにも坂本少佐の烈風斬は見えていた。士が見る限りでは、烈風斬はかなりの威力があると思えたが、それでもネウロイを倒す事が出来ていなかった。

ちなみに烈風斬というネーミングセンスはどうかとっていたのは別の話である。

「そんな、烈風斬でも倒せないなんて」

「どうしよう芳香ちゃん！このままじゃ」

「なあ、これって結構やばいのか？」

この世界に来たばかりの士はストライクウィッチーズが普段どのような戦いをしているのか知らないし、ネウロイの強さの基準も分からない。故にリーネの焦り様から、『もしかしてピンチなのか?』と思ったのだった。

「当たり前ですよ! 皆の攻撃が通じないんですから!」

「わ、私たちも行こう、芳香ちゃん」

「うん、待機命令とか言つてられない」

「待て、命令違反は俺だけでいい」

「え、それって」

「俺がネウロイを倒す。コアつてのを破壊すればいいみたいたが、何処にあるんだ?」

士が出撃すると言い出したことで芳香もリーネもあることを思い出した。士は扶桑の新兵器の試用者なのだ。もしかするとその新兵器ならあの強固な守りのネウロイを倒せるかもしれないと思った。

「コアの位置は私じゃ分かりません」

「でも坂本少佐なら」

「なら聞いてくれ」

「はい」

リーネがまるでひとり言を言っている様な状態になってしまった。少ししてもリーネが通信を終えないため、『今はそれどころじゃない』とか言われているのだろう。業を煮やした士はリーネの耳から通信機を抜きとると、自分の耳にあてがった。

「坂本少佐、俺だ」

『門矢少佐か!? 戦闘は継続中だ。話は後にしろ』

「俺がネウロイを倒してやるからコアの場所を教えろ」

『何だと!?!』

「早くしろ。基地が壊されるぞ」

『・・・背中の中だ。まさか新兵器とやらを使つつもりか!?!』

「さあな」

『おい、門』

話の途中だというのに、通信機をリーネに投げて渡した。突然投げられたリーネは受け損なって落としそうになっていた。

「ああそうだ、リーネ。あいつらにネウロイの攻撃を引きつけるように言っといてくれ」

「え？あ、はい！」

「新兵器っていうの使っんですか？」

「まあ見てろ」

士が手のひらサイズのバツクル　　ディケイドライバーを腰に当てることでベルトが伸長して装着された。バツクル両側のサイドハンドルを外側に引くことでバツクルが90度回転し、左腰にあった本の様な形をした物　　ライドブツカーから取り出した一枚のカードを挿入した。

「変身！」

< K A M E N R I D E D E C A D E >

掛け声と共にサイドバングルを元に戻すことでバツクルも元に戻り、同時に電子音声が発せられる。その直後、士の周囲に9つの影らしきものが出現したかと思うとそれらは士に重なり、彼の姿は全くの別人のものとなった。

「え？」

士が何をしようとしているのか、不思議そうに見ていた2人は理解不能な出来事を目の当たりにし、無意識の内に、気の抜けそうな声を出していた。

しかし彼女たちに構っている暇は無いらしく、マゼンタを基調とした士だった人物は再びライドブツカーからカードを取り出してバツクルに挿入した。

< K A M E N R I D E K I V A >

再度電子音声が発せられたかと思うと、マゼンタカラーの人物は突然クリスタルのようになった。かと思えばそれは一瞬で砕け散り、今度はコウモリらしきものがモチーフになったような赤と銀を基調とした姿になっていた。

「リーネ、伝えたか？」

「え？あ、い、今から伝えます」

「頼むぜ」

声を聞く限り、目の前に居る姿が変わった人物は士で間違いようだった。リーネが直ぐにミーナたちに士が言っていた事を伝える。その返答を待たずしてライドブツカーからカードを抜きとり、バツクルに挿入した。

<FINAL ATTACK RIDE・k i k i k i K I
V A >

するとどうだろうか。突然空が真夜中になったように暗くなり、赤味掛かった大きな月が浮かんだ。まるで天変地異の様な出来事に、芳香たちはとても不安そうな顔をしていた。

そんな彼女たちをよそに、士は右足を高く振り上げると左足一本で、それはもう高く、これでもかというくらい高く跳躍した。そして上昇が止まったところでネウロイのコアがある背面中央に向かって急降下して行った。

ミーナは訳が分からなかった。リーネが『門矢少佐がネウロイの攻撃を引きつけてくれ』と通信で言ってきたかと思うと、直後に空が真夜中の闇に包まれた。その闇の中、赤味掛かった大きな月だけが辺りを照らしている。しかしその月、どうもおかしい。光っている部分があつという間に減少していき、三日月の様になってしまった。

「一体何が起きているの!？」

「これもネウロイの仕業なのか!？」

「どうするミーナ中佐!」

「ちよつと待つて!上から何か来るわ!」

「はあっ!」

ミーナが全員に注意を呼び掛けた直後、上空から落ちて来た何かがネウロイの背部中央に激突した。その凄まじい衝撃は空気を介してミーナたちにも十分すぎるほど伝わった。

一同はその『何か』の着弾点を凝視する。そこには右足を突き出した、赤と銀を基調とした姿の謎の人物が存在しており、右足が触れている部分を中心にネウロイの背中にコウモリを模した様な、大きな形にネウロイの装甲が凹んでいる。

直後、今の出来事によってコアが破壊されたネウロイは細かい破片となって砕け散った。足場を失った赤と銀の人物は重力に従って海へと落下していく。それを見たミーナはとっさに動いていた。

「きゃあっ!？」

落下していくその人物を受け止めるまでは良かった。しかし想定外の重さだった。100Kgはあるのではないかと思わせるほど重く、ミーナでは受け止めきれずに一緒に落下していった。

「あんたも結構無茶するな」

「え?その声、門矢少佐なの?」

「ああ」

「その姿はどういうことなの?」

「今はそれどころじゃないだろ?離れるよ。このままじゃ一緒に海面に激突するぞ」

「で、でも」

「俺なら大丈夫だ」

中々離れようとしないうミーナを何とか説得しようとしていると、突然落下は止まった。

「大丈夫かミーナ中佐!」

見れば固有魔法を発動させたバルクホルンが涼しい顔をして2人を受け止めていた。さすがはウィッチーズの力持ちだ。周囲には他のメンバーも来ている。

「全く無茶してくれる。ところでミーナ中佐、こいつは?」

「門矢少佐だそうよ」

「何だと？」

「聞いたかルツキー二。あれが門矢少佐だつてさ」

「じゃああれが扶桑の新兵器かな！カッコいい！」

「す、すごいですわね、少佐」

「ああ。扶桑がこれほどの物を開発していたとは」

「やるじゃん門矢少佐」

彼女たちは土の力を扶桑の新兵器と勘違いしているようだった。

今この場で訂正するのは面倒であったし、さつさと基地に帰りたいたいと思う土は芳香たちを理由に戻ろうとした。

「とりあえず戻った方がいいんじゃないのか？宮藤やリーネが心配してたんだが」

「そうね、そうしましょう。詳しい事は後ほど隊長室で聞かせてもらいます」

とりあえず戻ることに賛同した一同は基地へと戻って行った。土は別の姿になれば飛行する事も可能だが、今それを行うとまた騒がれて面倒になることは明白だった。故に不本意ではあったが基地までバルクホルンに抱きかかえられたままの状態が続いていた。誰もが近寄りたくないと思うほど2人の周囲の空気は微妙だった。

SW好きなキャラベスト3！

1・ミーナ・ディートリンデ・ヴィルケ

ああ！お姉さま！今日もお美しい！

2・エーリカ・ハルトマン

エーリカまじ天使w

3・リネット・ビショップ

リーネは良い子、優しい子。

つてな感じでした。

本編に關してですが、多分本来ならDキバがダークネスムーンプレイクを使っても夜にはならないのかな？と思います。TVでは使っていないので何とも言えませんが。

なるのであれば問題ないですが、もしならないのであれば、この小説で夜になった設定はちゃんと決めてあります。

なのでどっちにしろこの小説ではD のファイナルアタッククライドはオリジナルと同じです。

最後に。

ディケイドにこの世界に行つて欲しいという世界があればリクエストを受け付けます。

ただし、作者が知っている作品に限ります。知らない作品についてはご勘弁を。また、結構無理がある作品は採用できません。ガンダムとか

あと、別に戦い物の作品である必要はありませんが、戦い物の方が盛り上がると思います。

ではまた次回。

K A M E N R I D E 0 2 はやい、つよい、かっこいい(前書き)

書いていたらいつの間にか文字数が過去最長になってました。
サブタイは各作品に似せて付けるようにしています。

これまでの仮面ライダーディケイドは。

世界を渡り歩いている青年・門矢士が今回訪れた世界は、女性がパンツをズボンとして穿いている世界だった。それはともかく、この世界はネウロイという謎の存在によつて危機に瀕していた。

士が何者かの視線を感じつつも基地を探索し、そろそろ昼食時という時にけたたましい警報が鳴り響いた。それはネウロイの襲撃を知らせるものだった。

士、芳香、リーネと夜間哨戒で魔力を使い果たして眠っているサニーヤとエイラを除いた7人のウィッチが出撃して戦闘を始めるも、圧倒的な防御力を誇るネウロイに苦戦するストライクウィッチーズ。「俺がネウロイを倒してやるからコアの場所を教える」

<FINAL ATTACK RIDE・k i k i k i K I V A >

Dキバへと変身した士はダークネスムーンブレイクを発動、一撃の元にネウロイを撃墜してしまった。この力について説明を求められた士は隊長室へと連れて行かれるのだった。固有魔法を発動させたバルクホルンに引きずられながら。

本棚には本や資料がきちんと整理されており、清潔感が保たれているとある一室。この部屋の開放された窓からは午後の強い日差しが差し込み、微かに磯の香りを乗せた潮風が入り込んできている。そこから見える景色は真っ青に澄み渡った空と、それに華を添える

ようにフワフワと浮かんでいる真っ白な雲だ。

心が癒されて軽くなるような景色とは裏腹に、室内は少々重い空気が漂っていた。

「さて、それじゃさっきの事について詳しく聞かせてもらいましよ
うか」

現在、この部屋には1人の男性と5人の女性が居る。無論、男性は言うまでも無く士である。対して5人いる女性というのは、ストライクウィッチーズ隊長であるミーナを筆頭に、彼女の補佐役の様な存在である坂本少佐とバルクホルン、さらには芳香とリーネまでもが呼び出されていた。

「その前に聞きたい事がある。何であいつらまで居るんだ？」

「宮藤さんたちは門矢少佐、貴方があの姿になった時にすぐ傍にいたから呼んだのよ」

「なるほど。ま、どうでもいいけどな」

「それで早速聞かせてもらいたいんだけど？」

「何から話したもんか」

ソファーにふんぞり返って座っている士は少々考え込むような仕種を見せる。しかしこの男、この状況でこれほど偉そうな態度をとれるとは、最早呆れを通り越して尊敬の念すら覚えてしまう。

「まあ簡単に言うと、俺はいろいろな世界を旅してんだ。だからこの世界もその内の一つって訳だ」

「いろいろな世界？世界各地に左遷されているという事か？」

「違う。世界ってのは一つじゃなく、無数に存在している」

「門矢少佐、一応聞いておくけど頭は大丈夫かしら？」

「大丈夫に決まってるだろ」

士の話が始まるなり、ミーナを始めとした全員が士の頭を心配していた。いきなり世界は無数に存在するなどと言われても信じられない訳が無い。彼女たちの反応は至極当然のものだった。

「さっき言った通り世界は無数に存在し、俺はその世界を気ままに旅してんだ」

「門矢、そんな子供にも通用しないような嘘は止めて本当の事を話せ」

「いや、本当なんだが」

最早バルクホルンは土を呼び捨てにしている。呼び捨てにされている当の本人は至って普通に行っているが、その余裕の態度が余計にバルクホルンを刺激していた。

「世界が無数に存在するなど非科学的すぎる。どうせ碌でもない事を企んでいるから本当の事が言えないのだから？」

「パンツをズボンとか言っつて丸出しにしてるお前の方が非常識だろ」

「何だと!？」

「落ち付けバルクホルン!」

「門矢少佐もトウルードを刺激するような事言わないで」

「こいつが突っ掛かって来るんだから仕方ねえだろ」

「貴様!」

「止めるバルクホルン!暫く黙っている。これは上官命令だ」

「ぐっ」

坂本少佐の仲介で、放っておけば永遠に続きそうな言い争いにどろろにか一応の終止符が討たれた。一応同じ部屋に居る芳香とリーネだが、バルクホルンの凄まじい剣幕に一言すら発する事が出来ない。そして思っていた。そんな状態の彼女にあれほど余裕な態度を見せる土は凄い、と。

一方、バルクホルンを黙らせた坂本少佐は真剣な表情で土を見やっつた。

「門矢少佐、先程の話は本当なのか?私たちがネウロイと戦うこの世界以外にも、無数に世界が存在しているというのは」

「本当だ。死んだ人間が化け物になる世界だったり、不死の生命体がいる世界だったり、妖怪みたいなのが居る世界だったりとかない」

「そう。それが本当なら、ネウロイと争っているこの世界の存在なんて本当にちっぽけなものね」

「ああ、この世界も無数に存在する世界の中にあるちっぽけな存在に過ぎない。だがそのちっぽけな存在が集まって世界というものは構成されてんだ」

士のちよつといいセリフに部屋の空気が和んだ気がしたが、それはほんの数瞬のものでしか無かった。

「なら扶桑の新兵器の試用者というのはどういうことかしら？」

「そうだな、それは私も気になってた。この世界の人間ではないのなら何故扶桑の海軍少佐ということになっている？」

「ああ、それは毎回の事だ。新しい世界に入る度に何らかの設定があるんだ。警官だったこともあれば食堂のチーフだった事もあるし、大工匠だったこともあったな」

「け、結構無茶苦茶ね」

「そうだな。で、今回は扶桑って国の海軍少佐って設定になってるらしい。で、新兵器ってのはこれのことだろ」

士は彼女らが言う新兵器に該当すると思われる物をテーブルの上に静かに置いた。ミーナたちの視線は一気にソレへと集まった。見覚えのあるソレを見た芳香は思わず声を出していた。

「これってさつき変身するときに腰に巻いてたやつ・・・、ですよ
ね？」

「デイケイドライバーだ」

「こんな物が烈風斬でも倒せなかったあのネウロイを一撃で倒したのか」

「凄いわね」

目の前にある手のひらに収まる程度の物がネウロイを倒せる力を持つている事に、彼女たちは本当に感心していた。あからさまに不機嫌だったバルクホルンのそれは何時の間にか直っており、ミーナ達同様に感心していた。ただ、少しバツが悪そうではあったが。

「ま、そんな訳でこつちの事情を知ったんだ。俺は好きにこの世界を回って次の世界へ行く。じゃあな」

「え？ち、ちよつと待って！」

士がいきなりそんな事を言い出すとは予想外だったのか、ミーナは慌てふためきながらも士を呼び止めた。他の者たちも声にごそ出さなかったが、ミーナ同様に慌てふためいていた。

「何だ？説明はしただろ？」

「そうじゃなくって。今回のネウロイは今までと明らかに違ってたわ。今まではあれほどの強度なんか持つてなかったの」

「確かにミーナ中佐の言う通りですよね」

「またあんなネウロイが来たら私たち、勝てるんでしょうか・・・」

「分からないわ。だから門矢少佐、いえ門矢君。貴方の力を貸して欲しいの」

「門矢、私からも頼む」

何と、坂本少佐が深々と頭を下げた。いや、頼んでいるのだから頭を下げるのは当然と言えば当然なのだが、芳香とリーネからすれば彼女は普段上官としての姿ばかりを見せているため、こんな姿を見る事が出来るのは極めて稀な事だった。

「断る」

「・・・、関係無い貴方を巻き込むことになるのは分かっているわ。自分達の都合で貴方を利用しようとしているってことも。だけど・・・、それでも私たちには貴方の力が必要な」

「言っただろ、俺は世界を気ままに旅しているってな。デイケイドの物語を綴るために」

「どういうことだ？」

「・・・、お前たちは知らなくてもいい事だ。とにかく俺にも目的があるんだ。邪魔しないでくれ」

立ちあがって部屋を出て行くこうとする土だったが、その足は僅かに数歩歩いただけで止まった。彼の行く手には芳香が立ち塞がっていた。

「待つて下さい！お願いします、力を貸して下さい！もしまた今日みたいなネウロイが現れたら・・・。だから、お願いします！」

「宮藤・・・」

「自分達の世界は自分達で守れ」

「お願いします！私、何でもしますから！だから！」

「宮藤さん！貴方がそこまでする必要は無いわ！」

「でも」

「私も、何でもしますから！お願いします」

「リーネちゃん」

芳香に次いでリーネまで何でもするから、と懇願し始めた。部下にばかりそんな役をさせられないのか、ミーナも坂本少佐も改めて頭を下げた。

「私たちからもお願いするわ」

「頼む」

「あんたはどうなんだ？バルクホルン」

「わ、私か？」

既にミーナたちの懇願は聞いた。残っているのは 土は視界の端の方にバルクホルンを捉え、彼女に彼女自身の考えを問う。

「私は……。っ！この通りだ！頼む、力を貸してくれ！」

ミーナたちがバルクホルンを見つめ、張り詰めた空気が漂う中、彼女は遂に頭を下げた。バルクホルンとて理解しているのだ。今日のようなネウロイがまた出現すれば、自分達の力ではどうにもならない事を、一方的に蹂躪されてしまう事を。

ハンガーにて土の出撃に反対したのは、そこで言い放った事が本心だったから。しかし隊長室で土の話に突っ掛かる様に発言したのは、彼の力を認めたくなかったから。

ネウロイを倒すために日々訓練を繰り返し、鍛え上げて来た自分の、自分たちの力がネウロイに通用しなかった事実。そのネウロイを門矢士という青年がいとも容易く一撃で倒してしまった事実。それを認めたく無かった。

しかしそんな事を行っている場合では無くなった。上官や部下が必死に頭を下げて土に力を貸してくれるように懇願しているのに、自分の詰まらない意地のせいでその機会を潰す訳にはいかなかった。

もしこれで断られたら土下座すら覚悟している。本来なら部下よりも先に上官である自分たちが頭を下げるべきなのに、芳香に『何でもするから』とまで言わせてしまった。故に彼女たちの思いを無駄にするくらいなら、自分が土下座でも何でもしてやろうと思ったのだ。

しかし、張り詰めたこの空気はあっけなく終わりを告げることとなった。

「ああ、いいぜ」

「……え?」「……」

突然の了承に一同は呆気にとられ、数秒間に渡って『ああ、いいぜ』の意味を脳内検索していた。

「ホ、ホントですか!?!」

「ただし条件がある」

「何かしら?」

「上手い飯食わせてくれ。腹減ってたんだ」

「……あ!」「……」

土のセリフで芳香とリーネは何かを思い出したのか、急に取り乱し始めた。土を含む4人はそれを不思議そうに見ていた。

「ど、どうしようリーネちゃん!お昼ご飯作ってる途中で放り出してきたんだっ!このままじゃ皆餓死しちゃうよ」

「餓死はしないと思うけど……でも早く支度しないと!」

そういえばこの2人は昼食の用意をしていたんだ、と思いだしたミーナは続きを始める様に指示をだして退室させた。

「という訳で、お昼はもう少ししたら食べられるわ」

「そりゃ良かった」

「これで力を貸してくれるかしら」

「さつきからそう言ってるだろ」

「感謝します、門矢君」

「門矢、礼を言わせてもらう。ではミーナ中佐、私は鍛錬に戻る」

「ええ。頑張つてね、美緒」

「私も失礼する」

鍛錬を行うために退室する坂本少佐に続き、居心地が悪いのかバルクホルンも退室して行った。士とミーナが残った隊長室では穏やかな雰囲気は漂っていた。

「ねえ、門矢君。もしかしたらなんだけど、協力を断ったのってトウルーデに頭を下げさせたかったのかしら？」

「なんだ、分かってるじゃねえか」

「はぁ・・・、やっぱり。トウルーデが頭を下げたとたん了承するんだもの」

「あいつには色々言われたからな。ちよつと仕返ししてやつただけだ」

深い意味など無く、ただ単にバルクホルンに突っ掛かれ、溜まった鬱憤を晴らしたかっただけの士だった。ちよつと子供っぽい一面を見せた士にため息が出るミーナだった。

「そうそう、ミーナ中佐。あんま無理すんなよ顔色がちよつと悪いぞ」

「そんな事無いわよ」

「・・・、まあアンタがそう言うならいいけどな」

そう言い残して士は隊長室を後にした。

(無理するな、か。結構相手の事見てるのね)

一人残されて椅子に座っているミーナは天井を見上げ、少々疲れの色が見える顔を緩ませていた。

遅めの昼食を済ませた後、士は再び基地内を探索していた。しかしこれといって目新しい物は見つからず、そろそろ部屋に戻って一休みするかと考えていた時、外見が天使の様に可愛らしい少女と出会った。

「あ、門矢少佐」

「エーリカ・ハルトマン中尉だな」

「覚えてくれたんだ」

「たまたまな」

「ふーん。あ、そうそう、ちょっとついて来て。トゥルーデが用があるんだって」

「バルクホルンが？」

(・・・、また厄介なことじゃねえだろうな)

ハルトマンに言われるがまま後を付いて行くとある部屋の前で立ち止まった。面倒そうな臭いがプンプンしているが、此処まで来てしまった以上今更帰るとは言いだせない土だった。

「さ、入って入って」

さっさと入っていくハルトマンに続いて入室すると、やはりバルクホルンが居た。しかも気難しそうな顔をしている。予感的中したな、と土は密かに思っていた。

「何の用なんだ？」

「あ、ああ・・・。その、済まなかった」

「何だ急に」

「私の下らん意地のせいでお前に不快な思いをさせてしまったと思つてな」

「そんな事が」

「なっ！？そんな事とはなんだ！私だって」

「気にするな。もう憂さ晴らしもさせてもらったしな」

「憂さ晴らし？」

「こつちの話だ」

土が言っている意味がイマイチ理解できなかったバルクホルンだが、その話に関しては土が切り上げてしまったために、彼女が憂さ晴らしの件に関して知ることとは終ぞ無かった。

「一体何やったのさー？」

「別に大したことではない。門矢、私はな、お前の力を認めたくなかつたんだ、きっと。私たちが口々にダメージを与える事が出来な

かったあのネウロイを、一撃で倒してしまったお前の力を」

「トウルーデは結構意地っ張りだからなー」

「嫌いぞハルトマン」

「ホントの事じゃん」

「いいから黙っている」

ハルトマンがバルクホルンをからかうので話が先に進まない。しかしからかわれているバルクホルンは中々に面白かったので、土は黙ってその光景を見ていた。

「門矢、本当に済まなかった」

「気にするなつて言っただろ。話はそれだけか？」

「あ、ああ。お前に謝りたかったんだ」

「そうか。なら俺は部屋に戻る。じゃあな」

ハルトマンとバルクホルンの部屋を後にした土は自分にあてがわれた部屋へと戻り、ゆっくり休むことにした。土が出て行った後のこの部屋では、気合を入れすぎたバルクホルンがぶっ倒れるまで懸垂をしていたとか。

翌日、朝食もそこそこに『グラマラス・シャーリー』こと、シャーロット・E・イエーガーは相も変わらずストライカーユニットの改造に精を出していた。彼女の目標はそれで音速の世界に入ることだったが、それは偶然にもルツキーニのお陰(?)で達成されていた。

しかしそれはあくまで偶然の出来事であり、自力で何時でも音速に到達するために日々改造を行っているのである。

オイルまみれになりながらも楽しそうに改造をしているシャーリーの耳に『カシャツ』という音が届いた。何だろうと思つて周囲を見回すと、首から下げたピンクと黒の箱状の物を持つて自分を見ている土が居た。彼もシャーリーが自分に気づいた事が分かったのか、

彼女の元へ歩み寄って来た。

「誰かと思えば門矢少佐じゃないか」

「そういうお前はシャーロット・E・イェーガー大尉だったな」

「お、私の事覚えててくれたのか。嬉しいね」

「たまたまな」

「たまたまつて・・・、じゃあルツキーニの事は覚えてるかい？」

そう言つて天井を指さすシャーリー。それにつられてついつい、士の目はその先を追つてしまう。するとそこには天井の梁をベッドにして熟睡しているルツキーニの姿があつた。

「フランチェスカ・ルツキーニ少尉だろ？」

「おお、凄いな。で、それもたまたまかい？」

「ああ、もちろんだ」

「ぷっ、あははははは！いや、少佐は面白いな」

広いハンガーにシャーリーの笑い声が反響する。『今笑うところあつたか？』と疑問に思いつつも、士はルツキーニについて問うた。「そんなことねえよ。それで、あいつは何時もああなのか？」

「ルツキーニはいつもああだよ」

余りに笑い過ぎたのか、シャーリーはうつすら浮かべていた涙を指で拭いながら答えた。そんなことより彼女は今、違うものに興味を惹かれていた。

「なあ、少佐の持つてるそれってカメラ・・・、だよな？」

「ああ。珍しいのか？」

「あ、いや、そう言う訳じゃないけど・・・、そうだ！それで私を撮ってくれよ、記念にさ」

「一体何の記念なんだ？」

「ええと・・・、そう、少佐がストライクウィッチーズに配属された記念とか」

「なら俺が撮るのはおかしいだろ」

「そんな堅い事言わずにさ」

シャーリーの理論は結構どころか普通におかしいが、このグラマ

ラスな体で迫られればそんな理論さえ正しく聞こえてきてしまう。
だがこの門矢士という男には通用しなかった。

「ダメだ・・・、ていうかも撮ってあるしな」

「ええっ！？本当か！見せてくれよ！」

「現像しなきゃ無理だろ。ま、その内見せてやるよ。それにしてもその機械を弄つてるときのお前、いい顔してたぞ」

「そうか？まあ楽しいのは事実だけどさ」

あれだけ楽しそうに弄っていたという事は、絶対に何かあると士は踏んだ。他のウィッチたちは全然弄らないというのに、彼女だけは本当に楽しそうに弄繰り回していたのだから。

「他の奴らは全然弄らねえのに、何でお前はそんなにやってんだ？」

「私は音速に辿り着きたいんだ」

「音速に？」

「ああ。前に一回到達した事はあるんだけどさ、その時はまあ色々あつて偶然って奴でさ。だからいつでも自力で音速に到達できるようにしたくて、ストライカーを改造してるのさ」

「大体分かった。要するにスピード狂で機戒オタクってやつか」

「ま、そう思ってくれてもいいさ」

そしてまたシャーリーの興味は別のものに映ったのか、とある一点を目を輝かせながら見つめている。その視線の先にある物は、白と黒にマゼンタで構成された大型自動二輪車・マシンディケイダーである。

このバイクは通常時はV型2気筒エンジンによるガソリン走行だが、戦闘時はクラインの壺から無尽蔵の次元エネルギーが供給されるためあらゆる環境を走破することに加え、アタックライドによりボディを変異させて違うマシンに変形するスーパーマシンとなる。

さらに並行世界の移動や陸・海・空・宇宙空間での走行、ミラーワールドへの突入やディケイドの意思による無人での自動走行も可能とい、まさに乗り物としては非の打ちどころが無い代物である。

「なあなあ、あの二輪って少佐のдар？ちよつと触らせてくれない

か？」

「・・・、分解するなよ？」

「わ、分かってるって」

土がエンジンを掛けてやり、運転方法を簡単に説明してやると、元々魔導エンジン二輪車を運転してただけの事はあり、水を飲むかのように運転方法を学習していった。

「ひやつほお〜！」

5分後、滑走路的な場所をマシンデイクイダーに乗ったシャーリーが疾走していた。もし壊したり海に落としたりしたら一生かけて弁償させる、と土に脅された彼女は時速40kmでこの上ないほどの安全運転をしていた。

シャーリーはマシンデイクイダーに物凄く楽しそうに乗っている。そんな彼女の様子を微笑を浮かべながら見ていた土は、再び彼女をトイカメラのフレームに収めるのだった。

「あゝ楽しかった。でももっとスピード出させてくれたらもっと楽しかったのにな」

「無茶言うな。あれ以上スピード出したら絶対海に落ちるだろ」

「私の腕を信じてないな？」

「そういう問題じゃ　　警報!？」

「ネウロイだ！」

楽しいな雰囲気をブチ壊す大きな音が基地に響き渡る。シャーリーはハンガー内の自分のストライカーまで駆け寄ると、すぐ傍に置いてあった通信機を耳にはめた。

「こちらシャーリー。ネウロイは？」

『ネウロイは現在高速でこの基地に向かって飛行中よ』

「高速で？」

『ええ、これは推定だけとおそらく音速よ』^{マッハ}

「音速・・・分かった、私が先行する」

『ちよ、シャーリーさん！待ちなさい！』

「イエーガー機、出る！」

通信越しのミーナの静止を聞かず、シャーリーはストライカーを穿いて単独で出撃してしまう。

「おいシャーリー！ネウロイは」

「悪い少佐、ちょっと行つて来る！」

シャーリーは土の問いかけすら振り切つて空へと上がつて行く。ミーナの言葉を聞いた瞬間、シャーリーは思った。他の仲間たちでは到底音速には到達できない。なら音速で来る相手に対抗できるのは自分しかない。

もしジェットストライカーがあれば他のメンバーでも対抗できるだろうが、生憎あれは試作段階で致命的な欠陥が見つかったために現在は回収されてしまい使用できない。だから自分がやるんだ、と鼓舞して空へ上がったのである。

シャーリーが空へ上がつてから1分にも満たないというのに、既に前方にはネウロイの姿があつた。そのネウロイは従来の飛行機のような形ではなく、人型をしている。しかも容姿はかつての人型ネウロイに酷似していた。

「あれだ。よし、行つけえええええ！」

シャーリーが魔力を全開にして爆発的に速度を上げて行く。しかし僅かに音速には届かない。が、今はそれに拘っている場合ではなく、ネウロイに集中しなければならぬ。

（とにかくネウロイを！）

ネウロイとの距離が一気に縮まって行く中、機銃を構えて狙いを定めたところで引き金を引く。発射口が火を噴き、秒間何十発という数の弾丸が発射される。

真正面から弾丸が飛んで来るとはいえ、これだけの速度での回避運動は容易ではない。シャーリーは勝利を確信した。だが次の瞬間、彼女の顔は驚愕のものに一変する。

「ウソ・・・、だろ？」

シャーリーの眼には常識では考えられない光景が映った。ネウロイは音速という速度を出しながらほぼ直角に2度曲がり、速度を落とすことなく最小限の動きで弾丸を回避したのだ。

しかもシャーリーには目もくれず、真っ直ぐ基地へと向かって行くではないか。

「そんな・・・こんなことが」

しかし此処で諦める訳にはいかない。一気に減速して360°の方向転換をして基地へと引き返していく。勿論全速で。

「間に合ってくれ」

自分が基地に着いた時、音速のネウロイに仲間がやられていない事を切に願うばかりだった。

シャーリーが出て行った後、ウィッチーズはサーニヤとエイラを除いたメンバーが滑走路で待ち構えており、その後方にはディケイドが待機している。例によってその二人は夜間哨戒で魔力を使い果たして眠っている。

ちなみに何故空へ上がらないのかと言えば、シャーリーを突破したネウロイは低空飛行で基地へと近付いて来ていた。

「来るぞ！到達まであと5秒！」

全員が機銃をネウロイが接近してくる方向へと向け、今か今かと待ち構えている。何か黒いものがすぐ近くまで来たかと思うと、全員の視界からそれは消えた。

「上よ！」

ミーナが固有魔法による超感覚でネウロイの気配が上に移動した事を察知し、ウィッチーズに警告を送ると彼女たちは空を見上げる。しかしそれとほぼ同時に滑走路に衝撃が走っていた。

「何という速さだ」

地に降り、一旦動きを止めたネウロイを視認した坂本少佐からは驚きの言葉が零れていた。ネウロイは先程までと打って変わってゆつくり歩みを進める様にして近付いて来る。

「一斉攻撃で仕留めるわ！」

ウィッチーズの手にしている機銃が一斉に火を噴く。何十、いや何百という数の弾丸がネウロイが居る一点に向かって集まっていく。しかしそれらが到達するよりも早くネウロイは動き出していた。

「は、速い。こんなの当たらないよ」

「弱音を吐くな宮藤！」

（だが確かにこれでは）

機敏な動きで何百という弾丸を一発も貰うことなく避けてはウィッチーズに接近していく。その速さはまともに追えるものではなく、最早ネウロイに向けて機銃を撃つ事すら出来ない。

ウィッチーズに迫っていたネウロイだったが、突然横へと飛び退いた。その直後、直前までネウロイが居た場所にデイケイドが一足飛びに斬り掛かっていた。結果的には外れたが、ウィッチーズに希望をもたらすには十分だった。

「門矢君！何とかネウロイに隙を作って！」

「やってみるさ。はあっ！」

デイケイドはソードモードのライドブッカードで連撃を打ち込むが、ネウロイの速さはそれを優に上回っており掠りすらしない。何を考えているのか、それとも何も考えていないのか、ネウロイは自ら距離を取って品定めするかのようにデイケイドとウィッチーズを見ている様に見える。

「これならどうだ」

< ATTACK RIDE・BLAST >

ライドブッカードをガンモードに変形させ、カードの効果を発動させる。ライドブッカードの周りに、ホログラムの様にライドブッカードがいくつか出現し、それらが一斉に光弾を打ち出す。

ネウロイは右腕を大砲を模した形状へと変形させると、そこから

ネウロイ特有の赤いビームを放った。

「何っ！？うああっ！」

ディケイドといえども、さすがにそこまでの予測は出来ていなかった。反応が遅れたディケイドは自身が発射した光弾を打ち消し、尚も直進するビームを胸部へと受けてしまった。その威力で10メートル前後の距離を転がった。

「う、そ……、でしょ？門矢君！」

「門矢！」

「少佐！」

ウィッチーズがそれぞれに土を呼ぶ。そして丁度、土がビームを喰らった時にシャーリーが戻って来た。そして彼女を含むウィッチーズの頭は真っ白になっていた。彼女たちからすれば、ネウロイの攻撃を受けるということは死ぬも同然なのだ。全員が固まって動けずにいる中、ミーナが力無く倒れているディケイドの元へと近付いて行く。

「痛つてえ。さすがに今のは避けなかったぜ」

「え？」

また別の意味でウィッチーズは固まった。死んだかもしれない、いやほぼ死んだに間違いない。そう思っていたのに、ディケイドが何事も無かったかのように普通に立ち上がったのだ。

「門矢……、君？大丈夫、なの？」

「ああ？ 当たり前だろ。それより全員で円状に陣形を作れ。俺が中央に叩きだしてやる」

「えと？」

ディケイドが余りにも普通にしているせいか、ウィッチーズは事態を飲み込めずにいた。そんな彼女たちにお構い無しに、ディケイドは1人でさっさと作戦を立ててしまっていた。

<FORM RIDER・FAIZ AXEL>

ちよつと不思議な電子音と共にディケイドの身体を銀色のラインが取り巻き、黒を基調とし、大きな目は鮮血を思わせるような赤色

をした姿へと変身した。

「ちゃんと直ぐに攻撃できる体制にしとけよ？ 5秒以内にな」

「え、ええ」

5秒以内にちゃんと指示どつりにすることを告げておき、Dファイズアクセルはリストウオツチ型のツールにある、スタータースイッチを押した。

<Start Up>

電子音声と共にDファイズアクセルの姿が消え、次いでネウロイの姿も消える。しかしよく見れば消えたのではなく、まともに視認できないほどのスピードでそこらじゅうを移動して戦っている。

「す、すげえ」

「シャーリー大尉！ 感心してる暇があったら早く陣形に入って！」

「あ、ああ！」

音速のスピードを出すネウロイと完全に互角のスピードを見せるDファイズアクセルに、シャーリーはただ見惚れていた。見惚れているといつても、何かが自分たちの周囲を高速で移動しているとか認識は出来なかったが。

そんなシャーリーだったが、鶴の一声ならぬミーナの一声で円状の陣形に加わった。一体何時ネウロイが中央に叩きだされるのか。

それが分からず、とてつもない緊張感がウィッチーズを飲み込んでいる。実際にはほんの数秒に過ぎないが、彼女たちはもう何分も待っている錯覚に陥っていた。

「っ！？」

その時は何の前触れも無くやって来た。突然、円状の陣形の中央にネウロイが転げまわる様に現れた。いきなりで驚いたが、ミーナは直ぐに攻撃の指示を出した。

「攻撃開始！」

ネウロイがここに来た時と同様に、何百という弾丸が迫る。だが今は最初とは違う。ディケイドによって音速の世界から叩きだされたネウロイが立ちあがりかけた所への一斉射撃である。今度ばかり

はネウロイも避ける事はできず、文字通り八チの巢となるより他に結果は待つていなかった。

前回ほどの装甲を持っていない今回のネウロイは、ダメージを受けながらも正面に居たミーナへと迫った。これだけのダメージを受けながらもまだ動くネウロイ。音速の速度こそ無いが、ミーナまでの距離を潰すにはそれでも十分だった。

ミーナとネウロイの距離が近すぎるのでウィッチーズは機銃による攻撃を行う事が出来ない。坂本少佐とバルクホルンが叫ぶ。

「ミーナ中佐！」

「逃げる！」

坂本少佐は烈風丸を手に、バルクホルンは固有魔法を発動させてミーナの元へと急行する。しかしどう考えても、彼女たちが到達するより早くネウロイの攻撃が先に届くだろう。そしてそれは現実のものとなった。

「きゃっ!?!」

ネウロイが振りまわした左腕を機銃を間に挟むことでいくらか緩和したものの、やはり力は強く吹き飛ばされる。尚もネウロイは彼女に迫り、右手を槍の様に長く鋭く尖らせて振り上げる。

ミーナにはその光景がスローモーションのように見えていた。ゆっくりと自分を貫くために向かつて来るネウロイの腕。こんなにゆっくりならさっさと避ければいい。そう思っても体が動かない。

ミーナは理解した。自分はただ、ネウロイによって齎される『死』という結果を待つている事しか出来ないのだと。そしてそれからどうあがこうとも逃れる事が叶わないということも。

ウィッチーズの目の前で隊長の命の灯が消えようとしている。彼女たちはみな、己の無力さを呪った。手を伸ばせば届きそうなほど近くに居る大切な仲間1人の命さえ助ける事が出来ない己の無力さを。

誰もが最悪の事態を覚悟した時、一筋の赤い光がネウロイの胸部辺りへと到達し、それは一瞬で円錐状へと形を変えた。

アクセルフォームへフォームライドし、音速の世界で肉弾戦を行っていたDファイズアクセルとネウロイは、同時に突き出した拳が同時に相手の胸部へ届いて互いに吹き飛んだ。

「うわっ!？」

地面を転がるDファイズアクセルのリストウォッチから電子音声によりカウントダウンが聞こえる。

<3、2、1、Time Out>

アクセルフォームでいられる時間が終了し、DファイズアクセルはDファイズへと本人の意思にかかわらず自動的に姿を変えた。

「不味い！」

起き上がったDファイズが見た光景は、地面に転がるミーナにネウロイの鋭い右腕が迫ろうとしているところだった。時間は無い。残された手段は、ネウロイの魔の手がミーナに届く前に一撃で倒す事だけだった。

<FINAL ATTACK RIDE・fa fa fa FA IZ>

「はあああああっ！」

ジャンプしたDファイズが足先から赤い光を放ち、ネウロイを口ツクオンする。ネウロイは円錐状の光の勢いに押され、ミーナにその右腕が届く寸前に引き離される。そして円錐状の光に飛び込むかのように飛び蹴りを放ち、円錐と共にDファイズはネウロイの中に入っていくかのように消えた。

その直後、ネウロイの背後にDファイズが出現し、ネウロイはその黒い体を真っ白な輝きを放つ欠片へと変えた。

中にはそれとは違う色の欠片も混ざっていたが、今この場でそれに気付く者は居なかった。

「門矢、君」

「大丈夫か？ミーナ」

「・・・・・・・・」

「おい」

「門矢！」

呆けているミーナを現実に戻そうと変身解除した土が声を掛けてみると、後ろからのしかかるように坂本少佐とバルクホルンが倒れこんできた。

「おわあっ！？重っ！」

「助かったぞ！」

「よくやった門矢！」

ミーナが助かった事実に喜び、土に乗りかかって褒めているのだが、当の本人は重くてそれどころではなかった。そして土が重くて苦しんでいる事に気付かない2人であった。

あれから3日が過ぎた。現在の時刻はPM3:26である。

音速の速度を持つネウロイを撃墜してから3日後の今日、またネウロイが出現した。しかしそのネウロイは土がこの世界にやってきて初めて見る、本来のネウロイであった。故に土に出番は無く、ウィッチーズの華麗な連携で見事撃墜したのだった。

そして土はある決断をし、ミーナと共にハンガーまで来ていた。

「え？次の世界に？」

「ああ。どうやらネウロイも本来のやつに戻ったみたいだな。俺がこれ以上ここに居る理由も無い」

「もう行っちゃうのね、土君」

ミーナは土に命を助けられて以来、『門矢君』ではなく『土君』と呼ぶようになっていた。別に深い意味は無かったが、命の恩人の距離を少しでも縮めたいと思った結果だった。

「だったらせめて送迎のパーティーでも」

「いらねえってそんなの」

「でも」

「それより、ほら」

「これって・・・」

士がミーナに一枚の写真を渡した。その写真に写っていたのは、涙を浮かべながらも本当に嬉しそうな表情のミーナだった。

これは何時撮ったのかというと、3日前のネウロイ戦後にミーナをとりあえず隊長室まで引きずって行った後、助かった安心感から彼女は泣き出してしまったのだ。それを暫く士や坂本少佐、バルクホルンらが慰めていた結果、凄く綺麗な笑顔を浮かべたのでつい撮ってしまったのだった。

同じものを2枚現像し、その内の一枚を今ミーナに渡したところだ。

「いい画だったからな、つい撮っちまったんだ。やるよ」

「自分の写真を持つてるっていうのもなんだか恥ずかしいけど・・・でも士君が撮ってくれたものだから大切に持っておくわ」

「ああ。じゃあそろそろ行くとするか」

「本当に見送りはいいの？」

「ああ。柄じゃねえからな。あいつらには適当に言っといてくれ」

「仕方ないわね」

「それと、これシャーリーに渡しといてくれ」

士がもう一枚の写真をミーナに渡す。それには楽しそうにストライカーを改造するシャーリーが映っていた。

「シャーリーさんも撮っていたのね」

「あんまり楽しそうだったからな」

「渡しておくわ・・・。また会えるかしら？」

「俺の気が向いたらな」

「何時になるのかしらね」

「さあな」

士がマシンディケイダーにまたがり、エンジンを掛ける。ブレー

キを引いたままアクセルを何度か回してエンジンを吹かしている。ヘルメットを被ると、いよいよ別れの時がやって来る。

「じゃあな」

「ええ」

土の数メートル前に白いオーロラが出現する。アクセルを回す前に一度だけミーナの方を見ると、軽く手を上げて挨拶するとオーロラの中へと進み、オーロラと共に消えて行った。

一人ポツンと立っているミーナは暫くの間、青く澄み渡った大空を見上げていた。

自動車は何台も止まっているこの場所、見る限り駐車場だ。傍には大きな建物が2、3棟建てられており、それらから導き出されるのはここが学校という場所だということだった。

まだ昼間だというのに、駐車場には白いオーロラが出現していた。それが消えると、先程までは誰も居なかったはずなのに大型自動車二輪に乗った青年がいる。そう、門矢士だ。

「ここは学校か？またパンツ丸出しの世界じゃねえだろうな」

さすがにまたパンツ丸出しは勘弁してもらいたい士だった。そんな彼の耳に音楽が流れて来た。おそらく校内で掛けられているのだろう。

~~~~~

「……中々いい曲じゃねえか」

曲の良し悪しはともかくとして、『学校なのに音楽？』と思った士が時計を確認するとPM0:45を示していた。時間帯から推測するに昼休憩に掛けられているものなのだろう。

というのも、並行世界同士が全て同じ時間軸で回っている訳ではないため、世界を渡ることによって時間が変わるのには別に珍しい事ではない。しかし旅する側としては、やはり異世界同士が同じ時間である

方が楽なのは確かだった。

士が自分の服を確認すると、白い軍服から黒のスーツへと変わっていた。この世界での自分の地位は何だろうか、と考えつつもこの世界はどんな世界なのか少し楽しみな士だった。

KAMEN RIDE 02 はやい、つよい、かっこいい(後書き)

さあ！SW編が終わりました！

ああミーナ……。もう出番が終わってしまった。

2番目の世界は何にするのか悩みました。

が、とりあえず最初に候補に挙がっていた作品にしました。

ヒントは最後にあつた歌詞ですね。これからも世界が変わるときはこんな感じで変わります。

さて、あのヒントで次が何の世界が分かる人はいるのでしょうかね。ではまた次回。

K A M E N   R I D E   0 3   シロクロ（前書き）

お待たせしました。

次の世界です。さあ、お前の罪を・・・

KAMEN RIDE 03 シロクロ

これまでの仮面ライダーディケイドは。

再び出現したネウロイは音速の速さを持っていた。前回のネウロイと同様、ウィッチーズには極めて脅威の存在であった。このネウロイに1人立ち向かうシャーリーだったが、音速を保ったまま機敏な動きを見せるネウロイに対抗する事は出来なかった。そしてネウロイはストライクウィッチーズの基地へと到達する。

<Start Up>

「不味い！」

<FINAL ATTACK  
RIDE・fa fa fa FA  
IZ>

「また会えるかしら？」

「俺の気が向いたらな」

音速の速度を出すネウロイを撃破し、基地には東の間の平和が訪れた。その数日を過ごす中、次に現れたネウロイは本来この世界で出現するタイプと同様であった。それを確認した土は、後をウィツ

チーズに任せて次の世界へと旅立つのであった。

田舎過ぎず都会過ぎない、程良く緑と人工物が存在しているこの町。そこにあるとある高等学校。名を輝日東高校きびとという。この学校の2-Aの教室に黒いスーツを着た門矢士の姿があった。彼がいるせいなのか、教室の中は微妙にざわついている。

士は今教壇に立っており、その隣には肩に掛かるか掛からないかという長さの髪をした女性教師であろう人物が立っていた。

そもそも何故こんな状況になっているのか。それは少し前まで遡る。

士がこの世界にやって来て数分

駐車場と思わしき場所で士は周囲を見回していた。時間からして昼休みであろうが、場所が場所なのか誰一人として居ない。

「仕方ねえな、校内なかに入ってみるか」

冷たい風が吹いており、この世界の今の季節は冬であると嫌でも認識させられる。さすがにこのままボーっとして誰かが来るのを待つのは辛い。士はマシンドイケーダーを下りると入口を探すために校舎へと歩みだした。と、その時士の耳に女性の声が届いた。

「あ、居た居た」

「ん？」

反射的に声のした方を見ると、肩に掛かるか掛からないか位の長さの髪をして黒いスーツを着ている女性が歩み寄って来た。

「あなたでしょ？今日から臨時で輝日東（こひ）に来る事になってた教師っていうのは」

「は？あ、ああ・・・、まあそうだが。あんたは？」

「私はあなたが副担任する事になってる2-Aの担任してる高橋麻（たかはし）麻（ま）耶（や）っていうの。よろしく、えっと」

「門矢士だ」

「そう、よろしくね門矢先生。じゃあさっそくだけど行くわよ」

麻耶が踵を返して校舎へと戻って行くので士はおとなしく後を付いて行く。暫く歩いていると職員室へと辿り着き、そこで改めて簡単な説明を受けた。2-Aの副担任だったり、科目は英語を担当だったりと。

それが終わるころには午後の授業が始まる少し前になっており、

さつそく2 - Aの生徒に士を紹介するために教室へと向かった。

そして現在

士と麻耶が教室に入り、士の紹介を行おうというところなのである。

「えー、急に決まった事なんですが、今日から暫くこのクラスの副担任として来られました、門矢先生です。門矢先生からも一言挨拶を」

「門矢だ。英語を担当する。ま、よろしく頼む」

「それじゃ門矢先生、今からこのクラスは英語の授業なので後はよろしく願います」

「は？今から？」

「ええ、では頑張ってくださいね」

今からいきなり英語の授業だという事を告げると、麻耶はさつさと教室を後のしてしまった。自称天才である士にとって授業をすること自体は別に問題では無かった。

あまりに突然告げられたものだから、『もうちょっと早く言っとけよ』と心の中で麻耶に文句を垂れていた。そして授業を行うのは

面倒くさい事この上なかったが、目の前に居る約40人ほどの生徒をほったらかしにする訳にもいかなないので渋々授業を始めるのだった。

だが此処で問題というほどでもない問題が一つ発生していた。

「・・・どこからだ？」

そう、何処から授業を始めればいいのか分からなかった。さすがにこれは天才だとかは関係ない。誰かに聞こうかと目の前に居る男子生徒に問いかけようとした時、椅子を引く音がしたのでそちらに視線をやるとセミロング程の長さをした黒髪の女子生徒が1人立ちあがっていた。

「なんだ？」

「続きは68ページからです」

「あ、ああ。分かった」

今日の授業で始めるページを告げると、その女子生徒はさっさと座ってしまった。とりあえず始めるページが分かった土は天才ぶりを発揮し、そつなく授業を進めて行くのだった。そして彼の性格故なのか、1度目の授業だというのに既に生徒たちと打ち解けていた。

授業も終わりに近づいたころ、土はとある一文を訳させていた。

「I have spilled milk on the plate. この文を誰かに訳してもらうか。そうだな・・・、よし、お前だ。そのちよつともつさりした頭の」

「あ、あたしの事!？」

「当たり前だ。他に誰がいる？」

「私はたなま棚町薫あかるっていうの。もつさり頭じゃないわよ」

「分かった分かった。じゃあもつさり頭　じゃなくて棚町、訳してみる」

「え、えつと・・・」

訳させるのに指名したは良かったが、どうやらこの棚町薫氏は勉強が出来ない部類らしい。高校2年ならこの程度の英文訳せて当然なのだが。

ならば何故こんな英文をやっているのかといえば、慣用表現の手法としてこの文章を出したのだった。

「分からないのか?こんな中学生でも出来るぞ」

「うっ・・・」

本当に分からないのか、今にも頭から湯気が出てきてしまいそうなほど唸っているではないか。さすがに可哀想になって来たのか、士はちよつとしたヒントを出してやる事にした。

「一つ一つの単語を訳して意味を繋げてみる」

「え？ええつと・・・、ミルクにお皿、でしょ？えつと後は・・・」

考え出してから約1分が経過したが、薫はいまだに考え込んでいる。授業時間だけが無駄に過ぎて行く。中学生でも訳せるような文章に苦戦している薫に呆れた士は、『当てる奴間違えたな』と思っていた。

「・・・まだ出来ねえのか？」

「んと・・・、あ！分かった！」

「訳してみる」

「私はお皿の上のミルクをこぼしてしまった、でしょ？」

「はぁ・・・」

薫の日本語訳を聞いた士は思わずため息を吐いていた。最初に言っておいたはずである。この文章は慣用表現の文章だ、と。

「な、何ため息ついてんのよ」

「お前、俺の話聞いてなかったのか？」

「聞いてたわよ。この英文を訳せって」

「その前だ」

「えっと、何か言ってたっけ？」

「はあ……」

2度目のため息が出る。『こいつ本当に人の話聞いてねえな』と、そう思ってしまう程に土は呆れていた。

「確かに単語の意味を繋げろって言ったけどな、そのあと直訳してどうすんだよ」

「だって訳せって言ったじゃない」

「俺はな、この文章は慣用表現だからより要約して訳せって言ったんだよ」

「そんなの分かんないわよ」

「もう座っていいぞ。そうだな……」

確かに薫の訳は間違っではない。直訳であれば、だ。さっきの文章を慣用表現で訳す場合は、日常の中で使う様な表現にしなければならぬ。そうすると当然、日常の中で『皿の上のミルクをこぼしてしまった』なんて表現はしない。するとすれば、本当にその事態が起きた時くらいだろう。

薫のせいではほとんど時間が無くなってしまったので、土は勉強の出来そうな奴を当ててさっさと終わらせようと考えた。そこで目に付いたのが、最初にページを教えてくれた如何にも真面目そうな少女だった。

「お前、名前は？」

「あやつじ 絢辻です」

「なら絢辻、訳してみる」

「はい」

土に指名された絢辻という生徒はスツと立ちあがると、薫の時とはまるで正反対の様にスラスラ訳し始めた。

「この文章は直訳すれば榎町さんが訳したものであっていると思いますが、門矢先生が言うように慣用表現に要約するなら『こぼしてしまったミルクはもう元に戻せない』という意味で捉える事が出来

るので、『取り返しのつかない事をしてしまった』というところでしょうか?」

「正解だ。やるじゃねえか」

「いえ、そんな」

絢辻が答え終わったところで授業の終了を告げるチャイムが校内に鳴り響いた。

「よし、終わりだ。じゃあな」

そつなくこなしていたとはいえ、慣れない事をしたせいか疲労感が強かった。早く休憩したかった土は、授業の開始と終了時にある挨拶も無しにさっさと職員室へ撤退していった。

現在の時刻はPM6:45。既に学校は終わっているこの時間、土はマシンディケイダーに乗って商店街へとやって来ていた。

ちなみにだがあの英語の授業のあと、他のクラスの授業が無かったため士は宿直室で熟睡していた。そして麻耶に起こされてみれば授業はすべて終了しており、生徒は部活動などに励んでいた。

士はこの世界の住人ではないのだから当然家など無い。しかしここは学校である。宿直室もあればシャワールームもある。タダで寝泊まりするには十分だった。唯一何とかしなければならぬのは食事だが、材料さえあれば問題無いので、それを買出しに来ているのだ。

適当に食材を買った士がマシンディケイダーが止めてある場所まで歩いてみると、路地から何やら音が聞こえてきた。不審に思った士が『面倒事じゃなきゃいいがな』と思いながらも覗いてみると、そこには今日見知ったばかりの顔があった。

「ほんつとありえない！」

(は?)

「どれだけあたしに頼れば気が済むのよ。自分の事は自分でしなさいよねー！」

路地を覗いた士の視界には、設置されたゴミ箱を蹴りまくっている絢辻の姿があった。本気で蹴っているのか、ゴミ箱の形は変形している。

「仕事でしょ？それで稼いでるんでしょ？まったく能無しなんだから！」

絢辻がより一層の力を込めて蹴りを入れると、耐えきれなくなつたゴミ箱が倒れて中身が散乱する。

「もうっ！何で倒れんのよっ。最悪！もつとちゃんと地面に打ち付けておきなさいよね。あたしが安心して蹴れないじゃない！」

何といえはいいのだろうか。とにかくもつひたすら関わりたくない。しかしそこはこの土さん、放っておく事は出来ないらしい。口は悪いが根は優しい人間なのだ。

一方、絢辻は散乱した中身を拾っていたが、キレながらだった。

「もお〜！どうしてこうなるのよ！チマチマチマチマ面倒くさいわねえっ。あああ〜〜！」

（ものすげえギャップだな）

「手伝つてやるぞ絢辻」

「えっ？門矢先生！？」

「1人でやるのは大変だろ？」

「は、はい……」

2人でやるとやはり早いもので、僅か十数秒で片付け終える事が出来た。そのまま2人は商店街の方へと出た。

「えっと、さっきの事なんですけど……。もしかして私が空き缶を拾う前に……。な、何かしていると見てたかな？なんて」

「ゴミ箱蹴ってたところか？」

「あ……。見てたんですね」

「たまたまな」

「はあ……。バレちゃったか」

突然絢辻の雰囲気が変わった。というよりは、ゴミ箱を蹴っていた時のそれに近いというべきだろう。

「何か訳ありみたいだな」

「私にだって色々あるのよ」

「そうか」

「コノコト、ガツコウデバラス？」

「別に言わねえけどよ。てか喋り方おかしくねえか？」

突然絢辻の口調が棒読みの如く変化した。その口調で話す絢辻はある意味、物凄く怖かった。

「ソナナコトナイワヨ？」

「おかしいだろ……。まあ心配すんな。他人の事言いふらすのは趣味じゃねえからな」

「……、ホントカシラ？」

「お前もしつこい奴だな」

「まあいいわ。それじゃ」

「帰るのか？」

「さあ、どうかしら？」

「仕方ねえな……。来い」

「え？」

士の問いかけをはぐらかして立ち去ろうとした絢辻の手を掴み、士は直ぐ近くに留めてあるマシンディケイターまで歩いて行った。到着すると、士は絢辻にヘルメットを手渡した。

「何よコレ」

「ヘルメットだ」

「そんなの見れば分かるわよ。被れって言うの？私を何処に連れて行く気よ」

「家に帰りたくねえみたいだからな。いいところに連れてってやるよ」

「いいところって・・・まさか」

「ウダウダ言っつてねえで早く乗れ」

半ば無理やりにマシンディケイダーに乗せられ、目的地も分からないままどんどん走って行く。今更降りる事が出来ない絢辻は、流れて行く景色をボーっと見ながら豹変した自分を見ながらも態度を全く変えなかった土が何処へ連れて行ってくれるのか、少しだけ楽しみだった。

走る事10分から15分程が経った頃、目的地に到着したのか土はマシンディケイダーのエンジンを止めた。着いた場所というのは、絢辻のよく見知った場所だった。

「ここって学校じゃない。どこがいいところなのよ」

「こつちだ」

ここまで来たら土が何をするために連れて来たのか確かめるまで帰れない。絢辻はどんどん歩いて行く土の後をおとなしく付いていた。

校舎の中のとある一室に2人は居た。部屋の中央には大きな机が6台、前方には黒板、後方には沢山の調理器具が置かれている、所謂家庭科室という場所だった。

「家庭科室？ここで何するのよ」

「ここでやる事っていったら1つしかねえだろ」

絢辻を椅子に座らせた土は袋から野菜や肉を取り出した。人参や白滝といった野菜類は綺麗に洗った後、輪切りや一口サイズに切り、牛肉は適当な大きさに切り分けていく。

土の手際の高さに感心しているのか、絢辻は先程から黙って彼の手元を見つめていた。と、ここで土がその沈黙を破った。

「そっぴゃお前、何て名前だ？」

「絢辻よ。知ってるでしょ？」

「そっちじゃねえ。下の名前だ」

「詞よ。<sup>しつか</sup>言偏に司るって書いて『つかさ』って読むの。門矢先生は？」

「士だ」

「偶然ね、同じ名前だなんて」

「まあ俺のは武士の士で『つかさ』だけだな」

お互いの名前が一緒だという事を知り、軽い驚きを見せた詞。しかしの後、両者は黙りこみ会話が続く事はなかった。

士が調理を開始して20分から30分程度が経過した。既に時刻はPM7:40になっており、夕食というにはもう遅い時間だった。

「よし、食べるか」

「すき焼き？」

「冬といたら鍋だろ」

「まあそうかもしれないけど」

「遠慮せず食べ。上手いぞ」

「普通自分で言うかしら」

小馬鹿にしたように呆れた表情をしながらも、お腹が減っている詞は最初に人參を口に運んだ。既に土は自分の皿に肉をどっさり取っており、上手いのは当然と言わんばかりに食べていた。

「どうだ、上手いだろ？」

「・・・、意外ね。こんなに上手だとは思わなかったわ」

「俺は天才だからな。出来ない事は無い」

「・・・・・・・・」

詞は少々冷めた視線で土を見ていた。だが実際、土は何でも容易く、そつなくこなしてしまう。故に天才と名乗っても差し支え無かったりする。

遅めの食事が終わると、土は食器や調理器具を洗いながら結構真剣な顔で詞に問いかけた。

「お前を見てて思ったんだが、友達居ないんじゃないのか？」

その問いかけに多少の驚きを覚えた詞だったが、それが表情に出る事は無かった。かなりのポーカーフェイスである。

「……。ええ、居ないわよ」

「ま、あんな白黒を演じてりゃ居ねえだろうな」

「白黒って?」

「クラスの連中と居る時は猫かぶってるだろ?で、普段のお前で居る今は差し詰め黒じってところだな」

「ソウネ。デ、ソレガナニカ?」

「分かったからそれは止める。俺が悪かった」

また棒読みになった黒辻　ではなく詞に止める様に諭す。棒読みで話す詞は、土が今まで戦ってきたどの怪人よりも恐ろしかった。

「で、何で猫被ってたんだ?」

「ストレートに聞くのね」

「回りくどいのは嫌いだからな」

「……。こうしてるのはあたしの目標に必要な事だから」

「目標?」

「それは内緒」

さすがに目標が何なのかまでは教えてくれなかった。だが詞の本性からして土と出会ったのが今日だからという理由ではない事を土は見抜いていた。

「なあ、お前誰かを信じられるか？」

「っ、……………」

「まあお前がそれでいいならいいけどな。送ってやるから準備しろ」

「……………」

皿を洗い終えた土は詞を送るためにエプロンを外して上着を着た。踏み込まれたくない事に踏み込まれた詞は無言で帰る準備をしていた。

駐車場へ出ると辺りは月明かりでうつすらと照らされているが、気を付けていないと躓いて転んでしまいそうだった。校舎から出て少しというところで突然土が歩みを止め、右腕を詞の前に出して彼女の歩みも静止させた。

「待て。何か近付いて来る」

「え？」

ぼんやりとした明るさの中、何かの気配を感じた土がその方向を凝視していると、2メートルを遙かに超える巨体を揺らしてゆつくりと近付いて来る異形の存在だった。そしてその姿は詞も認めたらしく、彼女が発した声は彼女の感情を表すかのように震えていた。

「な、何よアレ！こっちに来るわよ」

「こっちだ」

土が詞の手を取ってマシンデイケイダーまで走り、その影に詞を隠して彼女に小さい声で告げた。

「ここに居ろ。動くなよ」

短くそれだけ告げると土は急いで来た道に戻って行った。残された詞は土の背中を睨みつけるように見ていた。

（どうせ私を置いて逃げるんでしょ？そんなの目に見えてるんだから）

土が向かったのは異形の存在の元なのだが、そうは思わず、自分を置いて逃げたのだと考えた詞は彼の後を追いかけるのだった。

異形の存在の元へと戻って来た土は、『それ』を見て心底驚いていた。何故なら、『それ』は以前に倒したはずの存在だったからだった。

「お前・・・牛鬼か!？」

土の目の前に居るのは、ビビキの世界で倒したはずの伝説の魔化魍・牛鬼だった。3メートルに迫ろうかという身長、300kgは優に超えている体重。それはまさに化け物と呼ぶに相応しい存在である。

「何でこの世界に居やがんだ?・・・、今は倒すのが先か。変身!」

<KAMEN RIDER・DECADE>

「さて、この牛鬼が本物かどうか試してみるか」

士は素早くデイケイドライバーを装着してカードを装填し、デイケイドへと変身する。とはいえ、このままの姿で牛鬼と戦うのが厳しいということは既にヒビキの世界で実証済みである。ライドブッカーからカードを一枚引き抜き、直ぐにデイケイドドライバーへと装填する。

<FORM RIDE・DEN・OX>

D電王アックスフォームは以前にも変身したが、結局牛鬼には勝てなかった。しかし士は敢えてこのフォームにフォームライドした。変身して息を吐く暇も無く、牛鬼が突進してくる。そしてこれまた以前と同様に士はカードを使う。

<ATTACK RIDE・TSUPPARI>

「はあっ！」

牛鬼に向かって高速の突っ張り攻撃を仕掛ける。その威力で一旦は牛鬼が動きを止めるが、やはりそれをものともせずD電王アックスを殴り飛ばす。

「ぐあっ!？」

牛鬼の反撃を受けてしまったD電王アックスは地を転がるが直ぐ

に体勢を立て直す。こうなる事は予想の範囲内だったため、牛鬼に攻撃される瞬間に後ろへ跳ぶことでいくらか威力を削いでいた。故に大したダメージは無かった。

「この力と防御力、本物が。そうじゃなかったとしても、本物と同等だな。前の時は無かったが、今回は本職で行かせて貰うぜ」

< K A M E N   R I D E ・ H I B I K I >

「はっ！」

D電王がカードを装填すると、身体を紫色の炎が包み込む。それを振り払うように腕を振ると、D響鬼へのカメンライドが完了している。

D響鬼が牛鬼へと駆け、拳と蹴りを連続で叩き込んでいく。するとどうだろうか。D電王アックスの時は効きづらかった打撃が、魔化魍を倒す本職のライダーの姿であるためかそこそこ効いている様であった。

「お前と戦うのは正直ウンザリだからな。さっさと決めるぜ」

< A T T A C K   R I D E ・ O N I B I >

D響鬼が口から、いや口があるであろう場所から火炎放射の如く炎を吹き出して攻撃を行う。勢い良く噴射された炎は牛鬼に一直線

に向かい、その身体を焼き払う。しかしその程度で倒せる相手ではないし、そのことは土も良く分かっている。当然、攻撃は終わらない。

「まだまだ」

< ATTACK      R I D E ・ O N G E K I B O U      R E K K A >

音撃棒・烈火を両の手に持ち、牛鬼に向かって振りまわす。複数の烈火弾が放たれ、牛鬼の身体に当たっては弾け、確実にダメージを与えて行く。10発程が命中しただろうか。そのころには牛鬼もそれなりのダメージを受けているのか、最初のころほどの勢いは無くなっていた。

D響鬼がそろそろ止めを刺すためにファイナルアタックライドのカードを取り出そうとしたとき、牛鬼があらぬ方へと身体を向けた。明らかにD響鬼とは違う方向を見ている。D響鬼が「何処見てんだ？」と思つた矢先、牛鬼はその方向へと走り出した。牛鬼が走って行く先へと視線をやると、そこには見知った少女が1人佇んでいるではないか。あろうことが牛鬼は標的をその少女へと変更したということをD響鬼は瞬時に理解していた。

「くっそ！」

D響鬼も慌てて少女の元へと駆ける。両者の少女までの直線距離はD響鬼の方が短い。しかし牛鬼の突進の速度は早く、僅かな距離

のアドバンテージなど有ってない様なものである。標的にされている少女はといえば、恐怖で動けないのであろう。依然としてその場に立ち尽くしている。その間にも牛鬼は少女の眼前に迫っていた。

士がマシンディケイダーの傍に残して行った少女、絢辻詞はその後すぐに士を追いかけた。自分を残して逃げたであろう教師を問い詰めてやろう。そう思って追いかけて来たはずなのに、詞の眼に映ったものは彼女の日常では決してあり得ないものだった。

先程の巨大な化け物と、まるでどこぞの特撮ヒーローの様に変身した士が戦っている。撮影のカメラも無ければドッキリな訳でもない。本当に命懸けで戦っているのだ。それくらい詞にも場の空気が分かる。

だがどうにも信じられない。こんな事はフィクションの中でしかありえない。目の前で起きているこの出来事もぶっ飛びすぎていて自分の眼で見ているというのに未だ半信半疑で茫然と立ち尽くしている。

「え？ちよ、ちよっと、来ないですよー！」

何があったのか。化け物が急に自分の方向へと突進してきた。しかもスピードは人間が走る速度より遙かに早い。仮にそれで無かったとしても、突然の出来事に詞は頭が付いていかず後ずさるのがやっただった。

ダメだ、殺される。詞がギョツと目を瞑る。しかし、何時まで経っても衝撃が襲ってこない。痛みを感じる間もなく殺されてしまったのだろうか。詞がゆっくり目を開けると、化け物を必死に押し留めている土だった人物の後ろ姿が映り込んだ。

「早く逃げろ！」

「え、あ……、えと」

「ちっ」

ちらつと詞を振り返ったD響鬼は、彼女の足が恐怖で震えてまともに動かない事を察知した。つまり、これ以上牛鬼を進ませる事無く倒さなければならぬ。とはいえD響鬼では牛鬼を抑え込む程のパワーは無い。

「おらっ！」

無理矢理身体の間脚をねじ込み、前蹴りの要領で牛鬼を僅か2、

3メートルだが後退させる。出来た僅かな隙にカードを装填した。

<FORM RIDE・KUGA TITAN>

Dクウガタイタンフォームへとフォームライドし、同時にタイタンソードも装備する。作戦などロクに立てず、タイタンの高い防御力を活かして正面から突っ込みタイタンソードを振う。

真正面から攻撃し合っているため互いにダメージを与えているが、やはり牛鬼の防御力は並大抵のものではなくDクウガタイタンも押され始めている。

(絢辻との距離が近すぎる。仕方ねえ)

<ATTACK RIDE・AUTO VAJIN>

「こ、今度は何？」

マシンデイクイダーがオートバジンへと姿形を変えて現れた。駐車場までの距離が近いいため、僅か数秒での助っ人惨状となった。突然現れたロボットにさらに詞は混乱状態に陥っているが、それに構っている暇は無い。

オートバジンがバスターホイールからマシンガンを生鬼に向かって連射する。その弾丸を尽く受けた牛機は攻撃の手が緩んだ。そしてその隙を見逃すDクウガタイタンではない。すかさず突きをかま

すと牛鬼の胸部に命中し、ふっ飛ばした。

「絢辻を頼む」

士の言葉に反応し、頷く仕種を見せたオートバジンは詞の前に降り立ち、腕を横に出して彼女を庇う体勢を取った。

「真正面からやりあってちゃこっちが不利か。なら別の手といくか」

ライドブツカーから一枚のカードを取り出し、親指と中指で挟んでいるそれを人差し指で軽く2回トントンとすると、デイケイドライダーに装填した。

< K A M E N   R I D E ・ W   C Y C L O N E   J O K E R >

Dクウガタイタンを風が取り巻き、右が緑、左が黒の、本来なら2人で1人の仮面ライダーへとカメンライドした。さらに続けてカードを装填する。

「1人だがWだ」

< A T T A C K   R I D E ・ S A A   O M A E N O T S U M I W O  
K A Z O E R O >

「さあ、お前の罪を数えろ！」

DWサイクロンジョーカーは牛鬼を指差すように左腕を前に突き出し、W特有の決め台詞とポーズをとった。これが戦いにどう影響するかといえば、特に何の影響も無い。しかしWになった以上一度くらいはやっておくべきだろうと、正直悪ノリしてやった士だった。

K A M E N   R I D E   0 3   シロクロ（後書き）

お待たせしましたね。

新ポケモンやってたんですよ。

ポケモンリーグに到着しましたが、四天王そっちのけでポケモン育ててます。

あ、四天王なんて余裕で倒せますが、ドラゴンポケモン見るとつい育てたくなるものでw

それはさておき、本編は何の世界か分かったかな？

そう、何を隠そうア   ガミの世界です。現在アニメが放送中のアマ  
ミです。

この作品好きなんですよね。主人公が変態紳士すぎるw

次回でこの世界が終了し、次の世界に入ります。

次回   K A M E N   R I D E   0 4   トモダチ

KAMEN RIDE 04 トモダチ(前書き)

ATTACK RIDE・HIGH SPEED UPDATE

やらなければならない事があったのに……。  
でも後悔はしていない……、しています。

これまでの仮面ライダーディケイドは 。

次に士がやって来た世界は、何の変哲もない極めて平穏な日々が続く世界だった。この世界での士の役割的なものは臨時の教師だった。輝日東高校の2-Aの副担任兼英語の担当となった彼は、早速2-Aで授業を行っていた。

その日の夕方、食材の調達に商店街に来ていた士は路地で2-Aのクラス委員をしている絢辻詞を見かけた。その時の彼女は学校で見せていた優等生の顔とは真逆で、設置されているゴミ箱を變形させてしまうほどに蹴りまくっていた。これは何かあるな、と思った士は半ば強引に彼女を学校へと連れて行き、何故か晩御飯をふるまっていた。

「ここに居ろ」

「お前……、牛鬼か!？」

「え?ちよ、ちよつと、来ないでよ!」

<KAMEN RIDE・W CYCLONE JOKER>

「さあ、お前の罪を数えろ!」

詞を家まで送ろうと外へ出ると、以前倒したはずの伝説の魔化魍・牛鬼が出現した。詞を守り、牛鬼を倒すためにデイケイドに変身して戦う士。自分を見捨て、1人で逃げるつもりだと思って戦いの場へと来てしまった詞。

彼女に牛鬼が迫った時、デイケイドは罪を暴く2人で1人の仮面ライダーへとカメンライドした。果たして詞を守る事は出来るのか。

W独特の決めポーズを取っていたDWサイクロンジョーカーは、突きだしていた左腕を降ろしライドブッカーからカードを取り出した。Dクウガタイタン時にタイタンソードの突きでふっ飛ばした牛鬼は立ちあがると懲りずに突進してくる。

しかしWDには何か策があるのか、特に慌てているような素振りを見せる事も無い。取り出したカードをデイケイドライバーに装填する。

「おっと、サイクロンジョーカーじゃ今までと変わんねえからな。こっちで行かせてもらっぜ」

< F O M R   R I D E ・ W   L U N A   T R I G G E R >

音声が発せられると、緑と黒だったボディカラーは右が黄、左が

青へと変化した。そして右手には専用のエネルギー銃・トリガーマグナムが握られている。牛鬼が迫る正面にスツと構える。

「これならどうだ？」

DWLナトリガーがトリガーマグナムの引き金を引くと、黄と青が混じったエネルギー弾が複数発射され、予測も出来ないほど不規則な弾道で四方八方から牛鬼に襲い掛かった。

余りにも不規則すぎる弾道は牛鬼に回避する事を許さない。発射されたエネルギー弾は尽く牛鬼に命中して火花を散らした。元々のダメージに加え、今の攻撃を受けたダメージはかなりのものだろう。遂に牛鬼がその場に倒れ伏した。

DWはチャンスとばかりに2枚のカードを取り出し、ドライバーに連続で装填する。

「こいつでどうだ」

<FORM RIDE・W HEAT TRIGGER>

<FINAL ATTACK RIDE・W W W W>

さらにフォームライドを行い、今度は左側のトリガーはそのままに右側のルナが赤に変化した。赤はヒートの能力を宿す姿だ。より一層攻撃力を高める際に使用される。そしてその姿でファイナルア

タックライドを発動させた。

「喰らえ！」

DWヒートトリガーが引き金を引くと熱光線が発射される。それは倒れ伏している牛鬼に届くと爆発を引き起こした。

「ちっ、逃げやがった」

つい先ほどまで牛鬼が居た場所は、地面が今の熱のせいで焦げているがそれだけだ。牛鬼の肉片の欠片一つも落ちていないし、爆発の際に飛散した様子も無かった。それは牛鬼に逃げられたと判断するには十分だった。

周囲を少し見回すDWだが、牛鬼の気配は全く感じられなかったため変身を解除して詞の元へ歩み寄った。

「大丈夫か？ 絢辻」

「だ、大丈夫よ。それより今のは何なのよ！ 訳が分からないわ！」

「詳しい事はまた明日だ。送ってやるから乗れ」

「ちよつと！ 今説明しなさいよ！」

「少し長くなるから明日だ。今乗らないなら1人で帰れよ？」

「う……、分かったわよ」

さすがに詞も今の出来事があったあと、夜の帰路を1人でというのは怖い。そして士は言った事を本当にやる人間だと詞は判断していた。

今の戦いにしても、士は自分を牛鬼から離して1人で立ち向かっていったのだ。詞からしてみれば、自分を守ったところで士にメリツトなどありはしない。むしろ怪我をしたり、最悪死ぬかもしれないというデメリットばかりだ。だから自分を残して1人で逃げるのが当然だと思っていた。

しかし士はそうしなかった。逃げてしまっても構わないというのに、詞を守るために戦った。それがその判断材料となっていた。

その後、おとなしくマシンデイクイダーの後部座席に乗った詞は、家に到着するまで終始無言だった。無意識だったのかどうかは不明だが、学校に連れて来られる時よりも少し強く士に掴っていた。

詞を家まで送り届けて学校へと戻って来た士は、シャワーを浴びた後、宿直室で布団に入っていた。まだ寝るには少し早い時間かと思わなくもないが、牛鬼との戦いで疲れているのか、その行動に一切の迷いは無かった。

「それにしても牛鬼か。なんでアイツが……。考えても分かる訳ねえか。……。だが牛鬼を倒すまでは次の世界に行く訳にもいかねえな。それに絢辻の……。こと……。も……。」

ブツブツと呟いていた士だったが、睡魔には打ち勝てず夢の世界へと意識を手放した。

士がぐっすりと眠りについて寝返りをうっているころ、詞はようやくベッドへと入っていた。詞も今日の出来事について色々考えていた。が、牛鬼の事についてはなく、士という人間についてだった。

「あの人、どうしてあたしを置いて逃げなかつたんだろう。そうすれば自分が傷つく事も無いのに。でも門矢先生は……。門矢先生なら……。って何言ってるよのあたしは！ 違うんだから」

何が違うのだろうか？ 詞が何を考えているのかは詞のみが知るところだ。周囲に居る人間とは利用し合うだけという考えの詞。そこには馴れ合いという関係は存在しない。そう、利用するだけであり友達などというものはあり得ない。だから詞がこんな事を考えるの

は極めて珍しい事だった。

「でも……。本当のあたしを見ても何も変わらなかった。危険を顧みずにあたしを守ってくれた。……。門矢先生なら」

詞は自分の本性を知っても尚、学校に居た時と同じように接し、牛鬼から自分を守ってくれた土に対してその固く閉ざされた心を開き始めていた。彼ならば信じて、決して自分を裏切ったりしないと思えて来ていた。

そして、また明日も晩御飯御馳走になろうかな。なんて考えながら、詞は眠りについた。

その時、土は暇を持って余していた。余りにも暇すぎてすることが無く、何となくグラウンドで行われている体育の授業を眺めていた。もちろんほぼ私室と化した宿直室の窓から。

今体育の授業を行っているのは自分が副担任をしている2・Aだった。男子たちは気だるそうマラソンをしているというのに、何故

か女子はドッジボールをしている。マラソンとドッジボールならどちらがいいかと聞かれれば、明らかにドッジボールの方がいいと答える生徒の方が多いだろう。むしろマラソンを選ぶ生徒がいるかどうかすら疑問であるが。

それはさておき、女子のドッジボールの雲行きが何やら怪しくなっている。コートをよく見てみれば、片方のコートには多数の女子がいる。というか、外野にいるほんの数人の女子を覗けば全員だ。対して、もう一方のコートに居るのは詞ただ1人である。

そうなった原因は不明だが、大方詞を嫌う生徒がそう仕向けてでもいるのだろうと土は思っていた。

「仕方ねえ、助けてやるか」

さすがに見て見ぬ振りには出来ないこの土さん。口では面倒くさそうにしているものの、本心では助けようと思っっているらしく、スツと立ちあがった。

外に向かおうと身体を翻しかけた時、彼女たちに変化が起こった。1人の女子生徒が詞側のコートに入り、詞の味方に回ったのだ。

「あのもつさり頭は・・・」

遠目からでも分かるもつさり頭の生徒は勉強は出来ないが運動神経はとても良いらしく、次々に相手チームの数を減らしていく。

しかし終盤、その女子生徒は当てられてしまい外野へと回ってしまった。だが残っている相手の人数は僅か3人。この人数なら味方をしていた女子生徒程ではないが、それなりに運動が出来る詞でも十分に相手が出来人数だった。そして土が思った通り、詞は3人全員にボールを当てて見事勝利を収めた。

#### 放課後の家庭科室

この教室に何故か詞と薫が居た。放課後なのだから帰ってもいいのだが、この2人にはどうしても帰る事が出来ない理由があった。この2人がここに来て待つ事数分、ドアが開いて土が入って来た。

「よし、居るな」

「ちょっと、何でいきなり補習受ける事になってるのよ!」

「そりゃもちろん昨日の授業で答えられなかったからだ」

「答えたじゃない!」

「直訳をな」

「う”。。。だ、大体、何で絢辻さんが居るのよ!絢辻さんは補習受けるような成績じゃないでしょ」

薫が言うように成績が優秀なはずの詞まで居る。彼女が補習に呼ばれた理由は極めて謎である。

「あたしも補習を受けるんですか？」

「ああ。棚町は英語、絢辻は・・・、道德だ」

「道德？なんであたしが道德なんでしょうか？」

詞は極めて普段通りであるように徹した。薫が居るこの場で本来の自分を出す事は出来ないのだ。差し詰め今の詞は白辻といったところか。それにしても驚きの白さである。

「ああ、それは・・・」

「ソレハ？」

「えつとだな・・・」

「ドウシタンデスカ？センセイ」

「あ、絢辻さん？」

「うるさいわね！ちょっと黙って あ・・・」

「え？」

何時の間にか土を問い詰める事に一生懸命になりすぎていた詞は、

薫の前だというのにすっかり素の自分を出してしまった。それは薫の脳裏にしっかりと焼き付いた。そして土は土で微妙ににやけている。

「あ、えと・・・、ち、違うの！今は、その・・・」

詞は必死に取り繕うが、既に遅い。今の光景をおそらく薫は一生忘れる事は無いだろう。それくらい普段の詞からは信じられない言葉使いだった。

そして詞は激しく後悔していた。ほんの少しでも土に心を許してしまつた自分を殺してしまいたいほどに。こんな事なら、少しくらい優しくされたからといって土を信じようとするんじゃないかと思つた。

「絢辻さん・・・」

「・・・、はあ。そうよこれが本当のあたしよ。嫌になつた？幻滅した？・・・、まあ何でもいいけど」

しばらくの間、薫はポカンとした表情で詞を見ていた。その表情から詞はどうせ薫はこれで今まで以上に距離を置くようになると思ひ、土を睨みつつもさっさと帰ろうと立ち上がったその時だった。固まっていた薫の表情が微笑みに変わった。

「絢辻さん、そんな表情も出来るんだ」

「え？」

「何て言うか、普段教室で見てる時は・・・、上手く言えないけど偽物の笑顔って言うか、そんな感じがしてたから」

「棚町さん？」

「普段の優等生の絢辻さんもいいけどさ、あたしは今の絢辻さんのほうがスゴく人間らしくて好きかな」

「今の・・・、あたしが？」

「うん。今の絢辻さんなら友達になれそう」

「とも、だち」

普段決して詞が口にする事の無い言葉が、薫の口から詞の耳へと届く。その言葉を紡いだ薫は屈託の無い笑顔を浮かべており、それが本心からの物であることが伺えた。本当の自分を知って、いや、むしろ本当の自分を知ったからこそ友達になれるという彼女を、詞は茫然とした表情でしばらく見つめていた。

詞からすれば訳が分からない。どう考えたって普段見せている優等生の顔のほうが付き合いやすいだろう。なのに目の前の少女ときたら。詞があれこれグルグルと考えていると、薫が『よろしくね』と手を差し出してきた。

その手を握り返せば自分が今まで作ってこなかった、作ろうとも思わなかった『友達』という関係になってしまう。そういう関係になって、信じている相手に裏切られたら傷付くのは他でもない詞自身だ。だったら最初から『友達』なんて関係にならなければいい。そう思っただけで生きてきた。

だから薫とも『友達』にはならない。そう思っている筈なのに、普段の彼女を見ていれば彼女は裏切ったりするような事は大嫌いだということはあるし、今日の体育でも自分を庇ってくれた。それを思い出すと、棚町薫という人間は信じられるんじゃないかと思いはじめた。

そして同時に、先程土に対して後悔したことを後悔した。きっと土はこうなる事が分かっていた自分達を補習にこじつけて呼んだのだと。つまりそれは、土が自分の事を真剣に考えてくれているという事だった。

「あたしじゃダメかな？」

「あ、えっと」

余りに色々考えすぎていた詞は、薫が手を差し出している事をすっかり忘れていた。改めて薫を見た詞は、1つの決断をした。今回だけ、この1度だけ信じてみよう。もしこれで裏切られたら、もう一生誰も信じない。そう固く決意して差し出された手を握った。

「……、いいの？」

「一度だけ信じてみようと思っただけよ」

「責任重大だな、棚町」

「な、何がよ？訳の分からない事言わないでよ、先生。まあそれとはかく、よろしくね絢辻さん」

「ええ。門矢先生、一ついいですか？」

「ん？何だ？」

そう言われて土はハツと思いだした。先程道德の補習だとか言ったら、詞が黒くなった事を。また棒読みになって問い詰められるのかと、正直焦っていたがそれは無意味だった。

「こうなる事が分かってて私たちを補習に呼んだんですか？」

「……、別にそんなんじゃねえよ」

土がそっぽを向いてしまったため、きつと照れてるんだと詞は思った。口が少し悪い土だから、本心を口に出来ないことくらい分かっていた。

詞の問題が少しは解決したところで補習を始めようとした時、詞が土にとって余計な事を思い出してしまった。

「そう言えば先生、昨日の事まだ聞いてませんか？」

「昨日？何かあったの？」

「ああ、あれは・・・、また明日な」

「ちょっと！今日教えてくれるって言ったじゃない！」

「何の話してんのよ？」

「・・・。仕方ねえな、柵町が居るから明日にしようと思ったんだが。分かった」

洪々了承した士が異世界が無数に存在することや、仮面ライダーの事を簡潔にまとめて話してやった。最初は信じ難そうに険しい表情を浮かべていた詞だったが、昨日の事と照らし合わせると即否定という訳にもいかなかったし、むしろ信じざるを得なくなっていた。

一方の薫はというと、最初の方こそ詞と同じように信じられなさそうにしていたが、途中からはどうでも良くなったのかただ面白そうに聞いていた。

「じゃあその内この世界からも居なくなるんだ？あたしの前から」

「様々な世界を旅してる訳だからな」

「やっぱりあたしを裏切るんじゃない。だから誰も信じたくなんか」

「それは違うぞ絢辻」

「どう違うって言うのよ」

「お前にはもう友達がいるだろ？お前の事を庇ってくれる、大切に思ってくれている友達が。俺はお前にそういう友達が出来るまで面倒を見てやるって言う、いわば世話係みたいなもんだ」

士がえらく真剣な事を言うものだから、詞も薫も黙りこんで聞いている。彼の表情は真剣そのものでしかない。

「絢辻、生きていれば辛い事や悲しい事なんて沢山ある。でもな、その中で棚町みたいに大切な仲間ってのを見つけていくもんなんだ。お前は独りぼっちじゃない。それだけは忘れるな」

「先生……」

「さ、この話は終わりだ。さっさと補習始めるぞ」

「え”！？補習するの!？」

「当たり前だ。補習するから呼んだんだろうが」

話の流れ的に補習をせずに終わりそうだと、内心凄くテンションが上がっていた薫だったが、やはり補習からは逃げられなかった。

その後、薫は延々と英語の補習を受け、詞は道德の補習として子供向けの教育番組を見せられていた。

補習が終わったのは午後7時。冬である今の季節、この時間はずっと太陽が沈んで辺りは真つ暗になっている。とはいえ澄んだ空気は月の光をより一層明るく見せ、懐中電灯などが無くともそれだけで外を歩ける勢이었다。

少し前まで部活動を行っていた生徒も今の時刻になつては既に誰も居ない。そのグラウンドを3人は歩いていた。バイクに3人乗りは交通違反であるため、さすがの土もそれはしなかった。故に徒歩である程度人がいるところまで送ろうとしていた。

「何か凄く嫌な予感がするんだけど」

「どうかしたの？ 絢辻さん」

「昨日の今日だからまさかとは思つけど……。って、言ってる側から！ もう嫌！」

「な、何あれ！？まさかあれが補習前に言ってた！？」

「出やがったな牛鬼。お前たちは下がってる」

詞の嫌な予感が見事に的中する。校門の方から3メートル近い巨体の異形が近付いて来る。しかし容姿には昨日に比べると変化があった。赤と金の装甲が付いているのだ。

「装甲響鬼ならぬ装甲牛鬼ってところか？何にせよ倒すだけだがな。変身！」

<KAMEN RIDE・DECADE>

「うわっ！ホントに変身した！？」

「棚町さん、早く！」

「え、ええ」

詞と薫は慌てて校舎の方へと走って行った。ディケイドはカードを一枚取り出し、ドライバーに装填する。その間にも牛鬼はディケイドに突進してくる。

<FORM RIDE・W LUNA TRIGGER>

「馬鹿の一つ覚えか？」

昨日と同じように何発ものエネルギー弾が不規則な弾道で牛鬼に襲いかかった。しかし今日は様子が違う。エネルギー弾が何発身体に当たろうが、一切合切をなかつた事のように突進が止まる事は無い。

お蔭で避けるタイミングを失ったDWは真正面から牛鬼の突進を受ける事になり、軽く20メートルは吹き飛ばされた。よろけながら立ちあがると、次のカードを引き抜く。

「これが駄目ならもう力づくしかねえだろ」

<FORM RIDE・W FANG JOKER>

ルナトリガーによる牛鬼撃破を諦めた土はWの特殊強化形態で、右が白、左が黒のファンゲジョーカーへとフォームライドを行った。

<ATTACK RIDE・SHOULDER FANG>

音声と共にショルダーセイバーが出現し、それをブーメランの如く牛鬼に向かって投げつけた。それは不自然なほど牛鬼の周囲を飛びまわり、牛鬼の身体から幾度も火花を散らす。

一見派手に見え、ダメージを与えているようにみえるが実際はそうでもなく、牛鬼を足止めしている程度に過ぎなかつた。

「決めるぞ」

<FINAL ATTACK RIDER・WWW>

フアングサイドの脚にマキシマムセイバーが出現し、飛び回し蹴りの要領で牛鬼を切り裂く。必殺技だけあって吹っ飛ばしたが、依然として牛鬼は立ちあがって来る。

「何て防御力してんだ」

余りの耐久力にもうDWも呆れている。だが牛鬼がどれだけの耐久力を持っていようと、倒さなければならぬ。DWは気合を入れると牛鬼に向かって駆けて行った。

DWが牛鬼と戦っている最中、詞と薫の前には不思議な生き物(?)がいた。身体は白く、目は赤い。そして羽を羽ばたかせて空中に居る。

「本当に先生を助けられるの？」

「もちろんよ。あなたたちがちゃんと戦えただけど」

「あたしがやるわ」

「危険よ柵町さん」

「大丈夫だって。あたしこっに見えても運動神経いいほうだから」

「なら薫ちゃんが変身ってことでいい？」

「ええ、お願い」

「行くわよ」

「ちょっと恥ずかしいわね・・・、ええっと、変身！」

ハート形をした花びらにも見えるものが薫を取り巻き、それが彼女に張り付いて装甲を作り出していく。薫を覆っていたそれが弾け飛ぶように剥がれた下にはキバに似た、しかしキバではない姿があった。

「柵町さん・・・本気なの？」

「ええ。先生を助けて、絢辻さんの事も守るから。待ってて」

「まも、る」

薫が駆けだした後、ぼそっと呟いた詞の顔はこんな状況でも僅かに微笑みを浮かべていた。

一方、DWファンングジョーカーはかなり追いつめられていた。いくら攻撃しようとも牛鬼はビクともしない。そして今も、DWは地面に這いつくばっていた。

「くっそ。仕方ねえけどアレを　　っ!？」

突如として、牛鬼の背中から火花が散った。何事かとDWも牛鬼も思わずそちらに意識がいつてしまう。牛鬼の振り返り様、2度3度と尚も火花が散り同時に牛鬼が地に倒れ込んだ。

「キバーラだと!?!?!?!、夏海か?」

「先生！大丈夫！？」

「その声、棚町か？なんでキバーラに」

「そんなことより早くコイツを！」

「あ、ああ」

（キバーラが居るなら）

疑問は一旦置いておき、DWは急いで立ち上がってドライバーにカードを装填する。

<FORM RIDE・LUNA METAL>

今度は右が黄、左が銀のルナメタルへとカメンライドした。背中にあるメタルシャフトを抜き放つと、本来は固い金属であるがルナの力によって硬度を保ったまま鞭のようにしなる。幾度も振るっては牛鬼を滅多打ちにするが、それでも装甲牛鬼にはそれほどのダメージを与えているようには見えない。

「俺がアイツの動きを封じる。お前が決める！」

「え？あ、うん！分かった！」

「おらっ！」

DWが動作を大きくしてメタルシャフトを振り回すと牛鬼を拘束するように絡みついた。

仮面ライダーキバラーは剣を正面に構えると、背中に紫色をした光の翼を生やして突撃する。牛鬼と擦れ違い様に強力な一閃を叩きこんだ。ソニックスタブ、仮面ライダーキバラーの必殺技だ。それはキバラー曰く悪魔にも負けない力だとか。

牛鬼を拘束していたメタルシャフトはソニックスタブの衝撃でほどけ、とにかく強力な一撃を打ち込まれた牛鬼は地面を転がり回る。その間にDWをモザイクの様なエフェクトが覆い、デイケイドへと戻った。

「もう出てくんじゃねえぞ」

<FINAL ATTACK  
RIDE・de de de DE  
CADE>

デイケイドと牛鬼の間に10枚のホログラムカードが出現する。デイケイドがジャンプするとそれに合わせてデイケイドに近いカード程高く上昇して直線を保つ。

「はああああっ！」

1枚目のホログラムカードにデイケイドが飛びこむと、2枚目のカードから出現して3枚目に、といった具合に奇数枚目に飛び込んでは偶数枚目から飛び出す。

そして10枚目のホログラムカードから飛び出したデイケイドは丁度起き上がった牛鬼にデイメンションキックを叩きこんだ。

如何に装甲があつて強固な防御力を誇る牛鬼といえど、キバラーとデイケイドの必殺技を連続して喰らつてしまいつつとうとう限界に達した。十数メートルを吹き飛ばされた牛鬼は地面に落ちる前に空中で爆発を起こし、文字通り木端微塵になった。

「やったあ！やったよ先生！」

「ああ、そつだな。ん、何だ？」

牛鬼が起こした爆発から何かが飛び散り、それはデイケイドの装甲に当たった。拾ってみると焼け焦げていて何なのかは分からないが、それは明らかに牛鬼を構成していたものとは質感が違う。『牛鬼の装甲か？』と思つたデイケイドは、それを適当に投げ捨てて先に詞の元へ走つて行ったキバラーもとい薫の後を追つた。

デイケイドが去つた後、投げ捨てられた小さな破片らしきものは風化したように消滅した。

その後、人がそれなりに居る場所まで詞と薫を送って来た士は2人と別れる直前だった。

「それにしても先生って不思議な知り合いがいるのね」

「そうそう、こんなコウモリが友達だなんて」

「友達じゃねえっての」

「あらひどいじゃない。色々助けてあげたのに」

「色々迷惑かけたの間違いじゃねえのか？」

この場所に来るまで主に話していた事はキバーラの事だった。何故ここに現れたのか。それが一番の疑問だった。それを聞くと、何とも間抜けな答えが返って来た。『世界を移動するとき移動先を間違えた』そうだ。

それを聞いた詞と薫は『間違えてくれてよかった』と感謝していたが、士は『俺一人でもいけたけどな』とちよっと強がっていた。

さて、いよいよ2人がそれぞれの帰路につくため分かれようという時、土が口を開いた。

「絢辻、よかったな。お前の友達はお前の為に命を掛けて戦ってくれたんだ。大事にしるよ」

「はい」

「棚町。お前は勉強が出来ない」

「う……、他になんかないの？」

「だが、お前は人として大切なモノをちゃんと持ってる。この未来さきもそれを失くすなよ」

「あ……、わ、分かってるっば」

急に土に寝められた薫は照れ臭いのか、少々慌てている。

「先生、キバーラ、おやすみなさい」

「じゃまた明日」

「ああ」

「またね」

最後に短い挨拶を終えると、詞も薫もそれぞれの帰路についていった。しばらく彼女たちの背中を見ていた土も踵を返して学校へと戻った。

しかし宿直室に戻る事はせず、それどころか校内にすら入らない。向かった先は駐車場だ。マシンデイクイダーに跨るとヘルメットを被った。

「お別れの挨拶もなしに行っちゃうの？」

「さつきしただろ」

「あれは違うでしょ？」

「俺にとってはそうなんだよ。あいつらには悪いが、次の世界に行く。あんまり長居するとあいつらが俺から離れられなくなっちゃうからな」

「あはっ、あんたが離れられなくなるの間違いじゃないの？」

「うるさい」

すぐ隣に居たキバーラを鬱陶しそうに払いのける。小さいキバーラはそれだけでも簡単に飛ばされてしまう。

「ちょっとー痛いじゃない」

「お前がうるさいからだ。さっさと戻れよ。じゃあな」

「はいはい」

キバーラは別に一緒に来るつもりでもないらしく、土が目の前に出現したオーロラの中に消えていくのを見送っていた。

「気をつけなさいディケイド。これからも続くわよ」

キバーラが呟いた言葉は土に届く事は無く、月明かりが照らす闇の中に消えていった。

オーロラを通り抜けた土が居るのは、緑に囲まれた場所だ。少し離れた場所を見るとビル群が立ち並んでいる。そのことからここは郊外ってところか、と自己完結した。ちなみに時間的に夜である。前の世界から引き続き夜のままで、且つ時間も対して変わらないようであり大変助かっていた。

そんな中、土が下を見るとちょっとした祭りでもしているのかいくつも出店が並んでいる。その中で一際注目を集めているのが、特設のステージと思われる場所でライブをしているバンドグループだった。少し距離があるため聞き取り辛かったが、全然聞こえない訳ではなかった。

~~~~~

「……、中々ノリのいい曲だな。それにしても何だこの格好は」

土が自分の服装を見ると、何か凄い格好をしている。一言で言うなら特殊部隊(?)である。紺の制服らしきものの上に防弾チョッキと思われる物を装備しているではないか。

とにかくその恰好が気になって仕方が無い土だった。

アマガミの世界が終了しました。

ちよっと強引かと思いますが、そこはディケイドなので多めに見てください。

さあ、いよいよ皆さんお待ちかね（？）あの世界にやって来ました。ここで土はどうなるんでしょうかね・・・続きはウェブで！既にウェブだがなw

引き続きこの世界に行って欲しいというリクエストを受け付けます。条件は同じですが、よければどうぞ。

KAMEN RIDE 05

乱雑解放(前書き)

お待たせしました。

正直今回は・・・続きはあとがきで！

これまでの仮面ライダーディケイドは。

友達を作ろうとしない、それ以前に周りに居る人間に心を開こうとしない少女、絢辻詞。独りきりの辛さを知っている士。だからこそ、彼女を放っておくことなど出来る筈が無かった。もっとも、表面上は如何にも面倒くさそうに振舞ってはいたのだが。

体育の時間のドッジボールの件で棚町薫ならば、詞を受け入れてくれるはずだと思った士は補習にこじつけて2人を呼び出した。詞は道德の補習ということに納得できず、士を問い詰める事に夢中になりすぎたことで薫に素の自分を知られてしまう。

しかし、薫はそんな彼女をすんなりと受け入れ、友達になれると宣言したのだった。

「ええっと、変身！」

「お前が決める！」

「お前の友達はお前の為に命を掛けて戦ってくれたんだ。大事にするよ」

「はい」

「お前は人として大切なモノをちゃんと持つてる。この未来もそれを失くすなよ」

「分かってるってば」

牛鬼との戦闘中にキバーラが現れるというちょっとしたハプニングもあったものの、薫が変身したキバーラとデイケイドの連続攻撃で牛鬼を撃破する事に成功した。そして二人を途中まで送り届けた士はこの世界を後にした。

次にやって来た世界は先程まで居た世界に比べれば幾分かは都会に見えたが、今土がいる場所は緑が多いだけにそれほど変わらないように思えていた。

この世界では一体何が土を待ち受けているのか。それとも何の事件も起こらない、平和な時間が続くのか。通りすがりの仮面ライダー、デイケイド。その瞳に何を視る。

名前も知らないバンドグループが演奏を続ける中、夜空には色採り採りの光が昇る。そしてそれらは大きく、鮮やかな華を空一面に咲かせる。それは夏の風物詩の代表である花火。

その花火と、自分がいる場所から階段で下りた先に居る5人の少女たちが浴衣を着ている事から、この世界の今の季節が夏ということとを察する事が出来た。

「花火か……。こんな格好で見るのもどうかと思うが、まあいいか」

そう、土は今、まるで何処かの国の特殊部隊なのではないかという格好をしている。その恰好はこの場に不釣り合いすぎて、着ている土自身が自分の事を笑いそうになっている。しかしこの男、今回も例に漏れることなく『俺は何を着ても完璧に着こなしてしまうな』と思っていた。

土が策にもたれ掛かって暫く花火を見ていると、下の方に居る少女たちが騒いでいる。花火の音で少し聞き取り辛かったが、耳を澄ませていると何とか聞く事が出来た。

「さあ、わたくしたちも花火の様に燃え上がりましょう」

「ええ〜い、暑い！暑苦しい！」

「ああ〜、今夜も」

「……。何やってんだあいつら。もしかしてあっちの世界の住人なのか？」

まさかの展開に土は顔を引き攣らせ、その場から動く事も、彼女たちから目を逸らす事も出来ずにいた。いくら土でも今のはさすがに精神的ショックが大きかったようだ。

彼女たち、というかツインテールの少女が一方的に求愛行動をしている最中、土からすれば棒のようにしか見えない携帯に着信があったらしい。少しばかり面倒臭そうに少女が通話を始めた。

通話の内容まではさすがに聞き取れないし、聞き取れたとしても聞くつもりも無い土が再び花火へと意識を移しかけたその時、周囲一帯を強い衝撃が襲った。

「何だ!？」

まるで地震の様に大地が揺れ、ブロックで出来ている歩道が砕ける。ただ立っている事すら満足にできない。その衝撃は少女たちが居る場所の柱を破壊し、崩落の中に彼女たちを飲み込もうとする。

「危ねえ！」

「お姉さま！」

先程ツインテールの少女に抱きつかれていた短髪の少女がそれに飲み込まれかけた時、ツインテールの少女が彼女に手を伸ばして触れた瞬間、2人の姿はその場から完全に消失した。

「何!？クロックアップか?いや、そんな訳」

「佐天さんたちは!？」

土の目に、一瞬で階段の中腹辺りに移動した2人の少女の姿が飛び込んできた。それは余りに速く、クロックアップかと思ってしまうほどのスピードだった。しかし普通の人間にクロックアップなど出来る筈がない。

仮に彼女たちがワームだったとしても、脱皮していない状態のワームがそれを行う事は出来ない筈である。

『そういえば』と、土は思い出していた。彼女たちは最初、5人で花火を見ていた。それが今は2人しかない。他の3人は途中で階段を昇り、別の場所へと歩いて行っていた事を。それはついさっきの事だったので、この揺れの中でそう遠くへ行っただろうかと、彼女たちが歩いて行った方向へ視線をやると案の定、長い黒髪の少女は柵に撞ってしゃがみ込んでおり、後の二人の内短髪黒髪の少女がもう一人に覆いかぶさるようにしてしゃがみ込んでいた。

「初春ううう！」

<FORM RIDE・AGITO STORM>

2人の少女の傍に立っていた街灯が、衝撃で彼女たち目掛けて倒れ込んでいく。それを知っても初春と呼ばれた少女にはどうする事も出来ない。

「っ!?!?.....、？」

自分たちを襲うはずの衝撃と痛みが全く来ない事に疑問を浮かべる初春。恐る恐る目を開けて街灯の方を見た。すると、そこには何かよく分からない格好をした、まさに変な人という言葉がピッタリの人物（？）が街灯を片手で受け止めていた。

「大丈夫か？」

「え？あ、はい！・・・、あの」

初春の遠慮がちな問いかけに、街灯を静かに地面に置きながらDアギトが『何だ？』と答えた。それを聞いた初春は、尚も遠慮がちに問いかけた。Dアギトにとって、それはまさかの質問だった。

「あの、変態さん・・・、ですか？」

「・・・、は？」

予想の斜め上どころか普通ならば予想すらしない、いやむしろ予想出来ないレベルの質問が飛び出した。あまりに突拍子の無いその質問は、Dアギトをフリーズさせるには十分な威力を持っていた。そして土の心に、『きゅっしょにあたった　こうかはばつぐんだ』のメッセージが出てきそうなほどのダメージを与えた。

「・・・、そんな訳ねえだろ！大体助けてもらっていきなりそれかよ」

数秒間のフリーズから再起動に成功した士。さすがに『変態』はムカついたので、文句を返している。初春も命の恩人にいきなり『変態さんですか？』と聞いた事は、あまりにも失礼だったと今更ながらに後悔していた。

「す、すみません！頭の中がパニックになってしまつて・・・、それで・・・」

「初春！」

「初春さん大丈夫！？春上さんも！」

微妙な空気が漂うDアギトたちの元に先程の少女たちが駆け寄つて来た。3人そろって心配そうな表情を浮かべている。

「皆さん！はい、大丈夫です。この変々　　こ、この人が助けにくれましたから」

「初春と春上さんを助けに来てありがとうございます。あの、あなたは？」

「門矢だ。門矢士」

士が名乗りながら変身を解除すると、少女たちは一斉に驚きの声を上げた。何をそんなに驚く事があるのか分からない士だった。

「ア、アンチスキルの人だったんですか!？」

「アンチスキル？」

「ええ。まさか違うと仰るつもりですか?そのような格好をしますのに」

「ん？」

変態ツインテール(命名:士)の目線の先には、どう考えても自分が着ている特殊部隊モドキの服があった。どうやらこれはアンチスキルという部隊か何かの装備らしい。

「あ、ああ。そうだぞ」

「何でドモってんのよ。怪しいわね」

「そんなことねえよ。それよりお前ら、もう家に帰った方がいいんじゃないのか?地震が起きたみたいだしな」

「貴方知りませんか?今のは地震ではありませんわよ」

「地震じゃない?なら何だ？」

今のが地震ではない。という事は、何かの力が働いて起きたもの
のもしか考えられなかった。『また牛鬼みたいに何か出て来るのか？』
などと考えていた土だったが、その予想は大きく外れることになる。

「ホルターガイスト乱雑解放よ」

「ああん、お姉さま！わたくしのセリフを取らないでくださいまし」

「乱雑解放つてあの乱雑解放か？」

「どの乱雑解放か分かんないけど、あの乱雑解放よ」

変態ツインテール（クドイようだが命名：土）を見事に無視して短髪
の少女と話を進めていく。この時、短髪の少女が『こいつ（変態ツインテール）
を無視するなんて（やるわね）なんて思っていたらしい。

それはさておき、乱雑解放の話をしている土たちの間に、長い黒髪
の少女が申し訳なさそうに割り込んできた。

「あの……、お取り込み中申し訳ないんですけど、春上さんが」

「え？春上さんがどうかしたの　　って、え？」

「……、見事に気絶してるな」

春上という少女は、土に守られて外傷は一切無い筈である。だといふのに、見事に気絶していた。おそらく恐怖から意識を守るためにブラックアウトしたのだろうと、土はそれで納得した。とりあえず何処かに運んでやるかと、土が春上を背負った時背後から声が掛けられた。

「すみません」

全員がそちらを向くと、ライトブラウンの髪にメガネを掛けた大人のお姉さんが歩み寄って来ていた。彼女を見た変態ツインテールが真っ先に反応を示した。

「えっ黒子、知ってるの？」

短髪の少女は彼女の事を知らない様で、変態ツインテールもとい黒子に説明を求めていた。

土は今、夜道を1人の少女と共に歩いていた。夜道といっても今は先程までとは違い、街中を歩いているため非常に明るい。さっきの郊外のような景色がウソのように、物凄い都会だった。そして土の隣を歩くのは佐天涙子と名乗った長い黒髪の少女。

「すみません、わざわざ送ってもらって」

「気にするな。一応アンチスキルの仕事らしいからな」

「一応ですか・・・」

なぜこのような状況になっているのか。簡潔に説明するでしょう。

後から現れたメガネのお姉さんは、テレステイナー・木原・ライフラインと名乗った。テレステイナーによれば彼女は『先進状況救助隊・MAR (Multi Active Rescue)』の隊長及び付属研究所長らしく、共に現場に来ていた救急車で春上は一応病院へ搬送される事になった。彼女を心配した初春と佐天が同行を申し出、よく分からないがアンチスキルという立場になっている土はテレステイナーに彼女たちへの同行を頼まれた。

春上の検査結果は問題が無く、無事に家まで送り届けられた。そこで土は初春と春上がルームメイトという事を知り、1人だけ家が違う佐天を送ることとなったのであった。

2人きりになったということは、土にとって物凄いチャンスだった。変な意味では無く、色々情報を聞き出すという意味で。

「それより聞きたいんだけどな」

「なんですか？」

それにしても首を傾げる仕種を見せた佐天は可愛らしかった。しかし聞けば彼女は中学生だという。さすがに土もそんな子供に手を出すような趣味は持っていなかった。

「白井黒子……、だっけか？あいつが御坂と一緒に一瞬で場所を移動したんだ。あれは何か知ってるか？」

「ああ、白井さんはレベル4のテレポーターですから。それくらい朝飯前ですよ」

「テレポーター？」

「え？知らないんですか？能力者のこと」

「あ、ああ。俺はこの町に来たばかりだからな」

「じゃあ簡単に説明してあげますね」

『えっへん』と言わんばかりに腰に手を当て、佐天は自慢気に説

明を始めた。しかし佐天がすると可愛らしく見えるこの動作も、変態ツインテールもとい白井がやった場面を想像すると、土は無性に白井を張り倒したい衝動に駆られたのは別のお話。

「まずですね、能力者はその能力の強さによってレベル0からレベル5の中に分類されるんです。レベル0は」

簡単に説明すると言っていた佐天の説明は思いのほか長かった。なのでそれを土自身が佐天より簡潔にまとめたのが以下の通りだ。

白井のテレポートを含め、この学園都市と呼ばれる街には超能力と呼ばれる超常現象を引き起こす力を持つ人間が多数存在している。学園都市は脳を開発（薬物投与・催眠術・電気刺激など）することで、科学的に能力者を作り出しているとのこと。

何とかの猫で有名な量子力学を超能力が発現する理論としており、能力者は『自分だけの現実』パーソナルリアリティを観測することで可能性としては存在する本来はありえない現象を実現させる。

また、これには基本的に演算能力が不可欠であり、上位の能力者とは演算能力が高い（要するに頭が良い）と言う意味でもある。能力にはいくつもの種類があり、それは個々人によって決まり、理論上『能力は1人につき1つまで』となっている。その中には『発電能力』や『発火能力』のように発現しやすい能力と『空間移動』のように発現しにくい能力がある。何故、違いが出るかなどの研究も行われているが解明されていない。

能力はその威力や効果によってレベル0からレベル5までの6段

階に分けられている。これとは別に『神の領域』とも呼ばれ、『神ならぬ身にて天上の意思に辿り着くもの』も概念上存在する。全学生のうち約6割は『無能力者^{レベル0}』である。最高位のレベル5は7人しかおらず、さらに序列が存在する。ただしこの序列は能力研究から生まれる利益が基準であり、必ずしも強さを表すものではない。また、レベル2と3の間には大きな壁があるとされるらしい。

佐天と一緒に居た短髪の少女、御坂美琴は学園都市の頂点であるレベル5の第3位で、『超電磁砲^{レベルガン}』と呼ばれている。白井はレベル4の空間移動^{テレポート}、初春はレベル1で佐天が言うには『触れている物体の温度を一定に保つことが出来る』らしいが、特に活用するような場面无い能力らしい。

長々と説明され、土なりに纏めるのも一苦労だった。とにかく要約すれば、この学園都市の4割は大なり小なりの能力を持った人間がいる、ということだった。

「で、お前のレベルは何なんだ？」

「私は……、レベル0です」

「0か……。やっぱり能力は欲しいと思うものなのか？」

「思いましたよ。それに、今でもやっぱり欲しいと思います。でも、とある事件で能力なんかよりも大切なモノがあるって分かったんです」

「そうか」

「あ、私の家ここなんで。ありがとうございます」

「じゃあな」

長々と説明を受けている間に佐天の家についてしまったらしい。佐天は士にお礼を述べるとさっさと中に入っていった。彼女を送り届けた士は今日はホテルに泊まるか、と考えながらマシンドイケイダーが止めてある、最初に居た高台まで歩く羽目になってしまった。

ただ真つ暗な闇がある。上下左右前後を見回してもただ漆黒が支配しているだけの空間。いや、最早空間なのかすら分からない。とにかく黒一色しか存在していない。だが自分の身体だけは見る事が出来る。

それは人間のものではなく、よく見慣れたマゼンタを基調とした鎧の姿。通りすがりの仮面ライダー。『そうか、俺はディケイドなのか』と認識すると、急に周囲は明るくなった。その場所も見た事があった。

何処かの谷間のような、地面と岩と少しの木々があるだけの殺伐

とした場所だ。そしてそこには何人もの仮面ライダーが横たわっている。

「これは！？・・・、俺が破壊したのか。また・・・、破壊したのか」

デイケイドは自身に湧き上がる怒りを表すかのように拳を強く握りこんだ。少し離れていても握り込む音が聞こえてくるほどに強く握り込んでいる。仮面で表情は分からないが、おそらくは酷く歪んでいることだろう。

酷く怒り、嘆いているデイケイドだが、ふとある事に気が付いた。

「何故だ。何故また俺は　　っ、いや待て。こいつらは」

異変に気付いたデイケイドが彼らに近付こうとした瞬間、何かに意識が引つ張られていく。まるで空中に浮き上がるような感覚の後、意識は手放された。

「っ！？」

勢い良く目が開かれた。知らない部屋が視界に映り込む。

「ここは……。そうか、昨日はホテルに泊まったんだっただな」

ここにきて土はようやく昨日までの経緯を思い出した。現時刻を知るために時計を探して周囲を見回していると、音楽がなっている事に気付いた。音のする方へ歩み寄ると、アンチスキルの服の中にある携帯が鳴っていた。

「これが。よみがわ、あいほ……、か？まあいい、もしもし？」

「何やってるじゃん！授業始まってんだぞ！早く来るじゃん！」

携帯に出ると、いきなり怒鳴り声が土の耳を右から左に突き抜けた。突然のことでビックリした土は、反射的に携帯を遠ざけた。それでも煩いくらいに声が聞こえる。

「分かったからもっと声のボリュームを下げてください。で、何だっただ？」

「……。お前、今日からウチの学校に勤務する事になってたじゃん？もう1時限目の授業が始まってんだが、どういつつもりじゃん？」

「学校に勤務？何の事だ」

「何寝ぼけてんだ。いいから早く来るじゃん」

「ちよつと待て。場所も知らないんだぞ？行ける訳ないだろ」

「仕方ない奴だな。メールで送ってやるから早く来るじゃん。いいな？」

「・・・、分かったよ」

電話を終えた土は『また学校かよ』と、ため息交じりに着替え始めた。ちなみにだが、何故かアンチスキルの荷物の中にスーツが入っていた。が、『いつものことだろ』といった具合に、土は全く気にしていなかった。

そして黄泉川愛穂なる、語尾にやたら『じゃん』が多い人物からの電話のせいで、土は起きる直前に見ていた夢の事などすっかり忘れていた、

メールで届いた向かうべき場所の詳細情報を元に、マシンディケイダーを走らせる事約15分。何の変哲もない至極普通の高校に到着した。と思つたら、校門で待ち構えていた上下ジャージの、いかにも体育教師っぽい女性に掴り、そのまま職員室まで連行された。

「で？言い訳くらいは聞いてやるじゃん？」

その一言で、間違いないくこの教師がさっきの電話をしてきた人物だと確信に至った。何しろ『ありえない語尾！ありえない語尾！三男は普通』。いや、失礼。だが実際、これだけ語尾に『じゃん』が多いというのも珍しいだろう。それに声も酷似していることから、同一人物だと認識するには十分だった。

「言い訳も何も、知らなかったんだ」

「自分のことなのに知らないってどういうことじゃん？」

「知らないものは知らないとしか答えられないだろ」

「はあ……」

答える気が無いのか、本当に知らないのか、とにかくそんな土に黄泉川は呆れたようにため息をついた。

「追及はまた今度にしといてやるよ。それより次の授業の準備するじゃん？」

「仕方ねえな。科目は？」

「数学じゃん」

「へいへい」

とことん面倒くさそうに準備を始めた。現在の授業の終了を告げるチャイムが鳴った後、土は黄泉川に連れられて授業を行う教室へと向かった。

土は昼休み前の4時限目の授業が無く、物凄い空腹感に襲われたので一足早い昼食を取るべく学食へと来ていた。考えてみれば朝から何も食べていない。どうりで空腹な訳だ、と1人納得していた。

「ん？」

さて、土が学食の食券販売機の前に来ると、白い修道服を着た少女が何やら唸っている。その少女は服装からしてどう考えてもこの学校の生徒ではないが、正直どうでもいい土。そんな事より空腹を満たすために食券を買いたい。が、この少女が販売機の前に居るの

で買えない。仕方ないので声を掛ける事にした。

「どうした？」

「え？あ、あのね、この機械の使い方がよく分からないんだよ」

「金入れてボタン押すだけだろ？」

「それがよく分かんないんだよ」

「仕方ねえな。どれが欲しいんだ？」

「えつとね、えつとね。これ！」

数分後、テーブルに着く土の前にはラーメンとカレーを美味しそうに頬張る少女の姿があった。体格に見合わぬ食欲に、土は感心を乗り越して呆れていた。

「それにしてもお前、よく食べるな」

「そうかな？普通なんだよ」

昼休みを告げるチャイムが鳴るころ、土の食事が終わりに近づいていた。そして少女の前にあったラーメンとカレーは綺麗さっぱり平らげられていた。食べる量だけでなく、スピードも速い事に最早言葉が出なかった。

「……。そういえばお前、名前は？」

「あ、私はねインデックスっていうんだよ」

「変わった名前だな」

「貴方は？」

「俺は」

「インデックス！」

「あ、とうま！」

インデックスの名前を叫んだ少年が、ズンズンとこちらに近付いて来る。その表情にはかなり焦りが含まれていた。

「お前そのご飯はどうしたんだ！？お金なんか持ってないだろ」

「それはね、この人……、えつと？」

「士だ」

「つかさが奢ってくれたんだよ」

「ちよっ……、す、すみません門矢先生。お代は俺が」

「気にするな。俺が勝手にやったことだ」

「でもですね」

「いって」

この少年、2時限目に土が受け持ったクラスの授業の時にいた少年だ。名前は上条だった気がする、と土。

上条少年がとことん申し訳なさそうにしている。2人のやり取りからも、普段の力関係はいとも容易く把握できた。そして土は上条家の食費はきつと大変なんだろうな、などと思っていた。

「それじゃ失礼します、門矢先生。ほら行くぞ、インデックス」

「あ、ちよつととつま！つかさ、ご飯ありがとうなんだよ」

上条少年に腕を引っ張られて連行されていく様は、見ている人によつてはまるで誘拐されている少女の様にも見えた。それを見て、今度は『あいつ掴むかもな』と思わざるを得なかった。

全ての授業が終了し、教師たちの勤務時間も終わった。ようやく終わったと、土は伸びをすると立ちあがった。することも無いので帰ろうとする土を黄泉川が呼びとめた。

「門矢」

「ん、何だ？また説教か？」

「違つて。飲みに行かないかと思つてさ」

「……ま、たまにはいいか」

「よし決まりじゃん。小萌先生と鉄装も呼んであるし、4人でパ一つといくとするじゃん」

「小萌先生つてのはあの子供先生だろ？鉄装つていうのは？」

「現地で紹介してやるよ。さっ、行くじゃん」

黄泉川はさつさと職員室から出て行ってしまった。テンション高めで出ていった彼女を、土はやれやれと言った感じで追うのだった。

前書きの続き

正直今回は、しょうもない話を足して足して、後半へつなぎました。やりたいのは次回の戦闘なんだ!!

というわけで、今回は・・・。

しかし次回の戦闘は頑張りますので乞うご期待!

とあるシリーズは好きですが、そこまで詳しい訳でもないのをおかしい点があったら指摘お願いします。

次回、仮面ライダーディケイド

「KAMEN RIDE 06 GOD SPEED LOVE

」

お楽しみに!

おませしました。

文字数が・・・。

10月18日1:10頃

冒頭のこれまでのくを忘れていたのを加筆しました。

10月19日2:00頃

誤字脱字修正。微妙に加筆しました。

11月5日 21:30頃

次の世界に行った後の士の服装を変更しました。

これまでの仮面ライダーディケイドは。

新たな世界にやって来た士。そこでは乱雑解放と呼ばれる怪奇な現象が起こっていた。この世界での役目はどうやら教師らしかったが、同時にアンチスキルという組織(?)のメンバーでもあるらしいかった。

「飲みに行かないかと思ってさ」

「ま、たまにはいいか」

軽いノリでOKを出した士だったが、その飲み会・・・、タダで済むはずが無かった。

果たしてそれを乗り越え、乱雑解放の件についても解決すること出来るのか。通りすがりの仮面ライダー、ディケイド。その瞳に何を視る。

その日の深夜、布団の中にいる士は後悔していた。豆球が照らす薄暗い部屋の中、左を見れば小さな本棚やテレビが見える。右を見ればシングルサイズのベッドが見える。それだけなら全く問題が無かった。

問題はこの家が士の家ではないということだ。それはつまり士以外の他人の家ということになり、この家の家主は既にベッドでぐっ

すり眠りについていた。

その家主というのは、彩度の低い緑色をしたセミロングの髪的女性である。そう、女性なのだ。しかも士とこの女性はいくつかの回数に出会っただけなのである。

つまり士が後悔しているというのは『どうしてこうなった』という事に他ならない。

数時間前

授業を終えた士は同僚である黄泉川愛穂に飲み会に誘われた。別段することも無かった士は『まあいいか』と軽いノリでOKしたのだが、それが数時間後に大きな後悔に繋がることになるとは、思いもしていなかった。

士と黄泉川、それに途中から合流した子供先生こと月詠小萌がやって来たのは高架下にある、昭和を思わせるような屋台だった。

そこには既に先客が居た。彩度の低い緑色をしてメガネを掛けた、先客である女性はどうやら士たちに気づいていないようで、1人俯き気味に座っている。

「おーい鉄装！」

「あ、黄泉川先生、小萌先生。・・・、ええつと、そちらの方は？」

「門矢士だ」

「今日から臨時の講師としてウチの学校に来た奴だ」

「そうなんですか。あ、私鉄装綴里てつそうづりといます。よろしくお願いします」

「ああ」

そして彼女たちは屋台のおっさんから見て、右から小萌、鉄装、

黄泉川、土の順で座った。挨拶もそこそこに、各自が食べたい物や飲みたい物を注文する。飲み物とはいっても、土以外は皆酒しか注文していない。別段酒が好きな訳でもない土は1人ウーロン茶を頼んでいた。

「おじさん、砂肝です！」

「はいよ」

「ぶはあ！」

小萌が砂肝をおっさんに頼んでいる間に、黄泉川は早くも一杯目の酒を飲み干してしまった。まるで水の如く酒を飲む黄泉川を見た土は、この時点で既に若干ながら嫌な予感がしていた。

「相つ変わらず良い飲みっぷりですねえ」

そう言いながら小萌は一升瓶にまだたっぷり入っている酒を黄泉川のコップに注ぎ足した。そして、それは瞬く間に黄泉川の胃の中へと流し込まれた。

黄泉川は空になったコップを叩きつける程強くは無いが、少々強めにテーブルに置いた。

「鉄装綴里！」

「は、はいっ!？」

チビチビ酒を飲んでいた鉄装だったが、突然フルネームで呼ばれたことに驚いた彼女は若干焦っていた。その横では小萌がまた何やら注文していた。

「いいか！お前の弱点はその弱気の虫だ！胸張っていけ！」

「は、はあ……」

「ガツツーンとかますじゃん！ガツンと！」
「ゲツホゲホゲホ！」

鉄装が再び酒に口を付けた時、黄泉川がガツンと彼女の背中に平手打ちを喰らわせた。飲んでいる時にそんな事をされてしまった鉄装は、案の定咽てゲホゲホしていた。

『今のタイミングは可哀想だろ』土はそんな事を思っていたが、酒が入った黄泉川には絡まれたくないらしく、ただひたすら黙っていた。

咽てコップを口から離すと、そこには残り少なくなっていたがまだ酒は入っていた。だというのに小萌はそこに酒を注ぎ足した。本人に欲しいかどうかの確認も取らずに。

「そうですね、ガツンガツンですよ」

「ああっ！？私はもう　　うわああっ！？」

「おじさん、レバテキです」

「はいよ」

勢い良く瓶から飛び出した酒はその勢いを止めることなど知らず、鉄装のコップを目いっぱい満たしていく。いや、それどころか許容量を超えてしまい、溢れかえってしまったではないか。鉄装は慌てて口を付け、少し容量を減らした。

溢れさせてしまった当の本人である小萌といえば、そんなこと知らないとはかりに既に自分の注文を行っていた。

「なあアンタ。何か悩みでもあるのか？」

「え？」

それまでほとんど喋ることの無かった土だったが、ここに来てから鉄装の表情が沈んだままであることが少し気になっていた。

士からすればほとんど関わりの無い他人の悩みの相談など『カテゴリー：面倒臭い事』の代表格であるし、別に聞いてやる義務も無かった訳だ。しかしどうやら自分という人間は、その『面倒臭い事』に面倒臭いと思いつながらにも自ら巻き込まれに行ってしまう性質たちのかと、改めて感じていた。

面倒臭いなら悩みを聞かなければいいのだろうが、それが出来るのであれば今こんなことにはなっていない。彼が心の底では他人を思いやれる優しい人間だからこそ、こういうことになっているのだ。

「あるなら聞いてやらんでもないぞ」

「・・・、別に悩みなんて」

「じゃあなんであんなへまばかりするじゃん？」

「へま？何かやったのか？」

士には鉄装がへまをするようには見えない・・・、訳でもなく、むしろへまをしそうな感じに見えていた。しかし、どんなへまをしてしまったかまでは分からない。

士の鉄装に対して感じた印象というのは、真面目で控えめ、そして気弱な人物というものだった。故に彼女は小さな事で悩んでいるのでは無いだろうかと思った。だからもしくだらない事を言ったらデコピンでもしてやろうかと考えていた。

「アンチスキルの仕事で色々と・・・」

「アンチスキル？お前ら教師だろ。どうしてアンチスキルと関係あるんだ？」

「はあ？門矢、お前何言ってるんだ。アンチスキルってのは教師が志願してなるもんじゃん」

「じゃあアンタもか？」

「当然じゃん。子供たちを守るためには必要な事じゃん？」

「そうだったのか」

ここにきてようやく士は、アンチスキルとは教師たちによる学園都市の治安維持機関だということを知った。しかもその後、それは完全なボランティアで給料も出ないということも言われていた。

「そつだ鉄装、お前趣味はあるか？」

「え？」

「いや、趣味じゃなくてもいい。たまには何か好きなことをやってみるじゃん」

「夏は女を狩人に変えるんです」

「気晴らしじゃん。何でもいい、羽目を外してパーツときさ！」

「パーツと・・・」

(お前らは羽目外し過ぎだけどな)

鉄装が羽目を外すのは気分転換になつて確かに良いかもしれない。だが一方で士の目には、黄泉川と小萌が彼女たちの言うハメを外すどころか、外し過ぎているようにしか映っていなかった。

「そうですね。はい」

「よし」

「おじさん、メンダーです！」

「はいよ」

最早定番の『はいよ』と共に出されたのは謎の料理。それは何とも不気味で、どう見ても虫にしか見えない。しかも色が黒いものだから、大抵の人間はそれをGだと思ってしまうだろう。Gでは分からない人のためにあえて分かりやすい表現をしよう。Gとは『キブリ』の頭文字だ。

「おい！ダイレクト過ぎるだろ！」

「ん？何言ってるんだ？」

「い、いや。何でもねえ。ただ突っ込まなきゃいけねえ気がしただけだ」

「変な奴じゃん」

士が何に対してツッコんだのかは置いておくとして、小萌が頼んで出て来た料理は誰が見ても虫、というかゴブリに見える・・・、のだが実際はそうではない。

いや、虫であることは正解だ。その虫の正体がゴキリではなくタガメという半翅目タガメ科の昆虫であるということなだけである。体長は6cm程で水田や沼に棲んでおり、鎌状の前脚で他の昆虫や魚・カエルなどを捕らえて体液を吸って生きている。かっぱむし、こつやひじり、どんがめ、などと呼ばれることも。

だが士がいくら天才だとしても、流石にそんなことまで知らない。知っている筈が無い。いくらなんでもゴキブリなんか食べる筈は無いだろうからと、無理矢理に納得する士だったが、気持ち悪すぎてこれ以降何も食えることが出来なかった。

それから約2時間に渡って彼女たちは飲み続けた。というこの表現は、どうにも適切ではない。適切に表現するならば、約2時間に渡って黄泉川と小萌は飲み続けた、だ。しかも黄泉川に至っては酔い潰れて眠ってしまった。

ここまで飲んでまだ飲み会を続けるというのもどうかという士の発言で、ようやくある意味異常な飲み会は終わりを告げた。

ここまででは良かったのだが、酔い潰れた黄泉川を家までおぶって送らされる羽目になってしまった。タクシー使えよと提案してみたものの、お金がもつたいないと小萌が即却下したのだった。

しばらく後

土と鉄装は無事に黄泉川を送り届けた。鉄装がいるのは話相手を兼ねて道案内をしていたからだ。送った後は当然帰る流れになるのだが、その時に土が漏らしてしまった。今日はどこに泊まるか……』という言葉を鉄装は聞き逃さなかった。

「自宅へ帰るんじゃないんですか？」

「ん？ああ、そんなのは無い。いや、無いことも無いが、遠い場所にあるんだ」

「ここから離れてるんですか？」

「ああ、滅茶苦茶離れてる」

「うーん……、だったら今日は私の家に泊まりませんか？」

「は？」

「こんな遅くまで付き合わせてしまったお詫びに」

鉄装はお詫びだと言うが、別に彼女が土を付き合い合わせた訳ではない。むしろ今さっき自宅への配送が終わった『じゃん子』が引つ張っていたのだから。

「別にお前が付き合い合わせた訳じゃないだろ」

「で、でもホテルとかに泊まるのはお金がもつたいないですから」

「別に俺の金だからいいだろ」

「じゃあ悩みを聞こうとしてくれたお礼ってことで」

ここでも疑問が残る。確かに悩み事に関しての話を持ち出したのは土だったが、果たしてあれはお礼を言われるくらいの事だろうか。結局あの時は黄泉川と小萌が横から入ってきたせいでろくに解決した気がしない。

結局何を言っても食い下がる鉄装にとうとう土が折れた。ため息を吐きながら鉄装の後を歩く土の姿があった。

そして現在

真夜中の真つ暗な部屋の中、土は目を覚ました。というのも土は床に布団を引いて眠っている訳だが、どうにも何か変な感覚がする。右側で何か MOZOMOZO 動いているかと思えばそれが上にあがって来るのではないか。

「……、何だ？」

枕元に置いてあった携帯電話の画面を開き、その明りで右側を照らすとそこには。

「うう〜ん」

鉄装が居た。しかもなんだかやたらと幸せそうな表情をしている。『なんだ、こんな顔も出来るじゃねえか』と、最初はそんな事を思っていたがすぐにそんな場合ではないと思いつ返した。

「どうすんだこれ」

シングルサイズの布団なのに2人で入っているのだから、当然狭くて仕方が無かった。解決方法を考えた土が最初に思いついたのは『自分が鉄装のベッドで寝る』だった。

しかし仮にも女性の、しかも今日知り合ったばかりである相手のベッドで寝るといふのはどうかと思い、それは即座に却下することになった。

次いで思いついたのは鉄装をベッドに移動させる、だった。しか

しよく考えれば途中で彼女が起きた場合、とんでも無い事になる可能性がある。

それは一番避けたいと思った士は、結局現状維持を選んだ。朝鉄装が起きてこの状態を理解しても、間違えて入ってきた彼女が悪いだろう、と考えた結論だった。

そしてそう決めた士はただひたすらに後悔していた。どうしてあの時にあんな馬鹿な提案を受けてしまったのだろうか、余りに自分が腹立たしくて眠れない夜だった。

鉄装はこの上ない程とまでは言えなくとも美人の部類　いや、可愛い部類に入ることには間違いないだろう。そんな彼女が無防備にも隣で眠っているというのに、全く気にしていない辺り流石は士だとだけ言っておこう。

数日後

アンチスキルの支部とでも言うべき場所に士は居た。既に夏休みに入っており、午前中は学校で書類仕事、午後からはアンチスキルの仕事をさせられていた。特に書類仕事に関してはサボろうかと思っていたのだが、士が宿泊しているホテルに乗りこんできた黄泉川が引き摺って連れて行ったのだった。

面倒なのであればさっさと次の世界に行けばいいだけの話なのだ

が、どうにも先日発生した乱雑解放の件に引っかけりを覚えており、次の世界に行く気にはなれなかった。

それでだ、黄泉川も乱雑解放の件に関して色々調べることがあるのか、鉄装に資料を集めるよう頼んでいた。

「んっ！」

つい先ほど掛かって来た電話に対応していた黄泉川が腹立たしそうに受話器を置いた。そこへ段ボールいっぱい資料を集め終わった鉄装がやって来た。

「よいしょっと。乱雑解放関連の資料、集め終わりました」

「それ全部捨ててくれ」

「へ！？」

「今MARから連絡があつて、乱雑開放の件はもういいって」

「そんなあ〜」

せつかく苦勞して集めた資料が、たったの1ページすら いや、たったの1文字にすら目を通されることなく無意味な物と化し、シヨックのあまり鉄装は涙目になって頂垂れている。

しかし急に解決したというのもおかしな話ではある。あれだけ頻繁に発生しており、ろくに対策もとれなかったような乱雑解放が今日になって『もう終わりました』となれば、誰だって疑問に思うことがある。それは平凡な一般人代表のような存在である鉄装がしてくれる。

「頑張ったのに。何ですか？」

「知らん。終わったからとしか言わないんだよ」

「それっておかしくないですか？」

「……………」

鉄装の投げ掛けは至極当然のものだ。終わった理由を聞いているのに、その理由が『もう終わったから』というのは理由になっただいがない。もちろん黄泉川もそれは分かっている。だからこそ難しい顔をして考え込んでいるのだ。

「鉄装、ちよつといいか？」

「あ、はい。何でしょうか門矢先生」

「それ見せてもらっていいか？」

「ええ、それは構いませんけど。どうしたんですか？」

「乱雑解放の件については詳しく知らなくてな。それにMARRってのはなんかきな臭い。その隊長の木原って奴はもつとな」

「門矢、どこがきな臭いと思うんだ？」

「それが分かんねえから資料を見るって言ってるんだ」

『それもそうか』と納得する黄泉川をよそに、土はすでに資料に見入っている。黄泉川は土から言葉では上手く説明できないものを感じ取った。そんな得体の知れないものだというのに、何故か黄泉川はそれに賭けてみようと思った。

そう決めればすぐさま行動に移す。鉄装が集めた資料が詰まっているファイルの1つを手に取ると、ペラペラとページを捲って何か手掛かりになる様なものはないかと探していく。

それを見ていた鉄装が『門矢先生のお陰で無駄にならずに済んだ』と喜んでいると、黄泉川に『何やってんだ鉄装！お前も早く資料に目を通すじゃん』と、怒られていたとか。

およそ1時間後

士は目を通していた資料を閉じると、ダンボールの中に投げ入れた。1時間ずっと座っていて疲れたのか、身体を伸ばしながら立ちあがった。

士がそんな事をしている時、黄泉川は少し前に連絡を入れて来た相手とモニター越しに、喧嘩腰の様な対応をしていた。

『ですから、テレスティーナ・木原が違法な行為をしているのは最早明らかなんですの!』

「奴の組織が怪しいのはこっちも分かってたんだよ。今色々調べてるから」

『そんな悠長に構えてる時間はありませんの!どうにかして下さいな!』

「そう簡単に動けねえんだよ!ウチらにも限界ってもんがあるじゃん」

『さつきからうるさい奴らだ』と思いつつ、誰と話しているのか気になった士はモニターを視界の端に捉えた。するとそこには、いつの日だったかに出会った白井黒子へんたいが映っていた。

突然、その変態　もとい、白井の隣にこれまたいつの日だったかに出会った長い黒髪の少女　佐天涙子が映り込んできた。

『限界を超える事に意味があるんじゃないんですか!』

「お前、講習の時の!?!」

『もう無理だつて諦めたらそこで終わりだつて言ってたじゃないですか!このままじゃ子供たちが危険なんですよ!』

その言葉は黄泉川の心に強く響いた。それは今までずっと自分が生徒に言ってきたことなのに、いつの間にか自分が限界を決めていた。佐天が言っている事は正論だけに黄泉川が反論するなど出来はしなかった。

「・・・・・・・・」

そして、同じくそれを聞いた士はライダー大戦の世界でひたすらにライダーを破壊していた時の事を思い出していった。

あの時、自分がライダーを破壊し続けていたのは世界を救うことを諦めていなかったから。そしてここにも、モニター越しではあるが全く諦めようとしていない少女がいるではないか。佐天の言葉は士を動かすだけの力を十二分に持っていた。

「お前の言う通りだ」

「へ?」

突然聞こえて来た男性の声に、白井も佐天も素っ頓狂な声を上げてしまった。しかし何処かで聞いたことのあるような、でもやっぱり無いような気がしていた。必死に今の声に該当する人物が居ないか脳内検索を掛けていると、その人物は黄泉川を横に追いやってモニターに現れた。

「あ、あなたは」

「門矢さん!」

「よう佐天。それに変わった

黒井白子」

「白井黒子ですわ!」

「分かってる、冗談だ」

「こんな時に冗談なんてお止めになって下さいまし!」

切羽詰まっていた空気は士の一言で吹き飛んでしまった。しかしそのおかげなのか、一同の心には若干の余裕が生まれていた。

「佐天、お前の言う通り諦めたらそこで終わりだ。だから俺は諦め

てないぜ」

『門矢さん……』

「ちよつと代わってくれ。……、わかった。だが少し時間をくれ。何とかしてみるじゃん」

『はい!』

そこでモニターの映像は途切れた。にも拘らず座ったままの黄泉川に、事の成り行きをじつと見守っていた鉄装が声を掛けた。

「あの黄泉川先生。これからどうするんですか？」

「……。何とかするって言っちゃまったからには、出来る限りの事をするしかないじゃん？」

「は……、はい!」

「鉄装、ちゃんと準備しとけよ。ウチは何が何でも許可を取り付けて来る」

黄泉川は何処かへ電話を掛け始め、鉄装は装備などの準備に取りかかっている。現在、土は一応アンチスキルのメンバーという事になっっている。

何時もなら勝手な行動をしても問題はなかったりするが、今回はかりは勝手な行動で黄泉川や鉄装に迷惑を掛ける訳にもいかないの、大人しく許可が出るまでマシンディケイダーの傍で待機してしようとして外に出た。

無論、暫くしても許可が取れないようであれば勝手に行ってしまうおうと思っているのは言うまでも無いことである。

ハイウェイでは既に戦闘が始まっていた。前方を駆けるのは青のランボルギーニ・ガヤルド。運転しているのは木山春生。助手席には佐天が座り、その膝の上に何故か初春が座っている。さらに屋根には『超電磁砲』こと御坂美琴が乗っている。

木山がどういった人物なのかはここでは詳しく語らないが、『置イルドエラき去り』と呼ばれている子供たちを助けるためにここに居るとだけ言っておこう。

そしてそれを後方から追うのは、イエローのカラーリングが施された巨大な作業用のロボットのようにも見える駆動鎧。中には操縦者であり、この事件の黒幕であるテレスティーナ・木原・ライフラインが居る。

「電撃が弾かれる!？」

「あーっはっはっはっは。そんなもん効くと思ってるのかあ？」

何と驚いたことに、テレスティーナが操る駆動鎧は超能力者である御坂の電撃をいとも容易く受け流した。

そして盾のように折り畳まれていたアームを広げると、車へと接近してくる。

「だったら」

「ふっ」

御坂の代名詞にもなっている『超電磁砲』。それを使用するためにスカートポケットからコインを取り出すと、コイントスの如く

親指で空中へと弾き飛ばす。

それを視認したテレステイナは駆動鎧の中で不敵な笑みに顔を歪めた。

「これで！　っ！？」

超電磁砲を発射する寸前、駆動鎧は急にスピードを落として御坂との間に50m強の距離を作った。するとどうだろうか。超電磁砲が50m程進んだところで消滅してしまったではないか。

「分かってんだよ」

「そんな！？」

「テムエの超電磁砲の射程が50mしかねえっつーのも含めて、テムエの能力は丸つとバンクに晒されてんだからなっ！」

「はっ！？」

駆動鎧の右腕が御坂に向けられ、先端のペンチのようになっている部分がロケットのように発射された。突然の攻撃に反応が遅れた御坂だったが、木山の巧みな運転で左へとかわした。

「ちっ、外したか。まあいい」

一度発射したパーツを回収する機能は搭載されていないのか、テレステイナは迷わず右腕をパージした。

「グリーンマール、そっち行つたぞ。潰せ。　ん、ああ？」

『こちらグリーンマール。アンチ　うあああ』

「ちっ、役立たずのゴミ共が！だったら自分でやってやらあ！」

パージした右腕に代わり、背面に折り畳まれていたパーツがスラ

イドして新たに右腕となった。テレスティーナは引き続いて御坂たちを追うのだった。

車中では目的地である第23学区内の研究施設を目指して初春がナビゲートを行っていた。

「次の分岐も左に！ え、通信？」

「こつから先は一步も通さないんだから〜！ん〜！」

「そうだ、こつから先のランプはこつちでなんとか抑えた。悪いが上から圧力が掛かってウチらはこれが精一杯じゃん」

「どうしてアンチスキルが」

「いいから、とつと子供たちの所に行くじゃん！」

「ありがとうございます！」

「礼はいい。ウチらはやるべき事をやってるだけじゃん。ああそれから、アンチスキルが出来るのはここまでだが、アンチスキルじゃない強力な助っ人がそっちに向かったじゃん」

「え？」

アンチスキルじゃない強力な助っ人と言われて思いつく人物が居ない。佐天も初春も、そして木山も一瞬だけ「まさか超能力者が？」とも考えたが、そんなことはまずないだろう。だとすれば一体誰な

のか。全く想像がつかなかった。

そんな通信が入っている事は知らない御坂は、再び迫って来るテレスティーナをどうすれば退けられるか考えていたが、言い案は思い浮かばなかった。しかし転機は突然に訪れた。

「ん？何だデメエは！」

「え？」

テレスティーナがいきなり訳の分からない事を言い出した。ここには自分たち以外誰も居ない筈なのに、新たに誰かが現れたようは発言をしたのだ。

辺りを見回す御坂に、右上の方から声が聞こえた。

「おい！」

「え・・・、えええええ！？」

「ど、どうしたんですか御坂さん！」

「み、右！右見て！」

突然御坂が屋根の上で叫び声をあげるものだから、驚いた佐天は反射的に御坂に問いかけた。佐天を始め、初春も木山もが返答に対して素直に従う。そして御坂同様、初春と佐天は驚きの声を上げた。木山も声にこそ出していないが、度肝を抜かれたような顔をしていた。

彼女たちの目に映ったのは、夕方になりつつある空の色を反射して僅かにオレンジ色を含む銀色をした大型のバイクだった。それだけなら別段驚くようなことでも無いのだが、何とそのバイクはバイクなのに滑空しているのだ。

「間に合ったみたいだな」

「そ、その声！アンチスキルの！」

「門矢さん！」

「もうアンチスキルは辞めたけどな。それよりここは俺に任せて行け」

「・・・、誰かは知らないがすまない」

木山はより一層速度を上げて目的地へと爆走する。

バイク ジェットスライガーに乗っているデイケイドは現在の進行方向に対して車体を垂直に向け、ジェットスライガーを水平方向へ走らせながらテレステイナーの前を塞いだ。

「悪いがあいつらの邪魔はさせねえぜ」

「邪魔すんならテメエからペシャンコにしてやんよ！」

テレステイナーが今度は左アームの先端を射出し、ジェットスライガーの前方部分を狙う。デイケイドはジェットスライガーを本来バイクが走るように前方に向けてそれをかわした。

そして上昇しながらスピードを落とし、テレステイナーの後ろを取った。

「お前みたいなのはさっさと倒すに限る」

デイケイドがモニターを操作するとジェットスライガーの前方が開き、16発のミサイルが装填される。モニターには駆動鎧をロックオンしている様子が表示されており、右側にある紅いパネルにタッチすると全てのミサイルが射出された。

「テメエエエエエエ！」

ミサイルは駆動鎧やその周囲に着弾し、テレステイナーを中心に爆煙が立ち昇っている。

「ま、死んじやいねえだろ。あいつが乗ってる部分は避けてやったしな」

爆煙が立ち昇っている中でテレステイナを探すのは手間が掛かると思った土は『先に黄泉川たちを助けてやるか』と、ライドブツカーから一枚のカードを取り出した。

< ATTACK RIDE・HARD TABULAR >

カードの効果が発動するとジェットスライガーは前方が黒、後方が紅いウイングが付いたバイクへと変貌する。

デイケイドがアクセルを吹かすと空中に浮かび上がり、そのまま飛び去ってしまった。

第23学区内 とある研究施設

「助かりましたわ」
「てへっ」

その後、無事に辿り着いた御坂たち。しかし、脅威は彼女たちに

迫っていた。ディケイドが駆動鎧を破壊して飛び去った少し後、大破した駆動鎧からテレスティーナは出て来た。多少の怪我はしているがピンピンしたまま。

そしてここまで追いかけて来て、あらかじめ用意してあったキャパシテイダウンを使用して御坂たちを追い詰めた。しかし佐天が無能力者だということを知らなかったがために、彼女にキャパシテイダウンを制御していたコンピュータを破壊されてしまった。

復活した御坂と対峙して超電磁砲の撃ち合いになるも、御坂の最大出力の超電磁砲には叶わなかった。敗れたテレスティーナは壁にめり込むようにもたれ掛かっている。

テレスティーナから『置き去り』を救うために必要な『ファーストサンプル』を入手した木山は、キーボードを忙しく叩いている。

「これで」

「プログラムは完成だ。あとは」

エンターキーを押せばプログラムが流れ、きっと子供たちは目を覚ます。木山の指がエンターキーに近付いてく様子を御坂たちは暖かい眼差しで見守っている。そしてとうとうエンターキーに彼女の指が触れようかという時だった。

「ああっ!?!」

「っ! 佐天さん!」

「どうしたの黒子!?!」

御坂、初春、春上、そして木山が居る場所から階段を上った場所、つまり先程まで戦闘が行われていた場所に白井と佐天はいた。

佐天の苦しそうな声が聞こえたかと思えば、白井の叫び声が辺りに響き渡る。何事かと御坂が階段を駆け上がった。

「アンタっ!?!」
「モルモットの分際でもよくもやってくれたな。マジでぶっ殺してやんよ」

御坂の信じ難い光景が映っていた。つい今し方、最大出力の超電磁砲を受けて倒れたはずのテレステーナが、佐天の胸倉を掴んで持ち上げていた。

「佐天さんを離しなさい!」

「ああ、離してやんよっ!」

「うぐっ!?!」

テレステーナはまるでゴミを捨てるかのように佐天を投げ捨てる。この中で一番ぶっ殺したいと思っているのが御坂なのか、テレステーナは彼女に向き直った。

「どうやらもう一発欲しいみたいね」

「やれるもんならやってみやがれ。キャストオフ!」

<CAST OFF>

低い電子音が発せられると、ボコボコになっている紫色の鎧が細かく分割されて浮き上がり、そのまま四方八方に飛び散った。

御坂も白井も反射的に腕で頭部を覆った。しかし幸いなことに、彼女たちには1片も当たらなかった。

「一体なんですか!?!」

「まだ何か隠してたって訳ね」

「テメエらもう終わりだ。ここまでさせちまったんだからな。まあここまでさせなくても元から終わりだけだな。あっはっはっはっはっはっは!」

テレステイナが下品な笑い声を上げている。その表情は以前、表向きに見せていた優しそうな表情とは似ても似つかない程、最早別人の様な顔になっている。こういうのを顔芸というのだろうか。それはさておき、いい加減に御坂も苛立っているのか不機嫌さを隠そうとはしない。

「このっ！」

「っはっはっは。クロックアップ」

< CLOCK UP >

「あぐっ!？」

< CLOCK OVER >

御坂がコインを取り出すためにポケットに手を突っ込もうとした次の瞬間、御坂は先程の佐天同様胸倉を掴まれて持ち上げられていた。

「お姉さま！」

「御坂さん！」

「いつの、間に」

「いいこと教えてやるよ。クロックアップはな、計測不可能な程のスピードで移動出来んだよ。当然人間の眼になんか見えやしねえ」

「なっ・・・」

「そ、そんな・・・。じゃあどうやって。そ、そうだ！白井さんのレポートなら何とかなるんじゃない！」

「やってみなっ！」

「う” あっ!？」

声を張り上げるのと同時に、テレステイナは御坂をその場に叩きつけた。御坂にそんな事をすれば当然白井はマジギレしてしまう。

「よくもお姉さまを！許しませんわ！」

白井の十八番である鉄矢のテレポートを行って、それを6本はテレスティーナの体内へとテレポートさせたはずだった。

しかし直後に、鉄矢が床に落ちる音が聞こえテレスティーナの姿はどこにもなかった。

<CLOCK OVER>

「う”ぐうっ!?”」

それに驚く間もなく白井の目の前にテレスティーナが現れ、膝蹴りが腹部に突き刺さる。吹き飛ばされた白井は壁に激突して止まった。ダメージが高いのである。意識はあるようだがまともに立ち上がることさえ出来ずにいた。

「ゲホッ！ゲホッ！」

「白井さん！そ、そんな……。こんなのアリ？」

「佐天、さん。逃げ、て」

「御坂……、さん」

「テメエか。キャパシティダウンをぶっ壊してくれやがったのは」「ひっ!?”」

御坂や白井ですら手も足も出ない相手に、無能力者の自分が敵う筈など無いと佐天は理解している。だから怖いし、手足も震える。立ち上がれない。そうしている間にもテレスティーナは1歩、また1歩と近付いて来る。

「佐天さんには指一本触れさせません！」

「ああん？」

佐天に近づくテレスティーナの前に、初春が立ちふさがった。手足は恐怖で震えている。それは階段を上ったところに居る木山からでもはつきりと分かるほどだった。

「止める！」

「うるせえんだよ」

「う、初春。だ、駄目だよ初春！あんな奴に敵う訳ない！」

「佐天さんは私の親友です！だから私が！」

「ぬつりい友情ゴツコか？モルモットにはお似合いだな」

「ゴツコなんかじゃありません！」

「ああ、もういい。さっさとくたばっちまいやがれ！」

テレスティーナの固く握られた拳が初春に迫る。ただのパンチに過ぎない故に、余程悪いところを殴られなければ1発で死ぬ事は無いだろう。しかし何度も殴ればたかがパンチでも十分に殺す事が出来ることくらい誰にだって分かる。

「初春！」

「っ、何だ！？」

「え？」

テレスティーナの拳が初春に届く前に、何かが腕に命中して弾き飛ばした。その何かが当たった場所から逆算して飛んできた方向へと顔を向けた。

「先に引き渡しておくべきだったな。悪い、俺の責任だ」

「門矢、さん」

「大丈夫か？佐天、初春」

「は、はひ・・・」

「う、初春！」

デイケイドが現れたことで恐怖から解放されたのか、初春はその場にへたり込んでしまった。同様に恐怖から解放された佐天は初春へと駆け寄った。

「後は俺に任せときな」

「で、でもソイツ！物凄く早くて！」

「あゝそうだ。テメエにも借りは返さねえとな」

<CLOCK UP>

「何!？」

全員の視界からテレステイナが消えた直後、デイケイドが1人勝手にあちらこちらに吹き飛ばされている。

「ぐあつ!？」

<CLOCK OVER>

「門矢さん！」

佐天が一際大きな声で叫ぶ。デイケイドは大した事無いと言わんばかりにスツと立ち上がった。だが佐天には分かっている。自分たちがピンチの時に駆けつけてくれる土^{ヒドロ}でも、あんなスピードで動けるテレステイナには敵う筈が無い。

もう自分たちはここで終わりだと思った。そんな彼女の脳裏にはジャツジメントの第177支部で離していた時の事が浮かんでいた。

(諦めたらそこで終わりだ。だから俺は諦めてないぜ)

「さつきまでの威勢はどおした？怖気づいちゃまったのかあ？まあ仕方ねえよなあ。テメエらなんかじゃこのスピードには付いてこれねえもんなあ？」

「おい佐天」

「え？」

「何諦めたって顔してんだ。俺はまだ諦めてないぜ」

デイクイドは諦めていない。でもどうやったってどれくらい早い
かも分からないスピードを出すテレスティーナに勝てる気などしな
い。

(無理だよ門矢さん。いくら頑張ってもこんなの)

「御坂、まだやれるか？」

「も、もちろん」

「御坂さん」

叩きつけられて身体がバラバラになってしまいそうな程激痛が走
っているが、諦める訳にはいかないと御坂は鞭を打って起き上がる。
そしてポケットに手を突っ込んでコインを取り出した。

「チツ。しぶとい奴らだ。どうせ一方的になぶられるだけなのによ」

「そうでもないさ。こっちにもあるぜ」

< K A M E N R I D E ・ K A B U T O >

「何い!？」

デイクイドは赤い角を持つ光速の戦士、Dカブトへとカメンライ
ドした。この姿であればテレスティーナのスピードについて行くこ
となど朝飯前である。

もちろんデイクイドの事を全く知らないテレスティーナはただ驚
くばかりだ。

「何なんだデメエは!」

「俺は通りすがりの仮面ライダーだ。覚えておけ」

< CLOCK UP >

< ATTACK RIDE・CLOCK UP >

瞬間、Dカブトとテレスティーナは常人では決して入り込めないクロックアップの世界へと突入した。

テレスティーナは既に御坂によって超電磁砲が破壊されているため特に装備がある訳ではない。故に攻撃は拳と蹴りを使う体術なのだが、どれだけ放つても一向に当たらない。全て見切られて回避されてしまう。

逆にDカブトの打撃が尽く命中し、確実にテレスティーナにダメージを与えていく。

「ちつくしょう！何で当たらねえ！」

「お前のクロックアップ、遅いな」

「なんだとお？」

「それがどういった仕組みかは知らねえが、やはりカブトのクロックアップが一番速いらしい」

「ちっ、あの野郎、こんなゴミを渡しやがったのかよ」

「あの野郎？誰のことだ」

「教える訳ねえだろ」

「そうかよっ！」

「ぐああっ!？」

Dカブトが実際強い蹴りを叩き込んでテレスティーナを吹っ飛ばした。

御坂は少々困惑していた。士が余りにも余裕をぶっこいているのでそれに釣られ『もちろん』なんて言っただけで立ってしまった。

だがその後どうすればいいのなんて分からなかった。だからとりあえずあえず様子を伺っていたら士が左腰にあるケースらしきものからカードを取り出した。

（またカード？何するつもりなのよ。まさか、態々また変身するつもりなの？）

カードで何が出来るのかなんて事御坂は知らない。『立ちあがったの失敗だったかも』と後悔し始めていたとき、2人の姿が視界から消え失せた。

「ウソ!？」

「か、門矢さん。す、凄い」

何が起こっているのか全く分からないが、とにかくいつでも攻撃出来るように周囲への警戒は怠らない。2人の姿が消えてからほんの数秒が経過した時、何も無かった空間から突如テレステーナが吹き飛ばされたかのように現れた。そしてその背後には距離を置いてDカブトが背中を見せて立っている。

直感的に判断した。攻撃するなら今しかない。宇宙に舞うコインが描く放物線が決める運命、それは。

<FINAL ATTACK RIDER>

「御坂さん!」「お姉さま!」

「いつけえええええ!」

「ちつくしよおおおおお!」

超電磁砲は立ちあがるうとしていたテレスティーナの腹部に寸分
違わず、突き刺さる様に命中してDカブトの方へと吹き飛ばす。

< k a k a k a K A B U T O >

「門矢さん危ない!」

「はあっ!」

超電磁砲によって待つていれば背中を向けて吹き飛ばされて来る
テレスティーナに、振り向き様のカウンターとして右上段廻し蹴り
が彼女の右脇腹に鋭く放たれた。

「がああああああああっ!?!」

強烈な蹴りを浴びたテレスティーナは強く壁に叩きつけられて今
度こそ完全に沈黙する。彼女の生死を確かめるために近付いたが、
悪党というのはいつの時代もしぶといものらしい。ちゃんと息をし
ていた。

「ま、加減してやったんだから当然か。ん?何だこれ」

変身を解除し、御坂たちの所へ行こうかとした土の視界の端には
ある物が映った。倒れ伏しているテレスティーナのすぐ横にUSB
メモリらしき物が落ちている。

拾い上げてみると中腹辺りには『C』という文字が書かれている。
何処かで見たとある様な気がしたが、さっぱり思い出せない。
少々考え込んでいるとそれは勝手に砕け散って風化するように消滅

していった。

「ま、一応覚えておくか」

「門矢さん！」

USBメモリらしき物を気にしていた土の元に佐天が走り寄って来た。後には御坂たちも続いている。

「凄かったですよ門矢さん！まさかあんなスピードを出せるなんて」

「俺は天才だからな」

「えー、何ですかそれ」

「それより例の子供たちってのは助かったのか？」

「今からだ」

「なら早くしてやれ」

「ああ」

一同は階段を降り、コンピューターの前へと移動した。あとはエンターキーを押すだけであるのだが、どうしてか木山はそれを押す事を躊躇っている。

「大丈夫なの」

「え？」

「絆理ほんりちゃんかね、先生の事信じてるって」

「.....」

春上が枝先絆理の心の声を伝えると、それが後押しとなってついに木山はエンターキーを押した。

それによってプログラムが実行された事を確認すると、木山は眠っている子供たちの傍へと移動する。ここまで本当に長かった。だがようやく彼女の目的は達成された。長い間閉ざされていた子供た

ちの瞼がゆっくりと開けられていく。

「ああ……」

「先生？どうして目の下にクマがあるの？」

「……、色々と忙しくてね」

木山の頬を溢れた涙が伝う。一番最初に目覚めた枝先絆里を皮切りに、次々と子供たちが目を覚ましていく。

「そつだ、あの青年にも 彼はどこだ？」

「え？」

「居ませんわ」

「門矢さん！どこですか！」

いくら呼びかけようとも、その声がこだまするだけで土の応答は無い。それもそのはず、この時既に土は研究施設の外に居た。

研究施設 外

土は一足先に、いや二足以上は先に外へと戻って来ていた。ヘルメットを被ると入口に止めてあったマシンディケイダーに跨る。

「後の事はあいつらが上手くやるだろ。それに黄泉川の飲み会に誘われるのはもうごめんだからな」

あのまま御坂たちと一緒にいればその内アンチスキルがやって来るだろう。そうすれば黄泉川とも会う事になる可能性は高い。あの日の飲み会に心底懲りているのか、黄泉川と合う前にさっさとこの

世界から去ることを決めたのだった。

「あのUSBメモリみてえなのは気になるが、ここで考えても仕方ねえしな。木原から聞きだすのは・・・、色々な意味で無理だな」
それはそうだろう。元々話す気は無いようであったし、あれだけ重傷を負っていれば意識が戻るのも何時になるのか分からない。もちろんそれを気長に待つような士ではない。

今になって思い返してみれば、前の世界で牛鬼が現れたこともパワーアップしたこともおかしかった。その前の世界でも、ネウロイの能力に急激な変化が現れたことも。

きつとまた何かが起ころうと　いや、誰かが何かをしようとしているのではないかと思った士は、次の世界でも何かが起こるかもしれないと思いつつマシンディケイダーを走らせた。

白いオーロラを潜り抜けてやって来た世界で最初に目に映ったのは鮮やかな夕焼け。しかしどこか悲しさを感じる夕焼けだった。

夕焼け空に気を取られていた士だったが、目の前に大きな建物がある事に気づいた。何となく興味を持った士は写真を取りつつも中に入ってみた。

「図書館か」

入口にはこの図書館の名前である『風芽丘図書館』とあった。中に入るとロビーとでも言うべき場所があり、ゆったりとした空間になっていた。どうやら奥の方に本が貯蔵されている部屋があるようだ。

そして今更気づいたのだが、ロビーには小さめの音量でゆったりとした音楽が流されていた。普段図書館なんて場所には行かない士にはそれが普通なのかそうではないのか分からなかったが。

~~~~~

「・・・、何かちつとばつか悲しい感じの曲だな」

椅子に腰かけた土が、毎回変わる自分の服は今回どんなのだと見てみれば、今回は至って普通だった。黒のスボンに血のように赤いVネックのシャツ、その上には黒のロングコートを着ている。だが何処かで見たことがあるようなふうでもあった。

何でこんな格好かと思えば、どうやらこの世界の季節は冬らしい。

「どつりで肌寒い訳だ」

さっきまでは真夏だっただけに余計この温度差が堪えた。『風邪引かないようにしないと』と思う土だった。

KAMEN RIDE 06 GOD SPEED LOVE(後書き)

書いてたら文字数が無駄に多くなってしまいました。  
空白改行無しで16000超えって……。

それはさておき、実はこの物語はすでに中盤に差し掛かってたりします。

あと何話くらいかな。

うーん……。大体あと8話くらいを予定しています。

8話か……。結構多いな。

まあ更新は遅めですが頑張っていきます。

ではまた次回。

KAMEN RIDE 07 それは世界の破壊者なの(仮)

K A M E N   R I D E   0 7   それは世界の破壊者なの（前書き）

11月7日23:30頃

最後の部分のカード使用時の音声を変更させていただきました。

11月8日00:15頃

誤字脱字の修正をしました。

これまでの仮面ライダーディケイドは。

土がやって来た近未来の様な街、学園都市。そこでは最近になって乱雑解放が頻発するようになっていた。

この世界での役割は、どうやら教師でありアンチスキルの一員として生徒を守る事の様だった。

しかし早くも夏休みに突入してしまい、することはあるものの結構暇を持て余していた土。

アンチスキルの支部で乱雑解放事件の資料を調べていたところ、MARという組織から事件解決の報が届いた。だがその部隊の隊長であるテレステイナー・木原・ライフラインが怪しい事は、アンチスキルもジャツジメントも分かっていた。

そして、最早隠しだてもしないとばかりにテレステイナーが動き出す。

「電撃が弾かれる!？」

「あーっはっはっはっは。そんなもん効くと思ってるのかあ？」

「お前みたいなのはさっさと倒すに限る」

ハイウェイで戦っていた御坂とテレステイナー。しかし御坂の電撃はおろか、代名詞でもある超電磁砲までもが解析されているせいで木原には通用しない。

しかしそこにジェットスライガーに乗ったディケイドが現れ、彼女たちの窮地を救う。

何とか置き去りの子供たちが移送された研究施設に辿り付いた御坂たちだったが、なんと、そこにジェットスライガーのミサイルを受けて負傷したテレスティーナが現れた。

一度は御坂の超電磁砲によって地に沈むテレスティーナ。だが、ようやく子供たちを助けられるという直前に三度テレスティーナが御坂たちの前に立ち塞がった。

しかも今度は、常人では視界に捉えることさえ敵わない高速移動能力、クロツクアップまでも使用して。

万事休す、絶体絶命。そんな言葉がぴったりで誰もが諦めかけたその時、御坂たちにとっての救世主、ディケイドが現れた。

<FINAL ATTACK RIDE>

「御坂さん!」「お姉さま!」

「いつけえええええ!」

「ちつくしよおおおお!」

<k a k a k a KABUTO>

「門矢さん危ない!」

「はあつ!」

Dカブトがクロツクアップの世界からテレスティーナを弾き出し、御坂の超電磁砲が再び炸裂。さらにはDカブトのライダーキックを叩き込まれ、テレスティーナは今度こそ完全に沈黙した。

そして土は事後処理はアンチスキルやその他の奴に任せ、次の世界へと旅立つのだった。

。 新たな世界で通りすがりの仮面ライダーはその瞳に何を視る。

しばらくの間、土はロビーの椅子に腰かけて夕陽を眺めながら、

小さめのポリウムで流れる曲に耳を傾けていた。

太陽はほんの少しずつ地平線へと近付き、次第に鮮やかな夕焼けは紫へ、紫から青へと移り変わっていき、世界は夜を迎えようとしている。

そんな淋しい光景を見ているからなのかは分からないが、土はほんの数か月前の出来事を思い出していた。

「俺は全ての破壊者だ。俺に触れるものは全て破壊する」

現状からは想像することも難しいが、ほんの数か月前までは戦いの連続で気が休まる時が無いほどの激闘だった。

自身に向かって来るあらゆるライダーを破壊し続け、自身を含む全てのライダーを破壊した時、世界の崩壊は止まった。だが最後にデイケイドが散る時、自分の中に残っていたのは寂しさ、強行手段によって誰かを犠牲にしなければ世界を救えない自身への怒りだった。

しかも最後は大切な仲間自分を倒させるという、彼女にとってとても辛い事までさせてしまった。

それを今更悔いても仕方が無いことであるし、結果としては全員が助かったのだから一応はよしとしている。が、やはり土自身は今でも申し訳なく思っていた。

何故今になってこんなことを思い出したのだろうか。余りいい思いものではない。むしろ悪い部類に入るそれを思い出した土は、なんだか無性に腹が立った。

こんな気分になったのもあの太陽のせいだと、責任をなすり付けた。

「……。そういやさっきの世界で戦い終わって直ぐに来たんだっただな。腹も減ったし、何か買いに行くか」

そうと決まれば土の行動は早い。何処か特定の居住空間　　早い話が光写真館ごと旅していた時のように家は無い。それに少し前に居た世界のように学校の教師で宿直室に泊まれたり、なんてことも無い土は、『コンビニかどっかで適当に買うか』と図書館を後にした。

見知らぬ土地でも意外と何とかなるものだ。

風芽丘図書館から適当にマシンディケイダーを走らせると、思いのほか簡単にこの街の多くの人が足を運ぶであろう場所　　海鳴商店街という場所に着いた。

「ま、ここなら何かあるだろ」

マシンディケイダーから降りた土は当ても無く歩いているが、商店街というだけあって食べ物売っている店がちらほらと視界に映り込んでくる。

そんな中、一軒の店の前にある物が土の興味を引き付けた。それは、こんな商店街にはとてもじゃないが似合わない、黒塗りのリムジンだ。

何故こんな物が？と思っていると、喫茶翠屋という看板が掛けられている店から4人の幼い少女たちが出てきたではないか。

最初はその少女たちを別に意識していた訳でもなかったのだが、彼女たちがリムジンに近付いていくので自然と意識がそちらに向いていった。

「じゃあね」

「またね」

「うん、バイバイ」

「また明日」

子供らしい挨拶を交わしながら4人の内、金と紫の髪をした2人の少女がリムジンに乗りこんだ。

彼女たちが乗りこんだのを確認した老齢の運転手がそのドアを閉め、自身も運転席に戻った。そして2人の少女を乗せたリムジンは安全運転で走り去っていった。

残されているのは茶と金の髪をそれぞれツインテールにしている2人の少女。不思議と土の足は、友達を見送る彼女たちの元へ向かった。

「あいつらすげえ金持ちなんだな」

「「え？」」

いきなり話しかけられた上にそれが見えず知らずの人物だった故か、少女たちは困ったような表情を浮かべて顔を見合わせている。

小学校なんかで『知らない人に着いていつてはいけません』などと教えられているからなのだろうか。

大体そんなところかと思った土は、別に彼女たちの警戒心を解いてやる必要もないのだが話しかけてしまった手前、このまま立ち去っては明らかに不審者すぎるので面倒臭いと思いつつも言葉を続けた。

「ああ、悪い。俺は門矢土っていうんだ。さっきの2人は友達か？」

「え、はい。そうですけど」

「あの、それがどうかしましたか？」

「いや、こんなところにリムジンなんてスゲエと思ってな」

まあ確かに、と茶髪の少女は相槌を打つ。さすがに名乗った程度では警戒心が解かれる事は無かった。

土からすればそんなことは別にどうでもいいことではあったのだが。

「それで・・・、私たちに何か用でしょうか？」

「ん？いや、別に用って訳でもないんだがな。ああそうだ、この辺に弁当とか売ってる店は無いか？」

「お弁当ですか」

本来の目的を思い出した土は誤魔化すように問いかけてみた。

すると金髪の少女が、知ってる？と言わんばかりに茶髪の少女に視線をやった。

「それならここからちょっと真っ直ぐ行ってもらえばありますけど」

「そうか、助かる」

「いえ」

「お前は知らなかったのか？」

この街に住んでいるなら知っていそうなものだが、先程の金髪の少女を見ていれば知らないんだろうなという予想に辿り着く。

彼女の日本人らしくなく、明らかに外国産ですよと言わんばかりの容姿からすれば何となくその理由も分かるが。

それ以前に土はこの国が日本かどうかすら知らないが、字に漢字が使われていたり、街の雰囲気からして日本だと思っていた。

「私は最近この街に引っ越してきたばかりで」

「まあそうだと思った」

「え？」

「見た目が日本人っぽくないからな」

「あ、そうですね」

「サンキュー、じゃあな」

これ以上特に話す事も無く、空腹を満たしたい士は早々に話を切り上げて教えられた店へと向かった。

教えられた通り少し歩いていけば、それらしい店が見えた。

「いらつしやいませ！」

店の正面に正面に立てば売り子の若いお姉さんが元気よく挨拶してくる。ああ、とだけ返した士は早くもガラスケースの中にある見本を見ている。

お姉さんがどれにします？なんて聞いて来るが、まるで士には届いていない。

そしてやはりというか、ああ、とだけ生返事で返すだけだった。

空気を読んで選ぶ邪魔をしてはいけないと思ったのが、ああ無愛想な客だなと思ったのかは分からないが、お姉さんはそれ以上何かを言うてくることは無かった。

「まあこれでいいか」

士が弁当を選ぶのに掛かった時間は1分弱程度だっただろうか。

その間、お姉さんは何故だか物凄く緊張していた。軽く握っていた手に汗をかいてしまうほどに。

まるで高級レストランのシェフが何かに値踏みされているような気分を味わっていたのだ。

士が選び終わってその緊張感から解放されたからなのか、無意識の内にため息をついていた。

「ありがとうございました」

さっさと会計を済ませた士がマシンディケイダーに戻るために踵

を返したところでお姉さんに呼び止められた。

「あ、すみません！これを」

「ん？」

「ここから少し行っていただいたところでやっていますので」  
「分かった」

士が受け取ったのは名刺サイズの紙きれだった。それは所謂福引券というやつで、こんな商店街なんかではよくありそうなイベントだった。

せつかくももらったものを使わないのはもったいないし、何よりこの世界でしか使えないのだ。使わないはずが無かった。

ほんの30メートルほど歩くと福引をやっているテントを見つけた。こういうのはどこの世界も共通なのか、福引の場所に居るおっさんはねじり鉢巻きにはつぴという姿だった。

早速士は福引券を渡してチャレンジする。1等賞はお約束というか、何処かの街の温泉ペアチケットだった。

当然ながら士は1等賞を当てるつもり、というか当たって当たり前みたいな顔でガラガラと音を立てて回すと、黄色い球が出てきた。

「何等だ？」

「おめでとつございます！5等です」

「馬鹿な……。この俺が5等だと！？」

「景品でございます」

約1分後、暮れ時の商店街をとぼとぼ歩く士の姿があった。その手にはスーパリーの袋が握られており、中にはキャベツが丸ごと1個入っていた。

「……どうしてキャベツなんだ」

それはこの上無い疑問だった。いくら商店街の福引だからといって、普通キャベツなんて景品にするだろうか。

詞や薫がいた世界ならまだしも、今この世界でそんなものを貰ったところでどうしようもない。

このキャベツを一体どうしろってんだ……。なんて考えていると、自分の前にいる車椅子の少女とそれを押す女性の会話が耳に入ってきた。

「はあ、キャベツ買えへんかったな」

「仕方ありません。時間も時間ですから」

「そっやな」

瞬間、土はチャンスだと思った。不要なキャベツを押し付け  
いや、譲る大チャンスだと。

歩くスピードを上げて2人の前に回り込んだ。

「おい、これやるよ」

「え？」

土がいきなりキャベツの入った袋を突き出して来るものだから、車椅子に乗っている茶髪の少女は訳が分からないといったふうに首を傾げている。ピンクの髪をポニーテールにしている女性は土を警戒しているのか、少し睨みつけるようにして見ている。

「さっき福引で当たったんだ。だが俺には不要な物だからな。やるって言ってたんだ」

「で、でも悪いですし」

「言っただろ、俺には不要だって。このまま持ってたって腐らせちまうだけだ」

「ですけど・・・」

事情を説明してもまだ躊躇っている少女に、土は半ば強引に押し付けるようにして彼女の膝の上に袋を置いた。

土が袋を置こうとした瞬間、ピンクの髪の女性から一瞬だけ殺気らしきものが発せられたのを感じ取ったが、あえて気付かないふりをしてそのまま続けた。

「悪いがそういう訳だ。そっちで適当に食ってくれ」

「あの！」

ちょっと強引だったかと思いつつも土がマシンディケイダーに戻ろうと背中を向けた時、少女に呼び止められた。

今日は良く呼び止められる日だなと思いつながら少女を振り返った。

「これいただいたお礼に晩御飯御馳走しますよ」

「は？」

土は一瞬耳を疑った。どこの世界にたかだかキャベツ1個を譲ったくらいで晩御飯を御馳走しようという輩がいるのか。結論、目の前に居た。

しかし土は既に弁当を買っており、それをアピールする。

「この通りもう買ってあるんだ」

「ええやないですか。そういうのよりちゃんと家で作った料理の方が栄養もありますよ？」

「しかしな・・・」

確かに少女の誘いは魅力的なものだった。しかしこの子供1人の一存で決めるわけにもいかないと思った土は、後ろに居る女性に視

線で語りかけた。

それに気付いたのは女性だけでなく少女もだった。

「なあ、ええやろシグナム？」

「ええ、私は構いませんが」

何故か少女は女性に対してタメ口だし、女性は少女に対して敬語を使っている。普通は逆じゃないかというのが初対面の人間の感想だろう。

だが、別段気にする程の事でもないと感じてそれには触れなかった。

「なら決まりやね。あ、私は八神はやていいいます。で、こっちはシグナム。ええと・・・」

「門矢士だ」

「門矢さんですか。キャベツありがとうございます」

「むしろ礼をいうのはこっちだろ。キャベツくらいで晩飯を御馳走してもらうんだからな」

「そんなん気にせんといってください。ご飯は大勢で食べる方が楽しいですから」

「・・・、そうだな」

「では帰りましょうか」

「そやね」

シグナムがはやての車椅子を押し、その隣を土が歩いて八神家へと帰っていく。

海鳴商店街を出る時にマシンディケイダーの回収も忘れていない。そんな大型のバイクを引いて歩いていると結構しんどいのだが、1人で乗る訳にもいかないし、かといって彼女たちを乗せたうえで車椅子まで積むなんて出来ない。

家はそれほど離れていないということだったので、少々面倒だったが引いていった。

八神家までの道中、疑問に思っていたことを聞いてみた。

シグナムはどう見ても日本人に見えないから家政婦か何かか？という様な事を聞いてみれば、はやてはあっさり否定した。

彼女曰く、外国からやってきた親戚のお姉さんだとか。シグナムの他にも、家にはシャマル、ヴィータという人物たちと、ザフィーラという狼みたいなおペットがいるらしい。

逆にはやてに土自身の事を聞かれた時はどう答えたものかと少し考え込んでしまったが、話しても何ら問題のない辺りだけ話すことにした。

「俺は世界を旅しているんだ」

「へえ〜。そらまた凄いですね」

「何のためにそんな事を？」

「そうだな……。俺の世界を写すため、ってところか」

「あ、その可愛いカメラですか？」

「ああ」

可愛いかどうかは知らねえけどな、と土は呟く。

これまで様々な世界を旅して、その間ずっと土の首にさげられていた2眼レフのトイカメラ。一時期は手放していたこともあったが、今は2度と手放す事が出来ない程、土に必要な物となっている。

「せやったら、私も撮ってくれませんか？何かの縁で知り合えたって事で」

「そうだな……。ま、考えておいてやる」

「ありがとございます。期待して待ってますから」

「ああ」

士が返事をするのと同時にカシャツという音がした。はやてとシグナムがその音の発生源に気付くのにそう時間は掛からなかった。

「も、もう撮ったんです？」

「まあな」

つい今さっきの会話中に士がカメラを見せるようにして持っていたのだが、実際には写真を撮るためにレンズをはやてに向けていたのだった。

しかも何時の間にそうしたのか、マシンディケイダーのスタンドは立てられていた。

「せやけど何でこんな急に？」

「さっきのお前の笑顔は中々よかったからな。アンタもそう思うだろう？」

「え？ええ、まあ」

「そ、そんなん言っても何も出えへんよ」

少し照れ臭かったのか、はやては頬を赤らめている。いつもとはまた少し違ったはやてを見たシグナムはシグナムで微笑みを浮かべていた。しかしそこには一抹の悲しみのような、淋しいようなものが含まれていたのを士は見逃さなかった。

その後も他愛も無い話をしている内に八神家へと到着するのだった。

夜も深まった頃だった。

士は何かの気配を感じて目を覚まし、その場所へと抜き足差し足忍び足で部屋を出た。

そもそも何故こんな状況になっているのだろうか。それは少しばかり時間を遡る。

本日の晩御飯はトンカツだった。もちろん定番とも言うべきキャベツの千切りも付属している。どうりでキャベツが必要だった訳だ。食べてみれば美味しいのなんの。まるでプロの料理人が作った物かと思ってしまう程の出来だった。

余談だが、シャマルが手伝おうとしたら、シグナムとヴィータが青筋を浮かべてしまうほどに怒っていた。さらにははやても『お皿並べてくれる?』と頼み、遠回しに手伝うなと言っていた。

それでだ。土が旅をしている事が話題に出たはやてが思い出したように言ったわけだ。『旅してるんでしたら、寝る時とかどうしてるんですか?』と。

その問い掛けに対してホテルに泊まると答えたのだが、それが幸か不幸か、ならこの家に泊まればいいというはやての提案でそうなってしまうのだった。

そして眠りについていたのだが、何かの気配で目が覚めてしまい今に至るというわけだ。

(玄関の方が?)

玄関の扉が閉まった様な音が聞こえた土が静かにそちらへと向かう。玄関には誰も居ないらしく人の気配は感じられない。

気のせいかと思った土が引き返しかけた時、扉の向こう　　つ  
まり外から微かに話し声がすることに気が付いた。

不審に思っただアスコープを覗いてみれば、そこからは意外な人物たちが見えた。

「何やってんだ?」

「っ、門矢・・・」

外に出た土が彼女たちに声を掛けると、不味いところを見られたと言わんばかりの表情を浮かべるシグナムたちがいた。

「お前ら……。まさかとは思うが、はやてを見捨てて逃げようってんじや」

「んな事する訳ねえだろ！」

深夜だというのに近所迷惑も考えずヴィータが叫ぶ。日中であればそれほどでもない音量だったが、今の時間帯では周りが静かなだけに思っている以上に響くものだ。

案の定、ザフィーラに声大きいと注意されていた。

「我らは主のために行動しているだけだ」

「はやてを1人残して家から出ていくことが、か？」

「違うって言うてんだろ！」

「具体的に説明してもらわないとな」

「門矢、お前には関係ないし、知る必要も無い」

シグナムが厳しい視線で土を射抜くようにして威圧する。そんなことで怯むような土ではないが。

「関係あるさ。はやてには一宿一飯の恩があるからな。はやてを見捨てようってんなら俺はお前たちを許さない」

「……、ならば付いて来るがいい。見せてやる」

「シグナム、いいの？」

「長々と話をしているのは時間の無駄だ。シグナムの意見には賛同する」

「ザフィーラまで……」

シャマルは困惑した表情を浮かべる。出来れば一般人である土を

巻き込みたくは無い。

しかしこうまで土が食い下がるものだから、最終的にはシグナムの意見に賛同せざるを得なかった。

「ということだ門矢。死んでも構わんというなら付いて来い。それが嫌なら大人しく寝ている」

土の答えはもちろん。

それから数分後の事、土の目の前には八神家の前とは全く違う光景が広がっていた。

何度か目の前の景色が変わったが、最終的に辿りついたのは見渡す限り砂漠でしかないこの光景。どうしてこんなところに居るのか不思議だった。

少なくとも土が世界を移動するときに見れるオーロラを通った訳ではない。とすればシグナムたちが何かをしたという事になるのだが。

「どうなってんだ？」

「転移魔法だ。魔法を信じるか信じないかはお前の勝手だがな」

「・・・、そういうことか。で、ここはアフリカか？」

「アフリカ？ああ、地球の大陸名の1つだったか。残念だが違う。ここは地球とは違う世界だ」

「何だと？」

今まで自分以外に世界を移動できる者がいる事は見ているから知っている。だから移動すること自体に関してはあまり驚きは無い。しかしこれまで移動してきた世界に共通なのは、多少の差異はあ

れその世界は『地球』ということだ。

だがどうだろう。今、土がいるのはおそらく地球ではない。

シグナムは地球ではないと言いつつ、空を見上げれば明らかに月ではない天体が浮かんでいる。

その事に驚きを抱きつつも、目の前の問題をどうするかを考え始めた。

2人が話している間に、目の前に茶色い蛇のような怪物が現れた。しかもその巨体は半端ではなく、出るならシンケンジャーの世界だと、と思わせるほどのものだった。

しかもヴィータたちはヴィータたちで違う世界なのか違う座標なのかは知らないが、とにかく途中で転移さ気が分岐したようではいいなかった。

「どうすんだよコイツ」

「だから死んでも構わんのならと言ったのだ。自分の事は自分でどうにかしろ。お前を守りながら戦う余裕はない。いくら怪物でも私たちの都合で殺す訳にはいかんからな」

「じゃあ一体何しに来たってんだ？」

土の問いかけも虚しく、シグナムは既に戦闘モードに切り替わっている。

どこから取り出したのか、剣を握って果敢にも立ち向かっていく。それも、空を飛んで、だ。

「おいおい、ミーナたちじゃあるまいし。いや、むしろあいつらみたいストライカーを使わずに飛んでる分本当に魔法って感じだな」

蛇の怪物の意識はシグナムにいつているのか、土には目もくれない。

どうするつもりかとしばらく静観していたのだが、しばらくして

も倒す事が出来ない。それどころか中々に苦戦しているらしく、肩で息をしているではないか。

見かねた士は手伝ってやるかと、ディケイドライバーを装着してカードを装填した。

「変身！」

<KAMEN RIDER DECADE>

「さて、倒すんじゃない弱らせるんだっただけな」

ディケイドが独り言のように確認していると、なんとシグナムが蛇の身体から生えている触手のようなものに捕まってしまった。

「まったく、ああいう敵と戦う時のお約束じゃねえか」

<ATTACK RIDER BLAST>

ライドブッカー・ガンモードで光弾を大量発射してシグナムの周りの触手を吹き飛ばす。

解放されたシグナムが光弾の軌道から発射地点を推測し、視線を向けたその先には先程まで士が居た場所があったのだが、そこには士の代わりに全身が鎧に包まれた謎の人物が銃のような物を向けて立っていた。

「大丈夫か？」

「その声・・・、門矢か!？」

「手伝ってやる。どれくらい弱らせればいい？」

「反撃出来ない程度にだが・・・。それよりお前」  
「分かった」

<KAMEN RIDER RYUKI>

「っ!?!何だあれは・・・」

全身鎧の人物が土だと分かったのはいいが、さらに姿が変わった彼に驚きを隠せない。

変わる前はマゼンタと白、それに黒を基調としていたのに対し、今は燃え上がるような赤が全身を彩っている。

予想だにしていなかった事態に茫然としているシグナムだが、彼が左腰にあるケース　先程は銃になっていた物からカードを取り出す仕種で我に返った。

< ATTACK RIDE・STRIKE VENT >

音声が響くと虚空より落ちてきた何かが、紅蓮の龍騎士の姿を借りたD龍騎の右腕に装備された。

「はあああああ　」

D龍騎が右腕を引いて溜めを作る。

しかしその間も蛇は動いている。先程までは目もくれなかった土もといD龍騎に、巨大で尖っている尻尾の先端が向かって行く。

「くっ！レヴァンティン！」

< Schlangeform >

「はあああああっ！」

シグナムの剣、レヴァンティンから葉莖が1つ排出される。

レヴァンティンを大きく振るうと刃が細かく分割され、長い鞭のようにになって尻尾に絡みつき動きを封じる。

本来ならそのまま切断してしまうところだが、今は極力傷付けるつもりは無いらしくそれに留まっていた。

「はあっ！」

D 龍騎が勢い良く右腕を前に突き出した。

すると放たれた火球は蛇の頭部へ真つ直ぐに飛んでいく。炸裂したそれは蛇にかなりのダメージを与えたのか、大きな音と共に倒れ込んで動かなくなってしまうた。

「この後どうすんだ？」

「リンカーコアを蒐集する」

シグナムが本を開くと蛇から光る小さな球体が出現し、次第にその輝きが弱まっていく。

球体が消えると本を閉じ、土の元へ降りてきた。

「済まない、助かった」

「別に構わないさ」

「お前に聞きたいことが出来た。今日はここまでにして帰るとしよう」

「・・・、分かった」

何について聞かれるかは大体察しが付いている土は、半ば諦めたような声色で同意を示すのだった。

日は昇りきり、早朝というにはもう遅過ぎる時間。というか、もう昼すら過ぎているのだが。

はやては海鳴大学病院のベッドの上にいた。

同病室内には土、シグナム、シャマル、ヴィータの他にここに勤めている美人の石田医師がいた。ちなみにザフィーラは大人しくお留守番である。

「大丈夫みたいね、よかったわ」

「はい、ありがとうございます」

「はあ、ホッとしました」

「せやから、ちょお眩暈がして胸と手がつつただけで言ったやん。もう、みんなして大事にするんやから」

「でも頭打ってましたし」

「何かあつては大変ですから」

「はやて、よかった」

はやては傍に寄って来るヴィータの頭を優しく撫でてやる。

「まあ、来てもらったついでにちょっと検査とかしたいからもうちょよつとゆつくりしてってね」

「はい」

「さて、シグナムさんシャマルさん、ちょっと」

石田医師は2人と共に病室を後にした。

とりあえず彼女たちが戻って来るのを待っている間、はやての話相手にでもなつてやるかと思つたのだった。

「入院か」

既に空は茜色に染まっており、病院から出た土がそれを発した。

「まだ聞いてなかったが、お前たちの行動とはやての病気のこと、何か関係があるんじゃないのか？」

「……家で話そう」

それっきりシグナムたちは口を閉ざし、家に帰り着くまで一言も

喋ることは無かった。

リビングに入るとそれぞれソファーに腰掛ける。家の中ははやてがいる時とはまるで正反対で、重苦しい雰囲気は漂っていた。

「それで？」

「端的に話すと、はやてちゃんは闇の書の主に選ばれたんです」

そこからはシグナムたちの辛い過去に触れての話だった。

リンカーコアの蒐集を行わないと主のそれが浸食されていく。結果として身体に障害が生まれ、はやての身体の麻痺もそれが原因だろうと。

だから彼女たちは闇の書を完成させ、はやてを呪縛から解放しようとしている。

しかし闇の書は古代遺失物に認定されており、時空管理局という組織の捜索対象となっている。

そして、既に管理局には目を付けられていて中々思うように蒐集が出来ないことも聞かされた。

「なるほどな。まあ疑問に思うこともあるが、闇の書を完成させればはやては本当に助かるんだな？」

「ああ」

「でもあたしは何か大事な事を忘れてる様な気がすんだ」

「何だ急に？」

「分かんねえけど、何か大事な事を・・・」

「分からねえ事を何時までも考えてたって意味ねえよ。それより、さっさと集めちまおうぜ」

立ちあがった土をシグナムたちは呆けた表情で見つめている。

「門矢・・・」

「でもあなたを巻き込む訳にも」  
「言っただろ。はやてには一宿一飯の恩がある」  
「だがそれくらいのことだ」  
「それに、アイツみたいなお人好しは嫌いじゃない」  
「フツ、お前も相当お人好しだな」  
「まさか。俺のは単なる気まぐれだ」  
「そう言う事にしておこう」

やることが決まれば後は早い。

とにかくリンカーコアを蒐集しまくればいいということで、管理局に見つからないよう慎重に転移魔法を使って異世界に渡り、その生物から蒐集する。

気付けばもうそれから数日が過ぎ去っており、ページは少しずつだったがこれまで以上のペースで順調に増えていった。

もつとも、この蒐集活動にはシャマルはほとんど参加しておらず、主にはやての世話に回っていた。

12月24日

とうとう運命の日がやってきた。何の因果かこの日はクリスマスイヴという、世間ではリア充共が楽しく過ごす日なのだが、土やシグナムたちはそんな事に構っている場合ではなかった。

その日の夕方、お見舞いに訪れていた土たちに少し遅れる形ではやての友達たちがやって来た。

彼女たちの中には以前、土が商店街で出逢った2人の少女の姿もあった。

もちろんシグナムたちからその2人が管理局魔導師であることは聞いているし、向こうも土には見覚えがあるらしく驚いていた。

日も暮れ、それは群青に染まっている。そんな中、とあるビルの屋上には5つの影があった。

「はやてちゃんが闇の書の主・・・」

「悲願はあと僅かで叶う」

「邪魔をするならはやてちゃんのお友達でも」

「待つて！ちよつと待つて！話を聞いて下さい！闇の書が完成したらはやてちゃんは」

士たちを前にして、茶髪の少女　高町なのはが必死に訴えかけるのだが、途中で彼方から飛んできたヴィータが有無を言わさずハンマー型のデバイス、グラーファイゼンで殴りかかった。

「きゃあつ！？」

バリアを発動させて直撃を防いだなのはだが威力に圧倒されて金網まで飛ばされてしまう。

「なのはっ！」

「うおおおおおおお！」

「っ！？」

なのはを心配して金髪の少女　フェイト・テストロッサが見せた隙にシグナムが斬りかかる。寸でのところで飛び退いて回避したフェイトは自身の斧型デバイス、バルディッシュを起動させた。

「待てお前ら！話は聞いてもそんじゃねえだろ」

「管理局に我らの主の事を伝えられては困るのだ」

「私の通信防御範囲から出す訳にはいかない」

「シヤマル、お前まで」

はやてを第一に考えている彼女たちに、この状況では土の声も届かない。

金網まで飛ばされていたのはが歩み寄って来るヴィータを見上げる。

「ヴィータ、ちゃん」

「邪魔すんなよ。あともうちよつとで助けられるんだ。はやてが元気になってあたしたちの所へ帰って来るんだ。必死に頑張ってきたんだ。もうあとちよつとなんだから　　邪魔すんなああああ！」

グラーファイゼンが振り下ろされる。なのはのバリアと激突し、行き場を失くした魔力は爆発して火を生みだし、なのはがいた辺りは炎に包まれた。

そこからゆつくりと歩み出てくるのはを、ヴィータは涙を浮かべながら憎しみの籠った目で睨みつけている。

「悪魔め・・・」

「悪魔で、いいよ」

白のバリアジャケットに身を包んだのはがデバイス、レイジングハートを起動させて構えを取った。

「悪魔らしいやり方で話を聞いてもらうから！」

「お前は離れて通信妨害に集中している」

「シヤマル！」

「ゴメン、土君。どうしてもここは譲れない」

「待て！」

シグナムもシャマルもフェイトも、それぞれがバリアジャケットを装備して完全に戦闘態勢に入ってしまった。

まだ士たちがこのビルの屋上に来たばかりの頃、すぐ近くのビルにはごく僅かな時間だったがオーロラが出現し、それが消え去った後には1人の青年が佇んでいた。

「この世界には凄いお宝があるらしいけど　　ん、あれは・・・」

近くのビルの屋上に複数の人影を見つけた青年は、こんな寒空のしたで物好きもいるもんだね、と思いながらビルの中に入っていうとしてそれを止めた。

「まさか君もこの世界に来ていたとはね」

その複数の人影の中に、よく見知った人物がいるのを見つけたからだった。

結構修羅場じゃないのかと思った青年は、面白半分で見物を決め込もうとしていた。

何時戦いの火蓋が切って落とされても不思議ではなかった。士は少し焦り気味にディケイドドライバーを装着した。

「くそっ、変身！」

<KAMEN RIDER・DECADE>

「っ！？」

今の今まで一般人だと思っていた土が変身した事でなのはとフェイトの意識が一瞬引きつけられる。

その隙を見逃すはずもないシグナムとヴィータが同時に襲いかかった。

なのはは空に上がることで回避し、フェイトはバルディッシュで受け止める事で防いだ。

「闇の書は悪意ある改変を受けて壊れてしまってる。今のままで完成させたらはやては・・・」

「我々はある意味で闇の書の一部だ」

「だから当たり前だ！あたしたちが闇の書の事を一番よく知ってるだ！」

「じゃあどうして！どうして闇の書なんて呼ぶの！なんで、本当の名前で呼ばないの！」

「止めろって言うてるだろ」

「邪魔をするな門矢！」

ディケイドは罅迫り合いになっているシグナムとフェイトに近付き、無理矢理にシグナムを引き剥がした。

抵抗するシグナムを羽交い絞めにして止めようとしてみたが、思いのほか彼女の力は強かった。

「邪魔をするならお前でも！」

「うああっ!?!」

羽交い絞めを外された後、レヴァンティンの一閃がディケイドを地に沈める。

「ま、待て！前にヴィータが言ってただろ。何か大事な事を忘れて

る気がするって。アイツらはそれを知ってるんじゃないのか」

「・・・、そうかも知れん。だが今更そんな事を聞く必要は無い」  
「その通りだ」

何者かの声が聞こえたと思った瞬間、この場に居る全員に青色のリングが4重に掛けられて身体の自由が奪われた。

「この人数だとバインドも通信妨害もあまり長く持たん。早く頼む」  
「ああ」

何時の間に現れたのか、仮面を付けた2人の男が全く同じ形をして空に浮かんでいる。

その内奥側にいる方が魔法を発動させているらしく、足元には魔法陣が展開され、周囲にはカードらしきものが浮かんでいた。

手前に居る男が手を上げると闇の書が出現し、ページを開く。

「何時の間につ！？」

「う、うあああああああ！」

突然ヴィータが苦しみ出したかと思うと、続くようにシグナムとシャマルも苦しみだした。

「これは・・・、蒐集か！？」

「最後のページは不要となった守護者自ら差し出す。これまでも幾度かそうだったはずだ」

<Sammlung>

「止める！」

ディケイドの叫びも虚しく、シグナムとシャマルの身体は次第に透過していき、終には服を残して完全に消滅してしまった。

「うおおおおおおお！だあああああああ！」

「そうか、もう一匹いたな」

「うっ、ぐうううっ！」

「ザフィーラ！」

仮面の男による通信妨害で誰にも連絡がつかなかったザフィーラが不審に思ったのかこの場に駆けつけた。

普通ならそれは有り難い援軍になるかもしれないが、この場においては最悪の結果に繋がってしまうだけだった。

彼もシグナムたちと同様にリンカーコアを蒐集されてしまいビルの屋上に倒れ伏した。

なのはとフェイトは仮面の男によって上空に作られたクリスタルケージに閉じ込められた。

動かないヴィータを間に挟み、2人の男はなのはとフェイトに姿を変えた。

「あの男は？」

「構わん、放っておけ。どうせバインドで動けはしない」

「闇の書の主、目覚めの時だ」

「因縁の、終焉の時だ」

屋上に魔法陣が出現すると、そこには病院に居るはずのはやてが呼び寄せられた。

「なのはちゃん？フェイトちゃん？何なん？何なんこれ？」

今日までに進行した闇の書の浸食によってはやては相当身体が辛いのか、苦しそうに声を絞り出す。

そんなはやてを、2人の男が姿を変えたなのはとフェイトが冷た

い目で見下ろしている。

「君は病気なんだよ。闇の書の呪いって病気」

「もうね、治らないんだ」

「え？」

「闇の書が完成しても助からない」

「君が救われることは無いんだ」

「っ……。そんなんええで、ヴィータを、離して。ザフィーラに、何したん」

「この子たちね、もう壊れちゃってるの。私たちがこうする前から」

「とつくの昔に壊された闇の書の機能をまだ使えろと思いきんで、無駄な努力を続けてた」

「無駄な訳ねえだろ！はやて、騙されるな！そいつらは　ぐあ　っ！？」

今の言葉にカチンと来たディケイドは思わず叫んだ。

やはりコイツもクリスタルケージに入れておくべきだったかと思　いながら、偽のフェイトが魔力弾を一発、動けないディケイドに撃　ち込んだ。

「その声、土さん？シグナムとシヤマルは？」

偽フェイトが顎を煽って後ろだと示す。

はやてが振り返れば、そこには2人が来ていた服だけが風に揺れ　ている。

「壊れた機械は役に立たないよね」

「だから壊しちゃおう」

「ダメっ！止めてえええええっ！」



それは破壊者としてライダーを破壊してきた自分に似ていると思えた。

だからこそディケイドは知っている。例えそれで多くを救えたとしても、必ず嘆き悲しむ人がいることを。

故にそれでは世界を救ったとはいえないと思っている。

だからそれは止めなければならぬ。そして全てを救わなければならぬ。

しかし、もうそれは叶わない。シグナムとシャマルは消えてしまったのだから。

でもここで諦めるわけにはいかない。まだヴィータとザフィーラはそこにいるから。

「お前たちははやてから家族を奪った。俺は・・・、お前たちを破壊する」

「世界よりたった1人を優先するというのか？」

「愚かな」

「世界を救わなきゃいけないなら俺が救ってやる。だがな、まずははやてを助けるためにお前たちを破壊してやる！」

ディケイドがライドブッカーからカードを取り出した。少しだけそれを見つめたあと、バックルへと装填した。

<FINAL KAMEN RIDER・DECADE BREAK  
ER>

今までのカメンライドやフォームライドのように特に大きな変化がある訳ではない。

変化自体は本当に僅かで、ディメンションヴィジョンの形状が禍々しくなり、シグナルポインターの光が黄色から紫色に変化したくらいで、じっくり見ても気付くかどうか微妙なものだったが

。

「さあ、破壊してやる」

かつての破壊者が再臨した瞬間だった。

KAMEN RIDE 07 それは世界の破壊者なの（後書き）

どうも、ゲホッゲホッ！

風邪を引いてしまい。咳が止まらない中頑張って書いてました。

咳のしすぎで喉が痛いです……。誰か助け……。て。

尚、クロス募集は終了とさせていただきます。

いくつかの提案、ありがとうございます。

KAMEN RIDE 08

悲しみに染まる心なの

KAMEN RIDE 08 悲しみに染まる心なの(前書き)

あとがきにはちょっとした解説が。ぜひ目を通してみてください。

これまでの仮面ライダーディケイドは。

御坂たちに別れも告げずにやって来た世界で、車椅子に乗る1人の少女　八神はやてと、彼女の守護騎士かぞくに出逢った。

土は商店街の福引でキャベツが当たるといふ、喜んでいいのかどうか、何とも微妙な結果を残した。

しかし、そのキャベツのお陰で土は八神家と出逢う事が出来たのだから、やはり喜び、感謝すべきなのかもしれない。

キャベツのお礼にと、夕食を御馳走になった。しかもある程度を端折りながら世界を旅している事を話すと、この街に居る間は何故か八神家に居候する事になってしまった。

それがきっかけで土はこの世界の事を知ることになる。

魔法や次元世界、時空管理局などの存在を教えられると同時に、何故八神はやてが車椅子生活なのかということも教えられた。もちろん、その解決策であろう手段も。

闇の書と呼ばれる本に魔力を蒐集すること。それが現状ではやてを助けることができる可能性がある唯一のものだった。

だから土は、はやてには世話になったからと、適当に理由を並べてシグナムたちに協力を申し出、毎日深夜になると異世界に渡って収集をしていた。

異世界といつても普段土が渡っているパラレルワールドとは違う。この世界を含む次元世界そのものが、土が渡る世界の1つであり、いくら転移魔法を使ったところで土と同じように世界を渡ることは出来ない。最も、土と一緒に渡るといふような手段を用いれば別の話ではあるが。

士が加わったことで順調に魔力を蒐集していったのだが、あともう少しというところではやてが倒れて入院してしまう。

時間はほとんど残されていない。だからといってはやてを放ったらかしにする訳にも行かず、お見舞いに訪れたのだが、それが悪かった。

なんとということだろうか。間が悪い事に、はやての友達もお見舞いに来てしまったのだ。それだけならば問題はないのだが、その中に以前から幾度となくシグナムたちと戦って来た、時空管理局の囑託魔導師である2人の幼い少女が含まれていた。

名を、高町なのはとフェイト・テスタロツサという。2人とも若干9歳にして既にEーS級魔導師であり、歴戦の戦士であるシグナムたちでもそう簡単には勝てない相手だった。

そして知られてしまった今、もう他に道は無かった。

「悲願はあと僅かで叶う」

「邪魔をするならばはやてちゃんのお友達でも」

戦って倒す。そうしなければ管理局に知られてしまう。

しかし戦いが始まってすぐ、彼らの元に2人の仮面をした男が現れた。横槍を入れるように現れた彼らは、闇の書の頁を埋めるためにシグナムたちのリンカーコアを蒐集する。

元々闇の書のプログラムであり、人間では無い彼女たちはリンカーコアが無くなれば消えるよりほかは無い。そして、服だけを残して身体は完全に消滅した。

駆けつけたザフィーラも抵抗むなしく蒐集され、辛うじて身体が存在している状態だった。

「なのはちゃん？フェイトちゃん？何なん？何なんこれ？」

仮面の男の片方によってビルの屋上にははやてが転送されてきた。その前に本物のなのはとフェイトを上空のクリスタルケージへと閉じ込め、男2人は彼女たちに変身する。

「ダメっ！ 止めてっ！ 止めてええええええええええええっ！」

「止めるおおおおっ！」

シグナムたちが消えた現状を知り、今またヴィータとザフィーラが消されようとしている現実に関わり叫んだ。

だがそれを打ち消さんとはかりにディケイドが大きな声を響き渡らせる。

はやての大切な家族を奪おうとする彼らにディケイドは完全にキレていた。

「お前たちははやてから家族を奪った。俺は・・・、お前たちを破壊する」

<FINAL KAMEN RIDE・DECADE BREAK  
ER>

今、世界の破壊者が再臨する。

見上げれば、いつもならば綺麗な星空が見えるはずの空。だが今は雲に覆われ、その輝きが地上に届く事は無い。もしも見えるならば、きつと怒りに囚われた心すら落ち着かせてくれるだろう。

だが、星は見えない。しかしその代わりに見えるものならある。それは空を覆う雲。などというくだらないオチではない。

その雲の下で、黄色い光が空を縦横無尽に駆け抜けていく。近付いてみれば実際には光では無く、1つ1つは薄っぺらいホログラムのような映像だ。端的に言うのであれば、ディケイドがファイナルアタックライドを使用した際に現れるアレだ。

何かを追いかけけるように空に軌跡を描き、それが向かう先には必死に飛び回って逃げている仮面の男の片方がいた。

「くっ、バカな！ この攻撃にこんな性能は無かったはずだっ！」

以前からたびたび異世界でディケイドが戦う場面を見ていた男は知っている。その攻撃が、本来このような能力を持っていない事を。ただ10枚のホログラム映像が相手に真っ直ぐ伸びていくだけだという事を。

しかし今はどうだ。どれだけの速さで、どれだけ軌道を変えようとも全く引き離す事が出来ない。それどころか確実に接近してきている。

このままではまずい。どうにかしなければ。そればかりを考えるが、頭は既に理解していた。それから逃れる事は出来ない、と。転移魔法が一瞬で出来るわけが無く、それは論外。

そうなれば最早残された手段はバリアを張って受けるくらいしか無くなるわけだ。

この攻撃の威力を知っている男は、本心を言えばもちろん受けたいはずが無い。だがそれしか方法が思いつかず、故にそうするしかない。

もう1人の男がホログラム映像に攻撃を加えてみたりもしたが、全く意味は無く、ただ魔力を無駄に消費するに終わっていた。

<FINAL ATTACK RIDE・de de de DE  
CADE>

「はああああっ！」

ホログラム映像が完全に男を捉え、電子音声が響いた直後、デイケイドが叫び声と共に映像から飛び出すように飛び蹴りの体勢で男へと迫った。

今だクリスタルケージに閉じ込められているのはとフェイトは、解除を行う傍らでそれを見ていた。

「あっ、追いつい」

なのはが最後まで言い切る前に、上空では爆発が起こった。爆煙からは隕石の如く、火炎球が物凄い勢いで1つビルの屋上へと激突し、先程に比べれば規模は小さいもののそこでも爆発が引き起こった。

「あれが・・・、あの人の力」

「凄い・・・」

彼女たちもまた、今まであの男たちによって色々被害を被っているのだが、何気にあの男たちは強く、中々勝てないのが現状だった。

それ故にデイケイドが強力な攻撃を叩き込んだことに感嘆していた。

デイメンションキックを喰らった男はといえば、屋上にある水が溜めてあるタンクに突っ込んだ様で、それが無残な形に変わっており、辺りは水浸しになっていた。

「当たる直前にバリアで軽減しやがったか。まあいい、次で」

< ATTACK RIDE・INVISIBLE >

呟きの途中でカードを使用し、インビジブルの効果で左右へ分裂するようにして姿が消える。

直後、デイケイドが居た場所にもう1人の男が飛び蹴りを放っていた。が、姿が消え、その場にはもういないデイケイドにそれが届く事は無かった。

「幻影か？ そんなバカな。どこへ行った!？」

どうしてなのだろうか。こういう切羽詰まった時、周囲を見回す行動に背後というものが入っていないのは。

男が懸命に辺りを警戒している背後の空にはデイケイドが姿を現し、カードも使わずにデイメンションキックを発動していた。

「はあああつ！」

「何っ!？」

10枚のホログラムカードが男へと伸び、そこを通過してデイケイドが迫る。

寸前で気付いた男は、もう1人と同じようにバリアを張って受けた。しかし、やはりというか受けきれるようなものではなく、バリアは木端微塵に砕け散った。

腕を交差させてガードを作った体勢のところへ飛び蹴りが叩き込まれた。バリアで威力が削がれているとはいえそれは今だ高く、もう1人と同じくタンクだったものがある場所へと蹴り飛ばされてしまった。

攻撃の手を一旦休めたデイケイドが彼らの元へと歩み寄っていく。すると

「猫耳？ それに尻尾か？」

「ぐっ……」

「よくも……」

何と驚いた事に、仮面の男の正体は猫耳と尻尾を生やした少女たちだった。かなりのダメージがあるであろう身体に鞭を打ち、何とか立ち上がる。

そんな彼女たちにデイケイドは冷たく言い放った。

「家族を奪われたはやての心の痛みはそんなもんじゃねえ。覚悟しろ」

< ATTACK RIDE・ONGEKIBOU REKKA >

「はあっ！」

本来ならば響鬼にカメンライドしてからでなければ使えないそれしかし今の破壊者・デイケイドにはそんなルールすら通用しない。

「きやあっ！？」

「くっっ！？」

音撃棒・烈火を装備し、振りまわすと何発もの烈火弾が放たれ、2人の猫少女や周囲に炸裂して激しく火花を散らす。

せっかく立ち上がった彼女たちだったが、追加攻撃でさらにダメージが蓄積して最早立っている事すらままならない状態になっている。

それでも倒れないのは彼女たちなりに何か意地の様なものもあるのだろうか。

「あまり長くこの姿になつてる訳にもいかねえ。次で終わりだ」

< ATTACK RIDE・MACH >

マツハのカードを発動する。その名の通り、音速まで速度が上昇する効果があるカードだ。これも本来はブレイドにカメンライドして使用するものだが、やはり今の姿には関係が無かった。

「速いっ！」

「どこへ行った！？」

< FINAL ATTACK RIDE・f a f a f a FA

IN>

その音声を猫少女たちが聞き取れたかどうかは定かではない。

一瞬にして彼女たちの周りに赤い円錐が出現した。その数は10。そのすべてが2人を捕捉している。

「やあああああつ　　何っ!？」

< 1 , 2 , 3 >

音速を保ったまま、デイケイドが1つ目の円錐に飛び込んだ直後、赤い鎧を纏った人物が円錐に背中を向けて立ち塞がり、低い電子音声が聞こえてきた。

< Rider Kick >

それはデイケイドにはよく見覚えのある姿だった。

その人物はベルト部にあるゼクター上部の脚3本それぞれに内蔵されたスイッチ・フルスロットルを押し、ゼクターホーンを一旦マスキドフォーム時の位置に戻して再び倒す。

そして、振り向き様に上段廻し蹴りを放った。それが向かうのはデイケイドが放つクリムゾンスマッシュ。

2つの蹴りが激突し、そこを中心に蹴りのエネルギーが集中し、ぶつかりあうそれは爆発のエネルギーへと変換される。

「うわあっ!？」

両者共に吹き飛ばされ、屋上を転がる。その途中、赤い鎧の人物から電子音声が発せられる。

< CLOCK OVER >

2人とも大したダメージでは無いようで、何事も無かったかのようにつきさすま立ちあがった。

赤い鎧の人物を視界に捉えたデイケイドは「お前……」と睨みをきかせた声で呟いた。

「カブトか……。どうしてここに居る？　紅渡の仲間の奴か？」  
その正体についてデイケイドが質問を投げかける　　というよりは気迫からして問い詰めているというべきか。

だが赤い鎧の人物　　カブトがそれに答える事は無く、いくつ

かに分裂するようにして消えていった。

「これは・・・、まさか」

「やあ、士」

カブトが現れた原因を何となく察しかけた時、それを確信に変える聞きなれた声が耳に届いた。

どこからかジャンプしてきたのであろう。ディケイドの隣にはシアンを基調とし、黒と白を含む鎧の人物が降り立った。

猫少女たちは微動だに出来なかった。突然現れたカブトが自分たちを助けたかと思えば、それが消えて変わる様にシアンの鎧の人物が現れた。

それが果たして自分たちにとって味方なのかどうか判断しかね、その場から動けずにいた。

それを知ってか知らずか、シアンの人物はディケイドと気さくに話をしていた。

「やっぱお前か、海東」

「久し振りに会ったっていうのに随分な挨拶だね」

「充分だろ。それより邪魔すんじゃないやねえ。こいつらは」

「士、もう止めたまえ」

シアンの人物は海東大樹という、士の仲間の一人だ。士がディケイドに変身するのと同様に、彼もまた仮面ライダーディエンドへと変身することができる。

そのディエンドだが、猫少女たちを破壊しようとしているディケイドへ、変身ツールでもあり主力武器でもあるディエンドライバーの銃口を向ける。

「何のつもりだ？」

「もう一度言う。士、その力を使うのは止めたまえ。君はもう破壊者ではなく、一人の仮面ライダーだ。だからそれを使えば・・・。それに、ナツメロンが知ったらあのツボを押されるんじゃないのかい？ 今なら黙っててあげるけど」

「・・・、海東」

「何かな？」

「ナツミカんだ、バカ」

バカ、と言い終わると禍々しい形状に変化していたディメンションヴィジョンが通常のそれに、額のシグナルポインターの色もまた紫色から黄色へと戻った。

本来のディケイドに戻ると突然ディケイドは崩れ落ち、その場に片膝をついた。すぐ傍に居るディエンドにはディケイドの息が荒くなっているのがよく分かった。

「ハアハア、くそっ」

「かなり息が上がってるみたいだから休憩するかい？」

「するわけ、ねえだろ、ハアハアハア。それに、さつきダメージは結構入れた。もうこのままでも十分　　って、おい！」

ディケイドが肩を上下させ、激しい呼吸のまま猫少女たちがいた場所に顔を向けると、そこにいるはずの姿が忽然と消えていた。

「お前のせいで逃げられただろうが！」

「酷いな。人のせいにしちゃいけないって習わなかったのかい？」

「習ってねえよ」

あの二人の目的は分かっている。それは闇の書を完成させること。ということ、少し前まで居たビルの上、つまりはやてが転送されてきた場所に向かったと考えるのが当たり前だろう。

そして案の定、そこへと向かう二人の姿があった。

ディケイドは舌打ちをし、ビルの屋上から隣の屋上へと跳び移って追いかける。ディケイドを見送りながら、ディエンドは『この世界のお宝は手に入りそうにないな』と呟き、オーロラの中に姿を消した。

一方、ディケイドが追いかけている二人はダメージから飛行速度が落ちているが、それでも真っ直ぐに向かっている分、中々追いつけない。

急ぎ戻らなければならないのに、と業を煮やしたディケイドはカードを使用する。

「ちっ、仕方ねえ」

<FORM RIDE・BLADE JACK>

ビルから跳んだ時に使用し、ビル同士の間あたりで光のゲートオリハルコンエレメントを通過し、ブレイド・ジャックフォームへと姿を変えた。

基本カラーは青であるブレイドの各部が金色のアーマーデアマンテゴルドに覆われ、胸部には驚の紋章が刻印されている。通常のブレイドに比べ、当然全ての能力が飛躍的に上昇し、さらに背中に装備されたオリハルコンウイングを展開することによって空中を飛行することも可能となっている。

次のビルの屋上に着地すること無く、ブレイドジャックフォームの飛行能力を使用して、猫少女たちと同様に真っ直ぐはやてがいるビルへと飛んでいく。

「アイツっ！ また姿を変えた！」

「このままじゃ追いつかれる。っ、アリア!？」

「私が食い止める！」

明らかに飛行速度が落ちている現状にて、はやての元にたどり着くまでにデイケイドに追いつかれるのは目に見えている。

もしも、デイケイドがブレイドジャックフォームになっっていなければ彼女たちの方がさきについていた事だろう。しかし彼も飛行して追いかけてくる以上、もうその可能性も消滅してしまった。

そうなれば目的を果たすための時間を作り出すよりほかに方法は無い。だから彼女たちは覚悟を決める。

二人の内、髪の長い少女の方が飛行を止めてデイケイドの進路上に立ち塞がる。アリア、それが彼女の名前だ。フルネームをいえばリーゼアリア。現在もはやてに向かっている髪の短い少女はリーゼロッテという。

名前からも何となく分かるかも知れないが、彼女たちは双子だ。二人とも名前に『リーゼ』が入っており、それを省略して『アリア』『ロッテ』と呼ぶことが多い。

ともかくそのアリアがデイケイドの進路を塞ぐ。攻撃するような

素振りは一切見せない。そのことから本本当に時間稼ぎすることだけが目的だということが伺える。

「行かせない！」

「邪魔だ！」

Dブレイドが持つ専用武器、醒剣ブレイドラウザー。ジャックフォームに変身した事により、そちらにも変化がある。

先端に追加された鋭い刃ディアマンテ・エッジによつて、切れ味・硬度も通常時の1.5倍にまで上昇している。

「はあっ！」

「っ！？」

アリアが展開したバリアをブレイドラウザーで斬り付ける。すぐに斬れると思っていたバリアはディケイドの予想よりも出力が高く、そう素直に斬れてはくれなかった。

「お前ら、そんなにはやてを不幸にしたいのか！」

「別にあの子を不幸にしたいわけじゃない！でも、世界を守るにはそうするしかない！それとも、一人のために世界を犠牲にしつつというの？」

「違う。どっちも守れって言ってんだ」

「それが出来ないから今こうして」

「だから俺が守る。邪魔するな！」

< ATTACK RIDE・SLASH >

剣とバリアがぶつかって火花を散らしている。それ越しに互いの主張をぶつけ合うが、やはり埒が明かない。

じっくり話し合えば分かり合えるのかもしれないが、今その時間はない。はやくしなければ闇の書に蒐集され、ヴィータもザフィーラも完全に消えてしまう。

焦りを隠しきれないDブレイドはカードを使用する。刀身にエネルギーが溜まるのを表す様に、それに白い光が宿る。

「はああああああっ！」

「くっ！？」



「あゝあゝ！」

しかしその声ははやてに届かず、彼らの声を掻き消さんばかりの絶叫が響き渡った。

直後、はやての直下から闇色に染まっている火柱に似た光が天へと昇っていく。

「我は闇の書の主なり。この手に力を。封印、開放」

<Freilassung.>

はやての身体に大きな変化が訪れる。身長が伸び、胸が膨らみ、お尻もより丸みを帯び、髪が伸びて雪の様な白銀に染まる。最早九歳の少女の影も形も無く、大人の女性らしい体つきになった別人がそこにはいた。

漆黒のバリアジャケットにその身を包み、頭部と背中には6枚の漆黒の羽根が存在している。

「また、全てが終わってしまった。一体幾度、こんな悲しみを繰り返せばいい?」

「はやてちゃん!」

「はやて・・・」

目を閉じたまま天を仰ぎ、涙している彼女になのはとフェイトがはやての名を呼ぶが、全くと言っていいほど届いてはいない。

「我は闇の書。我が力の全ては」

<Diabolic emission.>

彼女が空へ向かって右腕を挙げると闇の書が光を放ち、彼女の右手の上に内部で何かが動きまわっているような球体が現れ、一気に巨大化していく。

「主の願いのそのままに」

巨大な球体が空へと昇っていく。どう見ても攻撃してくる魔法である故に、なのはは防御の薄いフェイトを庇うようにシールドを張る。

「空間攻撃? 不味い、門矢さん! 逃げて!」

「何?」

「闇に、染まれ」

突然弾けるように広がってくる球体。フェイトの焦り様からそれが危険だという事はすぐに理解できた。

しかし自分一人逃げるわけにはいかない。すぐ傍にはロツテが起き上がれずにいるのだ。デイケイドがはやても世界も守るところを見せるために、彼女を見捨てるわけにはいかなかった。

「くそっ！」

< K A M E N   R I D E ・ K A B U T O >

< A T T A C K   R I D E ・ C L O C K   U P >

デイケイドとロツテが居た場所がデアボリック・エミッションに飲み込まれる。なのはとフェイトもまた同様に。

「隠れたか」

デアボリック・エミッションが消え去ると、その場には闇の書の意思を除き、一人も居なくなっていた。

彼女は流れていた涙を拭うと、静かに呟いた。

「主よ、あなたの望みを叶えます。愛おしき守護者たちを・・・、傷付けた者たちを今、破壊します」

< G e f ? n g n i s   d e r   M a g i e . >

魔法陣を展開した闇の書の意思を中心に結界が広がっていく。ただの結界ではなく、閉じ込めるために使用する捕縛型のそれ。結界を破壊するか術者を行動不能にしなければ最早脱出も許されない。

しかし莫大な魔力量を持つ闇の書の意思を倒せるかどうかとなると、現実的には微妙なところである。

「スレイプニール。羽ばたいて」

< S l e i p n i r . >

背中にある漆黒の羽根が一回り大きくなり、彼女はそれを羽ばたかせて飛翔する。

ゆつくりと空へ上がっていく闇の書の意思の元に、隠れていたフェイトが一気に接近し、ハーケンフォームのバルディッシュを用いて近接戦闘を仕掛ける。

金色の刃を発生させている斧が鋭く振り抜かれる。背後からの奇襲攻撃だというのに、闇の書の意味は全くと言っていいほど慌てるような素振りを見せず、冷静さを保ったまま片手を突き出してシールドを展開する。

金色の魔力刃が闇色のシールドに激突し、激しく火花を散らしている。一見すれば派手に見え、力が拮抗しているようにも見えるかもしれない。だが実際は闇の書の意味の圧倒的な出力のシールドの前に、フェイトの魔力刃は一切のダメージを通す事が出来ずにいた。「はあああつ！」

表情一つ変えず、淡々としたままフェイトの攻撃を受け止めている闇の書の意味に、再びブレイドジャックフォームへ姿を変えたデイケイドが現れて背後から斬りかかった。

彼女は大きな字になるように身体を横にすると、デイケイドに向けて出している右手の先に左手と同じく闇色のシールドを発生させた。< ATTACK RIDE・THUNDER > 刃が届く前にカードを使用し、刀身が電撃を帯びる。バチバチと音を立てる刃がシールドへ叩きつけるように振り下ろされる。

威力が強化された斬撃。だがそれすらも強力な魔法を幾度使用しても尽きない、莫大な魔力量を持つ闇の書の前では通用しない。斬撃はシールドで完全に防がれ、刀身が放電している雷は周囲の空間を駆けるばかりで、彼女には全く届かない。

「ふっ！」

二人の攻撃で足を止められている闇の書の意味に下方より緑色に発光している鎖が伸び、彼女の足を絡め取った。それは下方にいたマントを羽織った金髪の少年 ユーノが発動させた拘束魔法の一種・チェーンバインドだ。

さらには彼の隣に居るオレンジの髪に獣耳を生やした女性 アルフがリングバインドで右腕を拘束し、闇の書の意味を闇の書の意味を完全にその場に縛り付けた。

その隙に二人は距離を取り、フェイトは魔法陣を展開して砲撃魔

法発動の体勢に入った。さらに少し離れた位置では、既になのほまでもが砲撃の姿勢になっている。

それらをチラツと見た闇の書の意味は慌てる事も無く淡々と呟いた。

「砕け」

<Breakup.>

するとバインドはいとも簡単に砕け散り、ほとんどその役目を果たせずに終わってしまった。

<Plasma smasher.>

「ファイア！」

<Divine buster, extension.>

「シューート！」

フェイトは突き出した左手の先から、なのははレイジングハートの先端からそれぞれ強力な砲撃魔法を発射した。

二つの砲撃は闇の書の意味を挟撃する。先程のバインドが僅かに果たした役目としては、彼女から回避する時間を奪い取った程度だろうか。

しかし、この程度の攻撃が闇の書の意味に通用するのだろうか？

今までの流れからしてとてもそうは思えないのだが。

「たて」

<Panzer schild.>

闇の書の意味が両腕を左右に伸ばして防御魔法・パンツァーシルトを発動させると、やはり二つの砲撃は容易く防がれ、彼女には僅かなダメージを与える事も出来ない。

「刃<sup>も</sup>以て、血に染めよ。穿<sup>うが</sup>て、ブラッディダガー」

<Blutiger Dolch.>

パンツァーシルトを同時に発動させているだけでも高位の技術だというのに、闇の書の意味はそこからさらに射撃魔法・ブラッディダガーを使用する。

それはロククオン型の自動誘導型高速射撃魔法で、文字通り血の

色をした実体化する鋼の短剣を放つもの。さらには着弾時に爆裂の効果までも持ち合わせている。おまけに視認が困難なほど弾速が速く、遠隔設置も可能としている。

しかもその数ときたら1発や2発ではなく同時に22発という、一般レベルの魔導師からすれば考えられない数だ。

それらがなのはとフェイトに回避する時間すら与えず、一瞬にして到達し、爆裂し、彼女たちの姿は爆煙の中に消える。

だがそれだけでは飽き足らず、闇の書の意味は右手を前に出して詠唱を始める。

「咎人達に、滅びの光を」

足元にはミッドチルダ特有の円形の白い魔法陣が、右手の先には同じくミッドチルダ式の魔法陣が現れたのだが、それが放つ魔力光はあろうことかなのはと同じ桜色をしている。

そして驚くべきことに、その桜色の魔法陣の前では周囲に散らばっていた魔力が集束していく。

「あれは・・・」

「まさか!？」

アルフとユーノはそれが何なのか、よく知っている。故に無意識の内に驚きの声が漏れている。

「星よ集え、全てを撃ち抜く光となれ」

「スターライト　ブレイカー?」

桜色の光が次々に集束していき、中心で作り上げられていく球体はどんどん巨大化していく。その大きさは既に闇の書の意味の身長を優に超えるほど、だ。

「アルフ!　ユーノ!」

「うん」

「あいよ」

フェイトに名前を呼ばれた二人はそれだけで彼女が何を言わんとしているのかを察し、すぐさま闇の書の意味から全速で離れていく。

「おい!　どうすんだ!」

「門矢さんも離れてください！ 近くで受けたら不味いんです！」  
「ちっ、またか」

何回そんな魔法使ったよ、とDブレイドは吐き捨てながらカードを取り出し、バツクルに装填した。

<ATTACK RIDE・MACH>

「貫け！ 閃光！」

発射寸前になっていてそれから5人は全速で逃げていく。だがなのはただ1人、少し戸惑いを見せている。何故こんなに離れていくのか、と。

「ちよ、フェイトちゃん！ こんなに離れなくても！」

「至近で喰らったら防御の上からでも落とされる！ 回避距離を取らなきゃ」

「っ、・・・」

戸惑いを隠しきれないのはを、フェイトが引き摺る様にして飛んでいく。それに追従するようにDブレイドが続いている。マツハを使用している今、高速機動を得意とするフェイトについては大して問題では無かった。

距離を取ろうとしているには理由があった。フェイトが先に述べたように、スターライトブレイカーは防御の上からでも相手を落とせるほどの高威力を誇る。

だがその魔法は距離による威力減衰が著しく、ただ単に距離を取るだけでもかなりの威力を削ぐことができるわけだ。それが闇の書の意味が使用するものに適応されるかどうかは疑問が残らなくもないところではあるが。

しかしやらないよりはいい。とにかく全速で離れていくのだが、バルディッシュが何かの反応を感知し、それを告げた。

<Sir, there are noncombatants  
on the left at three hundred y  
ards.>

「えっ!?!」

この結界内に一体誰がいるというのだろうか。もし一般人であれば、すぐに助けに行かなければ間違いない闇の書の意味の攻撃に巻き込まれてしまうだろう。

距離を取ることもそこそこに、なのはとフェイトはそこへと向かう。それを放っておくことも出来ないDブレイドは彼女たちについていくのだった。

バルディッシュが反応を示した地点から左方向に300ヤード程の位置に、彼女は居た。

「・・・」

紫色の長い髪をした幼い少女は空を見上げ、沈黙している。その視線の先にあるものは、空に浮かぶ桜色の巨大な球体。

と、そこへもう1人、少女が駆け寄ってきた。

「やっぱり誰も居ないよ。急に人が居なくなっちゃった」

金の長い髪をしたその子も先の少女と同じように幼い。というか、どこかで見たことがある少女たちだと思えば、土がこの世界に来て初日に駅前商店街にある喫茶店の前でなのはたちと共に居たあの二人だ。

紫色の髪をした少女が月村すずか。金髪の少女がアリサ・バニングス。二人ともなのはたちの親友である。

「辺りは暗くなるし、何か光ってるし、一体何が起きてるの?」

「うん・・・」

「とりあえず逃げよう! なるべく遠くへ」

「う、うん!」

どう考えても尋常ならざる状況に少しでも離れるべきだと判断し、アリサがすずかを半ば引き摺る様にして走っていく。

<Distance: seventy, sixty, fifty, forty...>

「なのは、門矢さん、この辺」

「うん」

「分かった」

フェイトが反応が近い事を伝えると三人は地上に降り、周囲を見回してそれらしい人影が無いか探す。闇の書の意思のスターライトブレイカーはもう間もなく放たれるだろう。故にそれほど時間が残されておらず、彼らには焦りが生まれていた。

<Twenty, eighteen.>

自分たちは動いていないのに反応が縮まっている。より集中して周囲を見回していると、なのはの視界に人影が二つ映り込んだ。

「あの！ 危ないですからそこでじっとしてて下さい！」

「えっ？」

「今の声って」

「なのは、は？」

「フェイトちゃん？」

四人とも状況が飲み込めていたのか、緊急時だというのに茫然と立ち尽くしている。

「お前らっ！」

「あっ！」

遠くの方にあつた桜色の球体が地上に向かってレーザーの様に落ちた。着弾地点を中心に半球が巨大化して轟音を響かせながら彼らの元に迫り来る。

「お前ら、しゃがめ！」

「え？」

<ATTACK RIDE・METAL>

二人の少女たちの前に降り立ったDブレイドが覆いかぶさってメタルのカードを使用し、身体を鋼鉄化させて彼女たちを庇う。

<Defenser plus.>

フェイトがバルディッシュのカートリッジを2発消費し、三人を覆うように防御魔法・ディフェンサーを発動し、さらに前に降り立

ってシールドを展開する。

全員の前にいるのはもまたカートリッジを2発消費して防御魔法・プロテクションを使用する。

「レイジングハート」

<Wide area protection.>

なのはがプロテクションを発動させた直後、桜色の光が彼ら全員を飲み込んだ。

スターライトブレイカーは予想以上に威力が減衰していなかった。というのも、闇の書の意志自身の資質である『広域攻撃』の影響を受けているため、なのはのオリジナルにはない着弾時の威力の拡散、遮蔽物への回り込みといった広域攻撃魔法の特徴が付与されているからだった。

攻撃が収まると、Dブレイドは極力優しい声を意識して彼女たちに声を掛けた。

「もう大丈夫だ」

「すぐ安全な場所に運んでもらうから、もう少しじっとしててね」

「あの、なのはちゃん、フェイトちゃん」

「ねえちよつと！」

「え？」

アリスもすずかもなのはたちには聞きたいことが色々あっただろう。しかしそれは叶わず、ここに比べれば遥かに安全な場所へと移動させるべく、彼女たちの足元には魔法陣が現れ、どこかへと転移させた。

「見られ、ちゃったね」

「うん」

「そんな事より来るぞ！ 集中しろ！」

「あ、はい！」

彼らの元に闇の書の意味がゆっくりと舞い降り、地上から十数メートルあたりの高さで停止した。

Dブレイドはブレイラウザーを構え、臨戦態勢に入っている。し

かし何を呑気な事をしているのか、なのはもフェイトもろくに構えも見せず、突っ立っているだけだ。

「はやてちゃん！ それに闇の書さん！ 止まってください！ ヴ  
イータちゃんたちを傷付けたの、私たちじゃないんです！」

「シグナムたちと、私たちは！」

「我が主は、この世界が 自分の愛する者たちを奪ったこの世界が、悪い夢であってほしいと願った。我はただ、それを叶えるのみ。主には穏やかな夢の内とわで永久の眠りを。そして、愛する騎士たちを奪った者には永久の闇を」

「闇の書さん！」

「お前も、その名で私を呼ぶのだな」

「えっ？」

なのはが闇の書と呼ぶと、少しだけ悲しそうな顔をする彼女。だがすぐにそれは元に戻った。

「何っ!？」

闇の書の意味が足元に魔法陣を展開すると、辺りに地響きが起こる。地割れが起こり、その裂け目からはかつてデイケイドやシグナムたちがリンカーコアを蒐集した生物を思わせる触手が多数現れ、なのはとフェイトを縛り上げて拘束する。

デジャヴ？ などと思いながら、Dブレイドは自身に近づく触手を斬り裂いていく。なのはたちを助けるために駆け出したのはいいが、背後から近づく触手に反応が遅れ、Dブレイドを吹き飛ばす。

地面を転がりながらDブレイドは変身が解除され、デイケイドへと戻ってしまった。

「くっ！ お前ら大丈夫か！」

「な、なんとか」

「それでも、私は主の願いを叶えるだけだ」

触手に締め上げられ、苦しそうに呻き声を上げる二人に闇の書の意味は相変わらず淡々とした口調で告げる。

「願いを、叶えるだけ？ そんな願いを叶えて、それで！ はやて

ちゃんほホントに喜ぶのっ!? 心を閉ざして、何も考えずに主の願いを叶えるための道具でいて、あなたはそれでいいのっ!?」

「我は魔道書。ただの道具だ」

「だけど、言葉を使えるでしょ!? 心があるでしょ!? そうでなきゃおかしいよ。ホントに心がなきゃ……。心がなきゃ……。」「泣けるわけねえよな?」

闇の書の意味は確かに涙を流している。最初に流した時は誰に見られなかったが、今ははつきりと見られている。

ただの道具であればそんなことが出来るはずが無い。デイケイドもなのはもフェイトも、闇の書の意味に心はあると、そう思えて仕方なかった。だが。

「この涙は主の涙。私は道具だ、悲しみなど、無い」

「バリアジャケット、パージ!」

<Sonic form.>

闇の書の意味はそれを真っ向から否定する。だが涙を流しながらそんな事を言われても、説得力などありはしなかった。

フェイトがバリアジャケットを爆破させて触手を吹き飛ばし、なのは共々拘束から逃れ、同時にソニックフォームを起動させる。

「悲しみなど無い? そんな言葉をそんな悲しい顔で言ったって、誰が信じるもんかっ!」

「あなたにも心があるんだよ! 悲しいって言っつていいんだよ!」

「お前のマスターは、はやてはそれに応えてくれる優しい奴だ。だからお前がこんなことをする必要は無い!」

三人の懸命な訴えが届いたのだろうか? それまではすぐに否定していた闇の書の意味が、無言で反応を見せない。

と、再び辺りに地響きが起こり、今度は本当に火柱がそこらじゅうから立ち昇る。いくつものそれに驚き、見回していると闇の書の意味が呟いた。それは、デイケイドたちの思いとは全く逆の。

「早いな、もう崩壊が始まったか。私も直意識を無くす。そうなればすぐに暴走が始まる。意識のある内に主の願いを叶えたい」

<Blutiger Dolch.>

闇の書の意味はブラッディダガーを発動させ、各8発ずつそれぞれを包囲している。

「闇に、沈め」

ろくに反応する暇も与えず、三人を中心に爆裂し、爆煙が発生する。すぐにそれは晴れたが、そこに三人の姿は無く、少し距離を置いた後方にフェイトが二人を引つ張ってかわしていた。

デイケイドがカードをバツクルに装填し、フェイトはバルディッシュを構える。

「この駄々っ子が！」

<FINAL ATTACK RIDE・dedede DECADE>

「言う事を」

<Sonic drive.>

「聞けえっ！」

<Ignition.>

十枚のホログラムカード映像がデイケイドと闇の書の意味の間に出現し、デイケイドの跳躍に合わせて上昇する。

フェイトはソニックフォームの高機動で一気に接近する。

「お前達も、我が内で眠るといい」

「はあああああっ！」

「はあああああっ！」

デイメンションキックとバルディッシュの一閃が同時に到達する。渾身の一撃が同時に叩きつけられたにも関わらず、闇の書の意味のシールドはビクともせず、壊れる気配が全くない。

「っっ!?!」

攻撃している筈の二人が、突然自由を失ったかのようにゆっくりと落下を始めた。

「フェイトちゃんっ! 門矢さんっ!」

その身体はそれぞれの特有の色、マゼンタと金の薄い光が包み込

んでおり、2、3メートル程落下した辺りで彼らは弾けるようにして姿を消したのだった。

なのはの叫び声が、虚しく響いていた。

大変お待たせしました。ていうかまさかの事態に……。2話で終わらせるはずが不可能になりました。ということでのこの世界は3話構成になります。

「ブラッディダガー」を使用するシーンで「Bluttiger D  
oich」と書いてあったと思います。

中には

>>これって何て読むの？ブラッディダガーって読めなくね？

そう思われた方も居るかと思います。なので解説しておこうと思います。

これ、ブラッディダガーとは読みません。「ブルーティガードルヒ」と読みます。

>>何で？

ベルカ式の魔法はミッド式とは違い、英語では無くドイツ語で発音されます。

なのでブラッディダガーではなくブルーティガードルヒなのです。

だからカートリッジを使用する際にExplosion.という単語も

「エクスプロージョン」ではなく、「エクスプロズイオン」と発音したり・・・

そんなわけで、ちょっとした解説でした。

まあ大抵の方は知っていると思いますが、一応・・・ね？

旅の終わり  
K A M E N  
R I D E  
0 9

これまでの仮面ライダーディケイドは。。  
はやてから守護騎士を奪った、仮面を付けた二人の男。彼らを許せないディケイドは、かつて世界を救うために破壊者として戦っていたころの姿へと変身する。

破壊することのみに特化したその能力は言うまでも無く凄まじいもので、仮面の男達に反撃はおるか、まともに相対することすら許さない。

圧倒的な力で一方的に攻撃し、二人をビルの屋上へと叩き落とし、その後、マツハのカードを使用して疑似強化クリムゾンスマッシュを発動。赤色に染まっている円錐に飛び蹴りの姿勢で飛び込もうとしたその時。

「やあああああつ　何っ!？」

< 1 , 2 , 3   R i d e r   K i c k >

クリムゾンスマッシュの進路上に突然、赤い鎧の人物　カブトが現れ、必殺技であるライダーキックを使用して相殺する。

本来、この世界にいるはずのないカブトが現れたのは、土の仲間である海東大樹が変身するライダー、ディエンドが召喚したものだ。

偶然にもこの世界に來た彼が、ディケイドが破壊者へと姿を変える所を目撃し、止めに入ったのだ。

二人の仮面の男の魔法が解け、本当の姿である猫耳と尻尾を生やした少女達の姿になった、リーゼアリアとリーゼロッテ。彼女たちは尚も闇の書の完成を目指し、ついにその時が来てしまう。

起動してしまった闇の書は主である八神はやてを取り込み、その

身体は闇の書の意味である成人女性を思わせる姿へと変わってしまった。

デイケイドになのは、フェイトの三人がかりで攻撃を仕掛けるが、膨大な魔力を有する彼女を前に手も足も出ない。

闇の書の意味は自分を指して道具だと言い切るが、デイケイド達は彼女が心を持ってしていると信じてそれに呼びかける。

だが闇の書の意味は一向に心を認めようとしなない。そんな彼女に、デイケイドとフェイトが同時に攻撃を仕掛けたのだが、容易く防がれ、さらには何らかの魔法を使用したのか、闇の書の意味と、なのは前から二人の姿は忽然と消え失せてしまうのだった。

果たして、二人の行方は。

真つ暗闇の中、何かか聞こえてくる。何だろうと感覚を研ぎ澄ませ、聞き取ることに集中していると、次第それは大きくなってくる。だが、まだ聞き取るには小さすぎて、何が聞こえてくるのか分からない。

すると、今度は黒一色に染まっていた視界が突然真つ白な世界に変わった。しかし何が見えるわけでもなく、ただ真つ白な光景が広がっているに過ぎない。

一体何なんだよ。そう思っていると、聞こえていたものが少しだけ聞き取れるようになってきている事に気が付いた。

「きて　さい」

途切れ途切れでよく分からなかったが、それが誰かの声だという事は不思議と理解できた。何故ならば、記憶にしっかりと刻み込まれているそれ。忘れようにも忘れられるものでは無かったのだ。

その声のおかげなのか、急速に意識が覚醒していく感覚が伝わった。高所から落下していく感覚にも似たそれは、多少の爽快感を与え、嫌な気分ではなかった。



でも言うべき内容だった。

「おはよう、土君」

「おはようございます」

「ああ」

「ささっ、冷めないうちに食べようじゃないか」

一同が席に着き、ご飯を食べ始める。その間にも他愛も無い話が始まり、それが土に一般的な家庭でよくあるであろう何気ない日常を実感させる。

それは果てしなく、どこまでいっても平凡という言葉の域を絶対に出る事の無いもの。平凡すぎて面白味や刺激に欠ける日々だと感じるかもしれないが。

だがどうだろう。実際、平凡な日常というものは本当は幸せなものなのだ。贅沢なことを言わなければ何か不自由な事があるわけでもなく、日々を過ごして行ける。だが大半の人間はそれが当たり前すぎて幸せだと感じられないのが現実だ。

食事も終わり、いつものようにソファに踏ん反り返って、さて何をしようかと考えていると、夏海が話しかけてきた。

「土君、天気もいいですし、どこかに写真でも撮りに行きませんか？」

「ん？ ああ、いいぞ。じゃあ行くか？」

「はい」

「そういやユウスケと海東はどうしたんだ？ まあ海東はどうでもいいけどな」

「……、誰の事ですか？」

は？ 土の思考は停止した。数秒の後に再起動に成功すると、何言っただんだコイツは？ という疑問が生まれた。ユウスケも海東も旅の仲間だというのに、夏海は知らないという。

土は問いただしてやろうとして、それを止めた。

「まあいい。で、どこに行くんだ？」

「それはお任せします。土君が写真撮るんですから」

「お前が写真撮るんじゃないのかよ!？」

「はい」

呆れた奴だ、と土はため息を漏らす。

ソファから立ち上がると、マゼンタのトイカメラを首から提げて行くぞ、と夏海に声を掛けて写真館の外に出る。

やはりというか、外もやはりいつも通りだった。冬の空気はやらと澄んでいて、息を吸うとやけに新鮮さを感じられた気がした。

後ろについてきている夏海にヘルメットを渡すと、土はマシンディケイダーに跨って自分もヘルメットを被った。

夏海が後ろに座ったことを確認すると、マシンディケイダーを発進させる。

目的地も無いまま、ディケイダーを走らせる。どこに行きたいという思いがあるわけでもなく、ただ何となく、本当に何となくディケイダーを気の向くまま走らせ、気分次第で道を曲がる。

それを知ってか知らずか、夏海が何かを言ってくることも無い。どれほど走っただろうか。正確な時間は分からなかったが、そこその時間は走っただろう。

既に写真館からは結構な距離がある場所まで来ていた。今走っているのは海岸線。左手には青い空の色を反射して真っ青に染まっている海が見える。それだけでなく、太陽の光を反射してキラキラ光、幻想的な光景に見える。

すると、不意に土がスピードを落として進路を変えた。ディケイダーを止めたそこは駐車スペースになっていて、すぐ近くには浜辺へと続く階段がある。

「とりあえずちょっと寄るか」

「分かりました」

浜辺へと降り、ゆっくりとしたペースで歩を進める。少ししたところで土は歩みを止め、海へと向かってカメラを向けた。パシャッという小さな音が二人の耳に届いた。

「綺麗ですよ、海」

「そつだな」

「来てよかったです」

「ああ」

ちよつとあそこでゆつくりしないか？ と、土。彼が視線を向けている先には直径30cm弱程度、長さは1m50cm程度の本があった。おそらく海を漂流し、浜辺に打ち上げられたものだろう。

それに夏海が同意すると二人は腰を降ろし、黙って海を見つめている。ザザーツという波の音だけが聞こえ、それ以外の音が世界から排除されたかのように静かだ。

沈黙が続くが居心地は悪くは無い。むしろ、不思議と気分が落ち着き、癒されている様な気分でさえあった。

そんな状態がしばらく続いていたが、夏海がこの沈黙を少し小さい声で破った。

「土君、楽しいですか？ 幸せですか？」

「急に何だ？」

「私は楽しいです。私と土君、おじいちゃんの3人で平凡な日常を過ごしているこの日々が幸せです。土君はどうですか？」

「俺は……。まあ楽しいし、幸せなのかもしれないな」

改めて考えると、この平凡な日々はやはり幸せなのだ実感する。

「こんな日常も悪くない。だが、これじゃダメだ」

「え？」

「ただ平凡で幸せな日々を送るだけじゃ、デイケイドの物語にはならない」

「デイケ……。何を言ってるんですか？」

「演技は止める。本当はユウスケのことも、海東のことも知ってるんだろ？」

「……。どうして分かったんですか？」

「写真館で聞いたときにちよつと間があったからな」

夏海は立ち上がると数歩前へと進み、土へ振り返る。彼女は悲しそうな表情を浮かべている。

「最初この世界で目を覚ました時は今までの事が全部夢かとも思ったが、そうじゃなかった」

「でも今ならまだ夢の中で幸せな日々を送れますよ？」

「だが、それは夢でしかない」

「夢じゃダメ、ですか？」

ダメだ。土は力強く言い切った。それを聞いた夏海の表情はより一層悲しみの色が増す。

「どうしてですか？ 世界を旅するのは土君がディケイドだから。でもここにいれば土君はただ一人の人としていられるんですよ？」

夏海にそんな顔をさせてしまうのは心苦しいのだが、それでも土は彼女に同意する訳にはいかない。

土も立ち上がると数歩前へと進み、夏海の後ろへと回った。それに合わせて夏海が振り返り、土の背中を視界に捉える。

「確かにそうかもな。だけどな、世界を旅しているといろんな奴らに出逢える。自分たちの世界を守るために必死になって戦ってる、パンツ丸出しの奴ら。周囲全部に対して猫被ってる奴、中学生なのに超能力持っていたりする奴、魔法少女やってる小学生とかな。とにかくいろんな出逢いがある。俺はそれが好きなんだ」

「土君……」

「そんな顔するな。たまには帰ってやるから」

「ホントですか？」

「ああ」

だから。と続けながら土はさらに数歩、歩を進めて夏海に振り返った。

「今はこの夢から覚めねえとな」

「はい、待ってますから。約束ですよ？」

「分かってる」

これは夢でしかない。だが帰る場所があつて、帰りを待っていてくれる人が居る。そう思えるだけで土は心が暖かくなっていくのを感じた。

一抹の寂しさを感じるが、今は戻らなければならない。あの世界には士の助けを必要としている者がいるから。彼らを助け、また新たな出逢いをするために、戻らなければならない。

ディケイドライバーを腰に装着し、一枚のカードを取り出す。マゼンタを基調としているあの仮面ライダーが描かれているカードを。「変身！」

<KAMEN RIDER・DECADE>

九つの影が出現し、土に重なった瞬間に姿はディケイドへと変わる。そして同時に、今まで見えていた光景がガラス片の如く大きな音と共に砕け散り、ディケイドはマゼンタの光に包まれた。

海鳴市の海上上空ではなのはと闇の書の意味が戦っていた。なのははレイジングハートのエクセリオンモードを起動させており、つい今し方エクセリオンバスターを撃ち込んだところだった。

エクセリオンバスターによる光が収まると、すぐ近くには姿を消したフェイトが確認できた。

「フェイトちゃん！」

「フェイト！」

なのはの近くにはアルフとユーノがサポートに来ており、フェイトの使い魔であるアルフは心底嬉しそうな顔をしていた。無論、なのはもユーノも嬉しそうにしている。

と、そんな彼女達の耳に男性の声が聞こえてきた。どうやら上方から聞こえて来ているようで、ほぼ同時に見上げてみれば。  
「うおわっ!？」

ディケイドが落ちてくるではないか。アルフが手を突き出すと、魔法陣が描かれてディケイドはそこに着地することで難を逃れた。

「助かった」

「いや、別の良いけどさ。アンタも出て来れたんだね」

「まあな」

ディケイドとフェイトの両名が無事に戻って来れた事に、一同は安堵の笑みを浮かべる。だがそれも束の間、地響きが起こり世界が揺れる。それが、まだこの件が終わっていない事を認識させる。

「なんだありや・・・」

ディケイドの視線は前方のとある一点に釘付けにされていた。いや、ディケイドだけではない。この場にいる全員の視線が今、彼と同じものに釘付けにされている。

前方に一体何があるのか。結論から言ってしまうと、それが何なのかはよく分からない。しかし、少なくとも決して良いモノではない事は確かだ。

闇色に染まっている巨大な半球。その周囲にはこれまで闇の書が蒐集してきた、魔生物の身体の一部が具現化し、触手のように海から生えている。

すると突然、その半球の近くにあるいくつかの球体の一つが強い輝きを放ちだした。それらはすべて巨大な半球と同じく闇色をしていたのだが、輝きだしたそれは唯一白銀色をした球体だった。

太陽だといわんばかりに強い輝きを放つそれに、思わず腕で視界を閉ざす。数秒もすれば光は収まり、成人男性程度の大きさまで縮まった球体の四方には

「お前らっ!?!」

ディケイドは無意識に叫んでいた。もう消えて居なくなってしまうたはずの彼女達の姿があったから。守ることが出来ず、姿を見る事も声を聞く事も出来ないと思っていた。だが確かに今、彼女達はそこにいる。

「我ら、夜天の主の元に集いし騎士」

「主ある限り、我らの魂尽きる事無し」

「この身に命ある限り、我らは御身の元」

「我らが主、夜天の王・八神はやての名の元」

シグナム達がいるのならば、はやては？ ディケイドがそう思っ

た瞬間、彼女等四人が背を向けて囲うようにしていた白銀色の球体が砕け散った。

後には、黒い服をその身纏う、ディケイドが知る少女がいた。先程と同じようにディケイドが無意識にはやての名を叫ぶと、彼女はディケイドに向かって微笑みを浮かべた。

「夜天の光よ、我が手に集え！ 祝福の風、リインフォース。セー  
ーット、アップ！」

はやてを一瞬だけ白い光が包み込むと、彼女は白と黒と基調とし、一部に金色が入った騎士甲冑姿へと変わっていた。

白い帽子を被っているその頭は、ほんの僅かにだけ茶色味を含んだ白色へと変わっており、瞳もまた蒼穹の如く澄み渡った色に変化している。

「はやて・・・」

「すみません」

「あの、はやてちゃん。私達・・・」

「ええよ、みんな分かってる。リインフォースが教えてくれた。そやけど細かい事は後や。今は・・・、おかえり、皆」

「うわあああああつ！ はやてっ！ はやてっ！ はやてっ！ はやてっ！」

ポロポロと、ヴィータは大粒の涙を零して周囲を気にせずはやてに抱きついた。抱きついて来る彼女を優しく抱きしめるはやて。

そこにドンツと、軽い衝撃が走った。彼女達は今、足元に展開されている大きなベルカ式魔法陣の上に立っているのだが、そこにディケイドが跳んできたのだ。

「土さん・・・」

「俺からもお前たち全員に一言ある。おかえり」

「はい、ただいま。なのはちゃん、フェイトちゃんもゴメンな。ウチの子たちが色々迷惑かけてもーて」

「うっん」

「平気」

ディケイドに続き、近付いてきたのはとフェイトにも忘れず謝

罪する。と、そこにデイケイドが知らない少年が降りてきた。

「すまないな。水を指してしまうんだが、時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。時間が無いので簡潔に説明する。あそこの黒い淀み、闇の書の防衛プログラムが後数分で暴走を開始する。僕らはそれを何らかの方法で止めないといけない」

「策はあるのか？」

「君は門矢士だったね。すまないが立場上、君の事はある程度知っている」

「だろうな。別に構わねえが」

「そう言ってくれると助かる。それでだ、今のところプランは2つだ。一つ、極めて強力な凍結魔法で停止させる。二つ、軌道上で待機している艦船アースラの魔導砲、アルカンシエルで消滅させる。これ以外に、他に良い手は無いか？ 闇の書の主と、その守護騎士の皆みなに聞きたい」

クロノの判断は妥当なものだろう。この中で一番闇の書の事を知っているのは守護騎士達で間違いない。ぶっちゃけた話、それでも期待はかなり薄いだろうが。

「ええと……。最初のは多分難しいと思います。主の無い防衛プログラムは魔力の塊みたいなものですから」

「凍結させてもコアがある限り再生機能は止まらん」

「アルカンシエルも絶対ダメっ！ こんな所でアルカンシエル撃つたら、はやての家までぶっ飛んじゃうじゃんかっ！」

「そんなに凄えのか？ アルカンシエルってのは」

デイケイドの口から出た疑問は、なのはとフェイトも同じく疑問に思う事で、クロノに視線が集中していた。

「発動地点を中心に、百数十キロ範囲の空間を歪曲させながら反応消滅を起こさせる魔導砲、って言えば分かるか？」

「それはダメだろ」

「あのっ、私も反対」

「同じく、絶対ダメ」

「僕も艦長も使いたくないよ。でも、アレの暴走が本格的に始まったら、被害はそれより遙かに大きくなる」

「暴走が始まると、触れた物を浸食して無限に広がっていくから」  
クロノの説明に、なのはたちに続いて来ていたユーノが追加で説明を行う。要するに、放っておけばこの星そのものが闇の書の防衛プログラムに飲み込まれてしまう訳だ。

ならばアルカンシエルを持ちだしてくるのも分かる。しかし、それをこの場にいる誰もが認められない。

「何かないか？」

「すまない。あまり役に立てそうも無い」

「暴走に立ち会った経験は、我らにもほとんど無いのだ」

「でも、何とか暴走を止めないと。はやてちゃんのお家が無くなっちゃうの嫌ですし」

「いや・・・、そういうレベルの話じゃないんだがな」

どうにか解決策をと、話し合いが続くがいい案は一向に出る気配が無い。あーでもない、こーでもないと話しているところへ、デイケイドが面倒臭そうに割って入った。

「お前ら面倒臭い事言ってるじゃねえよ。お前らみんな魔法使えるんだからよ、この場でぶっ潰しちまえば問題ねえだろ」

「いや、そういう単純な話じゃ・・・」

「転送魔法って便利なものがあるんだ。宇宙まで持ってきてきゃ被害だつてねえだろ？」

「宇宙って・・・、本気か!？」

「ま、アルカンシエルがそこで撃てるってのが前提だけだな」

『管理局のテクノロジー、舐めて貰っちゃ困りますなあ! 撃てますよお、宇宙だろうが何処だろうが!』

「そうか。ところでお前・・・、誰だ？」

デイケイドがそう投げ掛けた直後、『ガンツ』と何かが固いモノに激しくぶつかった音が聞こえてきた。気にするほどの事でもないか、とスルーしたデイケイドは先程の声の主が額を抑えて涙目にな

っていたことは知る由も無かった。

「彼女はエイミー。アースラの優秀なクルーだ」

「で、その優秀なクルーが宇宙でもいけるって言ってたが？」

「……。実に個人の能力頼りでギャンブル性の高いプランだが、まあ、やってみる価値はある」

「防衛プログラムのバリアは物理と魔力の複合四層式。まずはそれを破る」

「バリアを抜いたら私たちの一斉砲撃でコアを露出」

「したらユーノ君達の強制転移魔法でアースラの前に転送！」

「後はアルカンシエルで蒸発、か」

プランは決定した。あとは実行に移すだけ。刻一刻と迫る暴走開始の時間。それは同時にプランの開始を意味している。

一同を張り詰めた空気が包んでいる。未来を大きく左右する一回きりのぶつつけ本番に緊張しない者はおらず、デイケイドですら緊張感を持っていた。

「あ、士さん、なのはちゃん、フェイトちゃん」

「どうかしたか？」

「ダメージが……。シャマル」

「はい、治療ですね。クラールヴィント、本領発揮よ」

<Ja.>

「静かなる風よ、癒しの恵みを運んで」

シャマルが治療のための魔法　　静かなる癒しを発動させる。

この魔法は至近距離の範囲空間内を対象とし、負傷治療、体力魔力回復、防護服修復の効果がある。

そして今、花びらにも似た緑色の小さな光がデイケイドとなのは、フェイトの三人を周囲を舞い、彼らを同時に回復させる。その身体からは今の今まであったダメージの痕跡が完全になくなっていった。

「湖の騎士、シャマルと風のリング、クラールヴィント。癒しと補助が本領です」

「シャマル、お前取り柄があってよかったな」

「そ、そんな！ 土君酷いです！」

弄られているだけだという事にも気付かず、本気で涙目になって抗議しているシャマルを見ていると、一同の緊張は何処かへと消えていた。

そうとは知らず、いじけているシャマルの頭をはやてがよしよしと撫でていた。シャマルが小さく『ぐすん』と声に出して言った気がしたが、真実はシャマルとはやてのみがしるところである。

「あたしたちはサポート班だ。あのウザいバリケードを上手く止めるよ」

「うん」

「ああ」

アルフ、ユーノ、ザファイラは後方でのサポートに回っており、バリケード 触手に手出しさせないよう徹する。

気合を入れ直したところで、闇の書の防衛プログラムに変化が訪れた。闇色の半球の周囲に同じ色をした柱が立ち上り、半球が膨らむ。

やがて柱が細い線になって消えていくと、泡が弾けるのと同じように液体の様に海へと消えていく。

「  
」  
本体の姿が視認できる。昆虫の様に六本の足を持ち、背中にはトゲのような物が、その横に黒い翼を思わせる物体があり、顔はもうこの世のものではない怪獣の様な姿形をしている。

さらに、その上部には銀髪に紫色の身体をした女性の上半身がある。それが声なのか音なのかよく分からない音声を出している。叫び声にも思えるそれは、何かを伝えようとしているのかもしれない。が、誰一人として分かる者はいない。

「チエーンバインド！」

「ストラグルバインド！」

アルフとユーノのバインドが触手を限界まで締め上げる。それに耐えきれない触手は切断され、闇色に染まる海の中へと消えていく。

「縛れ！ 鋼の軛くわ！ でえええりやあつ！」

本来は拘束魔法であるそれだが、今回は薙ぎ払うように使用され、防衛プログラムの前にある触手を一掃する。

触手を切断された防衛プログラムがまた叫び声の様な声を出している。まるで、身体の一部を斬られて痛いと呼んでいるように聞こえなくもない。しかし、止めるわけにはいかない。

バリケードが無くなったところで、まずはバリアを破壊するところから始まる。物理と魔力のバリアが交互にあるため、攻撃もまた物理と魔力を交互に行う必要がある。

「ちゃんと合わせるよ！ 高町なのは！」

「グイータちゃんもね！」

「鉄槌の騎士グイータと！ 鉄の伯爵グラーファイゼン！」

<Gigantiform.>

グラーファイゼンのハンマーヘッドが大きな角柱状のものに変形する。さらにそれを振り上げれば、より一層巨大なハンマーと化し、最初の何十倍というサイズになっている。

「轟天爆砕！ ギガントクラーラーーク！」

勢い良く振り下ろされ、バリアにぶつかると同時に轟音を生みだす。物凄い衝撃が辺りを駆け抜け、海の水が弾け飛ぶ様子がその威力を物語っている。

この攻撃は破壊力だけに着目すれば守護騎士の中でも最強の威力を誇る。巨大なギガントフォームを取り回すため、小回りが利かないうえにスキも大きくなってしまるのが難点ではあるが、相手が動かない防衛プログラムであればこれ以上にならないほど強力である。

そして、バリアには大きく亀裂が生じ、砕け散る。

「高町なのはとレイジングハート・エクセリオン、行きます！」

<Load cart ridge.>

レイジングハートから四発のカートリッジが排出され、先端を防衛プログラムへと向ける。

「エクセリオンバスターーーー！」

< Barrel shot . >

エクセリオンバスター発射前にバレルショットという衝撃波を放つ。照準・弾道安定・発射直後の暴発や拡散を防止するための補助魔法『バレル展開』を行うと同時に、その目標を逃がさないために不可視型のバインドを発射しているのだ。

この衝撃波が命中すると同時にバインドが展開され、目標を固定する。さらにその目標に対しては既に通り道が出来ているため、あとは本命の砲撃を放つだけという状態になっている。まさに今がそれである。

「ブレイクシューート！」

四発のバスターを同時発射し、それらが魔力バリアに激突する。さらに中央から一気に放出し、より威力を増してバリア破壊しようとしている。

防衛プログラムのバリアも強靱であるが、それですら数秒持ちこたえるのがやっとのようで、やはり砕け散った。

「剣の騎士、シグナムが魂。炎の魔剣、レヴァンティン。刃と連結刃に続くもう一つの姿」

< Bogenform . >

刃の柄尻に鞘を繋げるようにあてがうとカートリッジを一発消費し、弓の形態・ボーゲンフォームへと姿を変える。

魔力によって矢を創りだし、ギリギリつと弓を引き絞って狙いを定める。弓の上部と下部にあるカートリッジ排出口から2発同時に排出され、矢に集束するように魔力が上乘せされていく。

「駆けよ隼！」

< Sturmfaulken . >

音速の壁を超え、目にもとまらぬ速さで発射された矢が飛翔し、一瞬の間にバリアまで到達する。ヴィータのギガントクラークに勝るとも劣らない轟音が響き、爆炎と衝撃が発生しバリアを吹き飛ばす。

「フェイト・テストロッサ。バルディツシュ・ザンバー、行きます！」  
カートリッジが三発消費され、なのはと同じくフェイトもバレルショットを使用して拘束と同時に通り道を作り出した。

「撃ち抜け、雷神！」

<Jet Zamber.>

振るった魔力刃は防衛プログラムに向かって長大に伸び行き、容易く対魔力バリアを斬り裂く。しかもそれだけではならず、闇の書の身体の一部までも斬り裂いた。

「」

だが切り口からは触手が幾本か生え、砲撃を放とうとチャージを始めた。だが。

「盾の守護獣、ザファイラ！ 砲撃なんぞ撃たせん！」

触手と同じように切り口から白い槍を思わせる魔法が発動し、全ての触手を串刺しにして砲撃を撃つ暇を与えない。

「彼方より来たれ、宿り木の枝。銀月の槍となりて撃ち貫け！ 石化の槍、ミストルティン！」

彼方に現れた白銀色をした七本の槍が飛来し、避ける術を持たない防衛プログラムの身体へとその全てが突き刺さる。それらを中心に身体が灰色へと変色していき、一部が崩れていく。

だが、再生力は凄まじい。まだ無事な部分からグニョグニョと、次々に身体が生まれていき、何だかもう凄い事になっている。

「行くぞ、デユランダル！」

<OK, Boss.>

「悠久なる凍土 凍てつく棺のうちに 永遠の眠りを与えよ」

今度はクロノが魔法を発動させる。突然にして雪が舞い踊り、防衛プログラムを中心にそしてそれと海が広範囲に渡って凍っていく。

「凍てつけ！」

<Eternal Coffin.>

極めて強力な凍結魔法とはこれのことだったのだろう。防衛プロ

グラムは完全に凍りついた。凍ってしまった物は脆いもので、勝手に砕けていく。

しかしそこはさすが防衛プログラムと言ったところか。一度は完全に凍りついたというのに、持ち前の再生力で数秒後に動き出し、暴れている。

「ちよつと大人しくしてろ」

< ATTACK RIDE・BLAST >

シャマルが作ってくれた魔法陣の上に立っているディケイドはブラストのカードを使用し、ちまちました攻撃ではあるが、防衛プログラムは身体を確実に削り取っていく。

一つの山場を越え、残すは二つ。本体を吹き飛ばしてコアを露出させることと、それを転送すること。そこまでいけば後はアルカンスィエルが勝手に消滅させてくれる。

もうひと踏ん張りだと、気合を入れ直してなのはとフェイト、はやてがそれぞれ砲撃魔法の発射準備に掛かる。

「行くよ、フェイトちゃん！ はやてちゃん！」

「っうん！」

< Starlight Breaker >

「全力全開！ スターライトー！」

なのはの前で使用されてばら撒かれた魔力が集束していく。激しく集束していく光は巨大な桜色の光球を生みだして行く。

「雷光一閃！ プラズマザンバー！」

フェイトが持つ魔力変換資質によって魔力は雷へと変わり、彼女の周囲には稲妻が走り、その空間が帯電しているかのように見え、近付けば感電してしまいそうだ。

「ごめんな……。おやすみな。響け！ 終焉の笛！ ラグナロク

」

はやての頭上、及び左右に巨大な白銀の光球が形成され、黒い電撃の様な物を帯びている。そして。

「っっブレイカーー！ っっ」

三つの大威力砲撃が一点目掛けて同時に放たれ、防衛プログラムがある中心点では三つの魔法がぶつかり、混ざり合って最早どうなっているのか全く分からない。

数秒間の照射の後、砲撃が止むとほぼ同時に中心で爆発が起こった。それはまるで、核爆弾でも投下されたのかと目を疑いたくなるほど巨大な爆発で、轟音で耳が痛くなる。

「本体コア露出。捕まえ　えっ!?!」

「シャマル!　どないしたんや!?!」

「再生が早すぎます!　コアが捕まえられません!」

「何っ!?!　くっ、やはりダメか。アルカンシエルを撃つしか・・・」

「

「ダメっ!はやての家がぶっ飛んじまう!」

「そういう問題じゃ　」

そういう問題じゃない。クロノはそう言おうとしたが、一人の青年の声がそれに割り込んだ。大丈夫だ、と。

果たして一体何が大丈夫なのか全く分からない。暫し茫然として何も言えないクロノをよそに、デイケイドは続ける。

「今さっきこのカードが飛び出して来てな。なんとかなるだろ」

「なっ、そんないい加減な!」

「まあ任せろ。はやて!」

「え?　は、はいっ!」

「まだ頑張れるか?」

「・・・、もちろんや!」

はやての顔には余裕の笑みとでも言うべきモノがあふれんばかりになっている。なのはを始めとした八神家以外の者は不安や心配があるのか、あまり落ち着きがない。

しかし逆に、数日ではあるが土と一緒に過ごしてきた守護騎士達は妙に冷静さを保っていた。

「門矢、私達は先の攻撃でほぼ魔力を使い切った。今の様な攻撃をもう一度という訳にはいかん」

「それでもやれんのか？」

「ああ。お前らの主がもうちょっとだけ頑張ってくれればな」

「私が頑張ることと皆が助かるんやったら、いくらでも頑張るよ」

「お前がそう言うのであればそうなのだろうな。頼むぞ、門矢」

任せとけ、とディケイドは手に持っているカードをバツクルへと装填する。

< ATTACK RIDE・UNISON IN >

「へ？ うわああああつ！？」

カードが発動されると、突然はやての身体が本人の意思に関係なくディケイドの方へと引き寄せられていく。ぶつかる。はやては思わず目を閉じた。しかし予想に反して衝撃はいつまで経っても伝わってこない。恐る恐る目を開けてみれば、そこは上下左右もよく分からない、マゼンタに染まったただだっ広い空間だった。

ここは？ と思っただはやての頭に声が響いた。

『俺の中だ。精神の中、とかそんな感じか？』

「土さん……。まさかこれユニゾンなん？」

ま、そんなもんだろ。ディケイドの声が頭に響く。まさか人間の自分が融合騎みたくなるなんてな。と、はやては結構マイペースだった。

一方、外ではディケイドに変化が表れていた。ディメンションヴイジョンの色が緑から蒼へと変わり、背中にははやてと同じく黒い羽根が出現している。

周囲はもう呆れているのか、それとも驚いて声が出ないのか、とにかく静かだ。そんな彼らをよそにディケイドは一人、行動を起こしていた。

< FINAL ATTACK RIDE >

「はやて、合わせるよ。……。掛け声とかあった方がいいか？」

『え？ あ、そうですね』

「そうだな……。ディメンションラグナロクだったのでどうだ？ それっばい感じするだろ？」

『そうですね。ならそれで』

「ああ」

< de de de DECADE >

そしてデイケイドがバツクルを元の位置へと回転させて戻し、カードが発動される。

いつものように十枚のカードホログラムが現れ、再生し始めている防衛プログラムへと向かって伸びていく。のだが、それが三つある。デイケイドの頭上と、左右にだ。

デイケイドはライドブツカーをガンモードに変えて先端を防衛プログラムへと向ける。そして。

「デイメンション」

「『ラグナロク！』」

トリガーを引くと、銃口から放たれるはずのデイメンションプラストはそれぞれ一枚目のホログラムから放たれる。しかも本来はマゼンタカラーのそれが白銀色に変わっている。

そしてカードを通り抜ける度に直径が大きくなっていき、最終的に十枚目を通り抜けた時点で、はやてが放ったラグナロクと同程度の大きさになっていた。

その場から動けない防衛プログラムはただの的でしかなく、当然真正面から攻撃を受ける。どんどん再生しているそれだが、デイメンションラグナロクはそれすら上回る速度で抉り取っていく。

照射が終わるころには、先程のトリプルブレイカーと同規模の爆発を生み出した。いや、それより大規模だったかもしれない。

「これなら！ コアを捕捉 出来ません！」

「これでも、ダメか」

同規模以上の爆発だったという事は、単純に考えて今の砲撃はトリプルブレイカーに匹敵する威力を持つという事になる。だがそれでもコアを露出出来なかったのかと考えると、もう本当にアルカンシエルを撃つしか無くなる。クロノが落胆の色を濃く醸し出していると、シャマルが続ける。

「違います！ コアの反応が消滅して・・・」

「そうか、消滅して・・・。は？ そ、そんなバカな！？」

「ですけど、確かに消滅してます」

「何とかなつたな」

砲撃を終え、デイケイドが軽い口調で話しかける。彼の隣にはユニゾンが解除されたはやてが立っている。

デイケイドを見て、クロノは君は本当に無茶苦茶な奴だなと、呆れた様子で返すのだった。

それから一夜が明け、12月25日 クリスマス。

朝から空は厚い雲に覆われ、日の光が遮られている。だがどんよりとした空という訳でもない。今、この街には白い妖精 雪が

舞い降り、それらが積り、辺りは白銀色の世界へと姿を変えている。

そんな中、海鳴公園に土達は居た。

「なんでやリインフォース！ そんなんでええ！」

「主はやて、私はあなたに綺麗な名前と心を頂きました。騎士達もあなたの傍にいます。何の心配もありません。だから私は笑って逝けるのです」

「ずっと悲しい思いしてきて、やっと、やっと救われたんやないか！ そやのに・・・」

雪が舞い散る中、車椅子に乗るはやては涙ながらに訴えている。

悲痛な叫びは土を始め、なのはたちの心に重く押し掛かってくる。

それに従って、自然と表情も曇っていく。

だが、ただ1人、リインフォースだけは優しげな笑みを浮かべながら、はやての思いに答える。

「はい。私は救われました。主や小さな勇者達に。そして、そこにいる私の救世主に」

あまり顔には出さなかったが、土は『俺か？』と多少の驚きを感じ

じていた。一体全体、自分の何を指してそう言ったのかよく分からなかった。

しかしリインフォースがそう言うのだからそうなのだろうと、無理矢理に納得していた。

「主はやて、一つだけお願いがあります」  
「？」

「私は消えて小さく無力な欠片へと変わります。もしよければ、私の名はその欠片ではなく、あなたがいずれ手にするであろう新たな魔導の器に送ってあげていただけますか？ 祝福の風、リインフォース。私の魂はきつとその子に宿ります」

「リイン、フォース・・・」  
ついに耐えきれなくなつたはやてはボロボロと大粒の涙を零しながら、リインフォースの名を口にする。

そんな彼女が愛おしいのか、リインフォースはそつと、指で涙を拭った。次から次へと溢れて来る涙にそれは意味の無い行為ではない。だが大切なのは涙を拭うことでは無く、相手に優しく触れる事。ありつたけの愛おしいという思いを込めて。きつとそれははやてにも伝わったことだろう。

リインフォースは立ちあがると、はやてから数歩分の距離を空けて土の方へと向き直った。

「主はやて、守護騎士達、それから小さな勇者達。そして、私の救世主よ。ありがとう」

「・・・、変身」

<KAMRN RIDE・DECADE>

「最後はお前の手で私を眠らせてくれ」

「ああ」

デイケイドは微かに震える手で一枚のカードを取り出し、バックルに装填する。

<FINAL ATTACK RIDE>

「悪い。お前だけを助けられなかった」

「十分だ。私が眠りにつくこと、それが私にとっての救いだ」

「っ、バカ・・・」

< de de de DECADE >

ディケイド前にカードのホログラム映像が出現し、リインフォースに向かつて何枚もが出現して道の様に伸びていく。計十枚の映像が出現し終わると、ディケイドは彼女の悲しい旅を終わらせるために跳躍する。

「はあああああっ!」

映像を通り抜け、速度を上げながらリインフォースへと一直線に向かつて行く。そして、到達する。だが不思議といつものように爆発が起きることはなく、ディメンションキックが命中した瞬間に彼女の身体は光の粒子へと変わり、弾けるように霧散していった。

変身を解除した土はすぐ近くに止めてあったマシンディケイダーへと跨り、ヘルメットを被った。

「俺も行く」

「門矢・・・。もう行ってしまふのか?」

「ああ。これ以上此処にいたら、未練タラタラになっちまう」

「そうか」

「はやて達によろしく言つといてくれ。あんな状態じゃ別れの挨拶どころじゃねえしな」

土とシグナムの視線の先には、俯いて涙を流しているはやてと、彼女に付き添う守護騎士達となのは、フェイトの姿があった。

向こうは土が行こうとしていることに気付いていない様で、はやてを慰めるのに一生懸命になっている。

「ああ、分かった。また会えるか?」

「さあな」

「ふっ、お前らしい答えだ」

そうか? と土が返すと目の前にオーロラが出現する。じゃあな、と軽く手を挙げてマシンディケイダーを発進させ、オーロラの中へと消えて行った。

オーロラが消えた後もそこを暫く見つめていたシグナムだが。

「門矢、感謝している」

その眩きは積もっている雪に吸い込まれていき、誰の耳にも届く事は無かった。シグナムは踵を返し、主の元へと歩いていくのだった。幸せに溢れた明日へと向かって歩み出して行くように、力強く。

オーロラを通り抜けた先で土を待っていた光景は、緑溢れる中に建てられている、おそらくは校舎だと思われる建造物。

マシンディケイダーを降りると、付近を歩きまわってみる。するとやはり学校であるらしく、ちらほらと生徒が見受けられる。

「また学校か……。まあいいが、教師だけはごめんだな」

尚も校舎の周りを歩いていけるとどこからともなく声が聞こえてくる。それも一人や二人のものではなく、多人数のものだ。

~~~~~

耳を澄ませてみれば、それらは歌声だとすぐに分かった。学校という事から考えて、合唱部かそれに近いものだと土は判断した。

歌声が聞こえたのも束の間、ドーンという日常からはかけ離れたような衝撃音が聞こえてきた。結構離れているらしく、音自体は小さかった。

しかし気になった土は急いでマシンディケイダーへと戻るのだった。

KAMEN RIDE 09 悲しい旅の終わりなの(後書き)

やっとおわた・・・

本当は昨日のクリスマスイヴに合わせて投稿するはずだったので

(なのはの世界はクリスマスイヴなので)

こまめに保存していたのに何故か消え(ry

なのでマジギレしました。どうなったかといいますと、PCを破壊する勢いで殴りました。まあ壊れませんでした・・・

さて、なんだこのCパートは!?

Bパートより若干長いだろ?どうなっているんだ・・・

大して何があるわけでもないのに・・・。

まあそんなこんなで一旦、リリカルなのはA'sの世界が終わります。

さあ次の世界は。

KAMEN RIDE 10 「月の光は世界を照らします!」(仮)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6868n/>

仮面ライダーディケイド～私たちの救世主様～

2011年11月17日11時17分発行